
META[L] - メタル -

克太タツミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M E T A「L」 - メタル -

【Nコード】

N 5 7 2 1 E

【作者名】

克太タツミ

【あらすじ】

肉体の一部が機械と化す奇病、機械病。そんな病気が蔓延る時代、主人公ゴバンは、人体のパーツを内包する果実から生まれ出た、一人の少女と出会う。無感情な殺戮マシンだった少女は、次第にゴバンと心を通い始め、やがて二人は共に旅立つ。少女の、そしてゴバン自身の持つ「謎」の答を求めて。

序

その者は古より数千年の長きにわたり、深い眠りについていた。いや、それは生体的に見るならば完璧に死と呼べるものだ。呼吸や心臓の鼓動はもちろん、脳波も発していない。体のありとあらゆる細胞が停止している。

しかしそれは死か？

見方を変えれば死は躍動的だ。筋肉の硬直に始まり、数日後、腐敗は内蔵からやがて全身に及ぶ。細菌やバクテリアが、虫が、そして化学反応が、肉体を劇的に変化させていくのだ。

だがその肉体は少しの異常や欠損もなく、完璧な状態を維持しながらも停止している。凍結しているわけでも、特殊な液体に浸されているわけでもない。ただ横たわっているだけだ。

もちろん永遠に眠りから覚めることがなければ、それは死に等しい。だが実際そこにある体は「今動いていない」だけであって、やがて動きだす時を待っているのだ。まるで肉体だけが、流れる時の束縛から切り出されたかのように静かに——だがそれは魔法でも何でもない。紛れもなく、人知が生み出した力だった。

『科学』という、人類が頼るべき唯一の法則に従い、その者は目覚めの時を待っていた。

・
・
・

ゆらゆらと揺らめく金色の長髪が風に吹かれて揺れた。

揺れた？ いや、そんなはずはない。この部屋は特殊な部屋であり、空気の揺らぎなど起こり得ないはずだからだ。

部屋はただガランとしていて、天井とも床ともなく全体が青白く

ボーツと光っている。その中央に、一人の若い男が全裸で身じろぎもせず横たわって…いや――

動いたのだ。だからこそ髪が揺れた。長くウェーブがかった透けるような金色の髪。それはまるで、神が地上に与え賜った奇跡とも言つべき美しさだった。だが与えたのは神ではない。人間だ。もちろん均整の取れた完璧な肉体もそう。そして線の細い、美しい顔立ちが確かにピクリと動き、無表情な口元は笑みへと変わった。それが震えるように髪を揺らす。

「…フツ…フフツ……フハハハツ！」

部屋中に響く笑い。それに続いて瞳が大きく見開かれる。

「そうかつ！ウイルスはもう存在しないということか。いやいや、違った違った。私としたことが…フフツ…らしくない。変異だ。ウイルスは既に変異しているのだ」

その男は右手を動かし、自らの額に手をあてた。その動作といい、喋りといい、とてもなめらかでブランクは感じられない。ましてやそれが数千年来の目覚めだなどと、誰が想像できよう。

だがどうしたことが、その男の顔から、無表情であった頃の『神が使わしたが如き』美貌が消えた。さっきまでの奇跡のような顔立ちが消え、獣のような狡猾さを見せ始めたのだ。

「ノイマノイドの時代はこれより終わる。かつてのあるべき姿への回帰だ…」

男は一人ブツブツと呟き続ける。だがそれは、決して独り言というわけではなさそうだ。

「お前たちはそこで待機しているがいい。もう少しだ。お前たちを統べる者がくる。間もなくだ。実りの時を待て。お前たちは最強の戦士に変わりはない。が、同時にmorosamohawasette持っ存在なのだ。——フフツ、もっとも…見た目ほどではないか…」

一瞬、男の顔が淫猥に歪む。男は確かにこの部屋以外の何かを見ていた。

「そうだな。3人ほど私の部屋へ入ってこい。その儂き肢体を我が手に抱くとして。フフツ…少しは人間へ近づけてやる…」

言葉を終えてもなお残る笑み。

やがて一時、男の顔はさっきまでの無表情に戻った。いや、少し違う。何かを思い悩み、沈んでいるようにも取れる。だがすぐ再び目を見開くと、その顔はやはり獣のように狡猾に——だがそれだけではない。男の顔とでもいうべき顔が、そこに確かに存在したのだ。無表情な時にはあり得なかった、人間としての美しさ、汚さ。それらをひつくるめて、人は野心と呼ぶ。

「おぞましい。ウイルスと共生してなお生き残る半ノイマノイドなど…」

その拳はワナワナと震え、誰に対してでもなく、ただ自分に言い聞かせるように男は呟いた。

「取り戻すぞ。私の理想を…」

少女再生

「おい、ペソアあ。洞窟の中にドナーツリーが生えるかよ。おい待てって！」

しかし既に、男がペソアと呼ぶその姿はどこにもない。繁茂するツル植物の隙間を縫って、その向こうにある洞窟の中に入ってしまったらしい。男はあきらめたように首を左右に振ると、腰に差した刃渡り40センチほどの山刀を鞘から抜いてツル植物をなぎ払っていった。

「ペソア！」

再びの男の呼び掛けに洞窟の中から…

ギヤアッ！

と、よく響く声で返してきた。人の声ではない。鳥か獣か——いずれにしろ意味は不明だ。

「まったく分つかんねえな。さっきは得体の知れねえガキ相手にギヤアギヤア騒ぐしよー。今度はなに、洞窟？ちゃんと仕事して欲しいもんだよなあ…」

ひとしきり枝葉をなぎ払い山刀を収めると、男はあきれ顔で栗毛色のウェーブがかった長髪をバリボリと掻いた。髪は革の紐で一本にまとめられている。

「しゃあねえな」

そう言うと、男は暗やみの中に足を踏み入れていった。

洞窟の中は初夏の外気とは違ってひんやりとし、肩口から出た男の二の腕をブルルツ！と、震わせた。手に持った携帯式の灯油ランプの熱も、それほど暖の足しにはならない。

「うー、マント置いてくんじゃなかったな…。おい、ペソア。どこよ！」

自然が生み出した一本道の洞窟をしばらくの間歩いていると、やがてキラリ…と、前方で何かが光った。

「ペソアか？」

間違いない。丸く浮かび上がるブルーの球体。ペソアが持つ唯一の眼球——顔の中央に存在感をもって占める輝きだ。体型、サイズともに中型の水鳥を思わせ、特徴的な翼竜の骨格標本によく似た翼ユニークだ。しかもそれらに羽毛や毛並み、皮膚というものは存在せず、金属的というか、少なくとも硬質だった。言わば機械鳥なのだ。

そしてどこから射し込む光なのか？それを受けて、ペソアの体全体が白く浮かび上がって見える。

「洞窟の中に光…？」

一心に何かを見つめているペソアの元まで歩み寄ると、男は差し込む光の方角に顔を向けた。

そこは偶然が生み出した自然のオアシスとでも言うべきか。突然開けた洞窟の天井付近は大きく縦長に割れていて、そこから太陽の光がさんと降り注いでいたのだ。そして実際、その細長い天窓

は黄道上に添って完璧な角度で開かれており、季節による若干のズレはあったものの、ほぼ1年中、洞窟内に陽光を運んできたのだった。

「あっ!？」

男は思わず声を上げた。その日向の中央には、彼が求めているものがあつたからだ。

まさかこんな洞窟の中に木が——しかも『ドナーツリー』が自生しているなど、考えもしなかった。ペソアの特技はそれを見つけることであり、彼は見事に仕事を果たしていたことになる。

「ナッツ付きだぜ……」

男はヒュツと軽く口笛を吹く。そのガツシリとした幹の低木は緑で生い茂っていて、太陽光が届くとはいえ、とても洞窟の中で育まれたとは思えない枝ぶりだ。そしてその根元近くには木のサイズからすれば余りに不釣り合いな、1メートル程もある巨大な実が一つだけ、ぶら下がるようにして生っていた。固そうな外殻に包まれていて、男が『ナッツ』と言ったのはそのことだろう。

男は足取りも軽く、腰の山刀を引き抜いて近づいていったが、ナッツのすぐそばまで近寄ると突然、大きく天を仰いだ。

「くあーっ！これ腐ってんぞ」

そのナッツは一部分が割れていて、その隙間から黒っぽい液体が染みだしているのが見て取れた。近づくとかなり臭く、なんとも言い難い腐敗臭を発している。ハ工等の虫がたからないのが不思議だが、このドナーツリーの葉は、昆虫を寄せつけない独特の匂いを発するらしいのだ。人間には感じ取れないが。

「ン…岩の破片！？これのせいかな？」

男は気が付いた。恐らくは最近天井の岩が崩れ、ナッツに直撃したのだろ。断面は鋭利で、風化の跡はない。

「あゝあ、もったいねー」

大きくため息。

「ま、こういうこともあるかな…」

一度実を付けたツリーは来年には枯れてしまう。それだけに貴重だったのだが…

男は山刀を慣れた手つきでしまい、あきらめて踵を返そうとしたその時だった。背後から気配が――そして同時にペソアが激しく鳴き叫んだ。

ギヤアツ！ギヤアツ！

「小僧、動くんじゃねえ！」

チャキリ…と、銃の撃鉄を起こすような音がした。足音からして一人ではない。少なくとも5、6人はいるようだ。それに未だにペソアが同じ場所で鳴き叫んでいるところを見ると、たぶんそいつらに捕まったのだろ。ドナーツリーを前にすると、なぜかペソアは魅入られてフヌケになるのだ。

「なんだよいきなり。お仲間かな？」
ベクター

相手を伺い見ようとすると、それを制止させるヒステリックな声

が響いた。

「う、動くな！」

同時に銃声がバンツ！と、響く。

それは男の脇を抜けてナッツの堅い外殻をかすめた。思わず動きを止める。

「なんだ…盗賊か。まったく人が先に見つけたもんを——でもさあ、悪いけどこのナッツ腐ってんぜ。見ろよ」

男は背後の人間がいぶかしむよりも素早い動作で山刀を引き抜くと、ナッツの割れ目の部分に刀を当てた。カッン！と音を立て、割れ目は大きく広がる。やがてどす黒い粘性の液体と共に、中の腐った大きな果肉がボトリ…と、落ちてきた。辺りに臭気が広がっていく。

「うつ…」

盗賊らしき男は、背後で明らかな嫌悪を示した。

それにしても腐っているとはいえ、殻の中から出てきたのは果肉というより——何か動物の死体のようにさえ見えるが…

「仕方ないよね。あきらめて帰んなよ」

男は優しくそう言った。どのみち男には山刀以外武器らしきものがない。下手に出るのが無難と判断したのだろう。

だがその時…

「ハンツ！そりゃあ確かに残念だったなあ——」

さっきまでの男とは明らかに質が違う。しゃがれたような、しかも落ちていた声の主が介入してきた。

「——ザバル・ドツタ様への献上品がもう一つ増えると思ったんだがな。そのナツツパーツとお前さんのよ。え、ゴバン・シャノム」

ゴバンと名指しされた男は表情を変えた。今度こそ振り返り、しゃがれ声の主を確かめる。が、射し込む陽光が生みだす影に邪魔されて、相手の姿は確認できない。もつとも、声だけで十分だったが…

「…久しぶりだな。ロブラン」

「フン、ようやく見つけたぜ…」

ロブランはゆっくりと影の中から歩みだし、その大柄の体と、それを守る鎧。しかし何よりも目立つ鉄色に輝く右腕を、陽の光にさらした。

しかしその姿を『鎧』の一言で片付けてしまっていていいものかどうか——何しろその右腕のサイズは、体のバランスからして余りに大きい。まるで巨大な義手だ。

不可解さは左腕にもある。

右腕とは違い、体に見合ったサイズの左腕だが、肘から下が金属でできている。しかも二の腕との接合部はあくまで自然に、鉄色から徐々にグラデーションして肌色に移行しているのだ。更に言えば彼の左目も肉眼ではない。まるで毒蛇の目を思わせるような黄色の義眼だ。目の周りから頬にかけてはやはり金属。それは顔に金属を張りつけているというより、まるで皮膚そのものが元々金属であるかのような…

「おっと！そうそう。その腰のマチエーテ（山刀）は外してくれる

か。一応な。ゆつくりとだ」

「チッ！武装解除かよ。でもこれは道具だぜ。武器じゃねえ」

「人殺せるモンはみんな武器だ。外せ」

ゴバンは素直に腰の山刀を地面に放り投げた。

「それでいい。言つとくが例のアレもダメだぜ。上みりや分かるだろうが…生き埋めになりたくはねえだろ？」

ロブランは何のことを言ったのか？しかしゴバンは理解したようだ。チラリと上を見上げ、ここが洞窟の中であることを再認識すると、顔をしかめた。

ロブランは後ろの部下に対して目くばせを送ると、ゴバンに対してこう言った。

「生け捕りつてのが命令だ。妙なマネはするなよ。もし妙な動き見せたらズドンだ。ただしお前じゃなく…こっちな」

ロブランは手に持っていた銃を、部下が抱え持つペソアに向けた。
ギヤアッ！ギヤアッ！！

いったんは静まっていたペソアが、再び騒ぎだした。言葉を解する知能はないが、気配で分かるのだろう。骨組みのような翼をバタつかせて抵抗している。

「——汚ねーのな相変わらず。なんで俺を狙わねーのよ？」

「バカが。お前に効かねー銃を向けてどうすんだよ。それにザバル・ドッタ様は、お前の肉体に興味をお持ちだ。傷付けるわけにもいかねえ。…もつとも、どうやってたらその体に傷を残せるのかオレも知りてえとこだがな…」

ロブランは不敵に笑う。

「エツチ…」

無表情のままゴバンは言った。

だがゴバンの体はロブランとは違い、少なくとも露出している部分に関しては生身でしかない。とても銃弾をはねつけるようには見えないが…

ロブランの部下たちも、ゴバンを捕えるために陽光の中に姿を現した。その姿はやはり、体のあちこちに金属の部分があり、その場所も人によってまちまち。場合によっては腕がロボットアームのようになっていたり、胸に銃がくっついていて異なる異様な人間もいた。ゴバンが顔色を変えないところを見ると、それが普通なのだろう。

ゴバンは考えている。だが、自分だけならどんな窮地も抜けられる自信はあったが、ペソアが確保されている限りは動きようがない。少なくともペソアは彼にとって、ただのペットではないのだから…

その時だった――

「えっ!?!」

最初に気付いたのは、ゴバンに近づこうとする部下たちの一人だった。彼の目は両目ともにカメラのレンズ状で、その目の良さゆえなのかも知れない。

太陽光の下で分かりづらくはあったが、地面に落ちたドロドロの腐った果肉が、膜を覆うように微かに光っていたのだ。反射光ではない。それは徐々に光を増し、突然、フラッシュのごとく強烈に輝いた。

「うわっ!」

レンズ男が目を覆うようにして倒れた。他の誰もが動きを止め、ゴバンだけはかろうじて薄目で、今もなお強烈に輝き続ける光の根

源を確かめようとした。

光の中で何かがうごめいている。さっきまで腐っていたはずの、原型を失いかけていた果肉が確かな形を取り始めたのだ。輝きの中の微かなシルエツトとしてゴバンにもその、まるで時を逆回転させているかのような光景を目にすることができた。

「再生していく…」

そんな言葉が口から出た。

それはこの世界で、どんな宝石よりも重要視される樹木が生み出す果実。ナツツパーツと呼ばれるものの姿だ。だが、一度腐ったものが復活するなど前例がない。

最初に光の中から抜け出てきたのは、手だった。人間の。しかも女性の手だ。続いてもう一方の手。それがまるで光そのものを切り開くようにして両手を広げると、全体の姿がはつきりとあらわになった。全裸の、生身の女性がそこにいる…

光は途端に消えた。

ゴバンは一瞬辺りが真っ暗になったような印象さえ受けたが、それは眩しさから解放されたためだ。今でも洞窟内に陽光は射し込んでいる。

女性はやや前傾姿勢のまま、ゆっくりと歩きだし、その行きしなに一瞬だけゴバンに目を向けた。それは強烈にゴバンの心を捉えて離さなかった。少なくとも彼に一瞬だけでも意識を向けたはずなのに、その無感情さはなんだろう？ 鋭いわけでもなんでもない。ただその無機質なライトグリーンの瞳にゾツとなった。ゴバンは動けず、ただ女性が歩きゆく様を見送る。当然、ロブランの手下たちの間にもどよめきが起こった。

「あ…え！？ パ、パーツが…ナツツパーツが動くなんて…」

部下の一人が愕然としながら、手に持った銃を女性の顔に向ける。彼も怖かったのだ。その無機質さが。

そして恐怖は引き金を引かせるに十分だった。

バンッ！

だがゴバンはすぐに悟った。なぜ彼女が前傾姿勢で歩いていたのかを…

女性はまるで弾の弾道が分かっていたかのような正確さで態勢を低くし、ギリギリで銃弾をかわすと、そこから人間離れたダッシュを見せ、地面に落ちていた山刀を拾った。腰まで伸びた長い金髪が生き物のようになびく。まるで猫科の動物を思わせる俊敏な動き。そして…

「あひゃっ！」

それが男の最期の声となった。

女性はその男の生身の部分であった首筋を、全く迷いのない動作で切り裂いたのだ。鮮血が霧のように吹き出す。女性の動きは止まらない。次々と部下たちの体の、むき出しになった肉体部分に刃を向ける。首が金属でできている人間には別の急所を。急所に生身の部分が見当たらない場合には、数ヶ所に及ぶ殺傷により、相手を致命傷に至らしめた。的確だが恐ろしいほど淡々とこなすその姿は、殺人というよりは単なる作業――

「なっ…なんだあコイツぁ！」

ロブランが叫ぶ。

既に6人の部下たちは、ペソアを抱えていた者も含め全て息絶えていた。前傾姿勢でロブランを標的に見定めた女性の背後では、血しぶきが今も屍から吹き上がっている。

「クソがつ!!」

銃口を向けるロブラン。だが向けられるその先に女性がいること
はなく、銃弾もまるで意味を為さず擦り抜ける。冷静に、的確に、
ロブランの手の動きを読んでいるのだ。そしてその読みを具現化す
る素早さで一気にロブランの目の前まで詰めると、銃を持つ左手ごと、
下から山刀で叩き付けた。金属の左手は切り裂かれることなく
ガキン!と、弾かれる。

「このっ!」

ロブランは残った巨大な右腕で、懐に入ってきた女性を抱え込も
うとするが、それも空を切る。既に女性はさらに低く屈み、次に一
気に伸び上がると、スキだらけになった右の首筋——その生身の部
分へ刀を突き刺そうとした。身長差はあるが、刃の長さはその差を
埋めるに十分だった。

「よせええええっ!!」

たまりかねたゴバンがついに叫んだ。もちろんそんな言葉は手遅
れに思われた。だが女性は彼の声に、ピタリ…と、動きを止めたの
だ。そしてゴバンを見る。

ロブランはそのスキを見逃さず、返しの右腕で女性を振り払う。
巨大な金属の腕だ。直撃すれば鉄の板をも凹ませるだけの威力があ
る。女性はハッとして我に返り、後ろへバックステップするが間に
合わなかった。鉄の腕が、残った彼女の右腕をかすめたのだ。衝撃
を吸収するためのいなし動作ともあいまって、女性はキリ揉み回転
しながら吹き飛び、背後の岩肌に体を激しく強打した。

「うっ!」

初めて女性が発した言葉——いや、うめき声だ。

「このアマぁ……」

女性は一瞬体を起こそうとしたが、すぐに力なく崩れた。だが尚も体を起こそうとする。その時ゴバンは見たのだ。彼女の苦悶に歪む顔を。今にも霞もうとする瞳を。そこに人間を見た。

ロブランは怒りと共に彼女へ歩み寄る。その、今も立つことができずにいる女性に、最期の一撃を加えようと右腕を振り上げた。

「ヤメロツ!!」

再びゴバンが声を荒げた。斜に構えながら、左の手のひらをロブランに向けている。その動作にロブランは顔色を変えた。

「お、おいゴバンよ。そんな脅し俺には通じねえぞ!」

だがその言葉を全く無視し、彼は手のひらを向けたまま歩み寄る。

「おいまさかつ!?!よせ!衝撃で崩れるかも知れねえって…そうなりやお前だってタダじゃ済まねえんだぞ!」

「——見たくねえ…」

「な…なんだと!?!」

「これ以上殺しは見たくねえ…消えろ」

ゴバンの押し殺すような声。

「こ…殺されたのは俺の部下だぞっ!このアマどうしようが俺の…俺の……」

「…耳ねーのかよ」

ロブランの言葉が止まった。これ以上何か言えば、確実に撃つ。そう感じたのだ。

「クッ！」

ロブランは捨て台詞も吐けず、退散せざるを得なかった。小さくなっていく足音が完璧に消えるのを確認すると、ゴバンはゆっくりと左手を下ろした。

…キュルルル

気のマズさを感じているのか、ペソアが控えめな声で、洞窟の端の方でホバリングしながら健在をアピールしている。だが、翼の骨組みに差し渡された青く美しい光の膜も（飛ぶための機構だろうが、構造は謎だ）、ゴバンの目を引くことはなかった。今はただ、気を失っている全裸の女性をジッと見つめている。

殺しから最も遠い場所にいるような美しい金髪の女性——いや違う。少女だ。或いは自分よりも年下なのではないか？と、まだ17歳になったばかりのゴバンは思う。

そのあどけない顔と、一目見て分かる柔らかな皮膚には、既にあちこちに擦り傷や、打ち身によるアザができていた。白く、透明感のある皮膚には痛々しすぎるほどに…

ゴバンはやがて、ようやくといった感じで顔を上げ、額に手のひらを当てる。そして、ため息混じりにポツリとつぶやいた。

「——なんだよ…これ…」

ルーマ

近くを流れる清水の音は、徐々に勢いを増す焚火の音に取って代わった。いつしか黄昏は追い出され、木々の影が火を取り囲むようにして踊り出す。途端にそこは世界の中心となり、星空に捧げる炎と化した。

ゴバンは不意に体を震わすと、手に持っていた替えのシャツに素肌を通した。焚火の熱が風の冷たさを実感させたのだろう。しばらくの間ボーツと思案にふけていたので、上半身裸でいたことをすっかり忘れていた。

ブルブルブル…

少し離れた所で、木に繋がれた1頭の馬が息を吐いた。そのすぐ傍ではペソアが本当の鳥のごとく、顔を後ろにして寝ている。

だが実際そこにいる『馬』は、馬ではない。顔から首にかけてはラクダに似ているが、長い尻尾といい、二足歩行する後ろ足といい、むしろ小型の肉食恐竜を思わせる。ラウズと呼ばれる、この世界の一般的な移動手段に使われる動物だ。（便宜上ここでは馬と呼ぶことにする）

だがこのラウズには、他のラウズにはめったに見られない大きな特徴があった。それは、後ろ足だけが機械でできているという点だ。もちろん、他のラウズも体の半分ほどは機械でできている。この世界では常識だ。しかし移動手段として使われるラウズにとって、足が機械ということの意味は大きい。当然、より速く、持久性に優れた走りが可能になるのだ。

ゴバンはこのラウズに「カポン」という名前を付けて可愛がっていた。彼の生れ故郷の言葉で『世話のやける』という意味を持つ。つまり逆に言えば、人間の世話（整備）なしに、この機械の足は維

持できないということでもあるのだ。

ゴバンはカポンの後ろに繋がれている、大八車を思わせる荷車を見つめた。その上には棺が紐で縛り付けてあって、本来ならばこの中に収穫したナッツパーツを入れ、ゴバンを雇っているポリスまで運んで換金する。1体売ればそれだけで、数か月は遊んで暮らせるだけの価値を持つもの。それがナッツパーツだ。

だが今日手に入れたナッツパーツは…

「!？」

不意に感じた気配にびっくりして、ゴバンは息を飲んだ。いつしか少女は瞳を開き、ゴバンをジッと見ていたのだった。その姿がゆらりと揺れる。一瞬ドキリとするが、違う。パチパチと音を立てる焚火が空気を屈折させたのだ。

あの時に見た信じられないスピード。次々に人に襲いかかる少女の姿が浮かんだ。

少女はゴバンが着せてやった大きめのシャツを着て今は身じろぎもしないが、いざ動きだせば一気のスPEEDで間を詰めることができるだろう。それほどに速かった。そしてもちろん、ゴバンはそうなることを期待してなどいなかったが、覚悟はしていた。

「起きたのか？」

しばらく待ったが答えは返ってこない。ゴバンは構わず続ける。

「なんであいつらを殺した？あいつらは怯えてただけなんだぜ。いきなり殺すことはなかっただろうがよ」

何を聞いてもムダだとは分かっている。それでも、相手が人間だろうがそうでなかるうが、許せないものはある。

だが何も返らない。今もただジツとゴバンを見ている。ゴバンは仕方なく少女から目をそらし、焚火に薪をくべながら、フウ…と、ため息をついた。

やはりこのナツツパーツも、他と同じように白痴なのか？

一瞬、そんな考えが頭を過ぎった。だが、動く——まして戦うナツツパーツなど聞いたことがない。

「——お前は…誰だ…」

突然の少女の声に驚き、ゴバンは顔をはね上げた。

「お、お前、喋れんのかよ？」

「私の質問に答えていない。お前は誰だ」

だが、どこまでも抑揚のない喋り…

「お前こそ俺の質問に答えねーくせに…」

ゴバンは言い掛けて止めた。

「——チツ！まあいいや。俺はゴバン・シャノム。お前は？」

「……」

「おいオメーいい加減に…」

腰を上げようとしたゴバンを見て、少女が体を起こそうと素早く右手をついたその時。

「イツ痛！」

激痛に再び倒れこむ。ロブランにやられた場所だ。だがその少女

の顔は、何よりも人間を感じさせる。ゴバンはすぐさま走り寄って彼女を起こそうとするが、少女はそれを許さなかった。ゴバンにも見切れない動きで、手刀を首筋に突き刺す。

ガッツ！

「イテッ！」

「イタッ！」

二人同時に叫ぶと、少女は痛々しく拳を押さえ付けた。ゴバンも首を押さえるが、それほど効いたようには見えない。

「手の早えー女だな。イチチ…おい、平気か？」

少女は手を押さえながらも、キッとゴバンを睨む。気付いたようだ。——彼の体の不思議さに。

「お前は何だ！？」

「…ラチあかねえな」

ゴバンは顔をしかめて髪の毛をバリバリ掻き、やがて言葉を続けた。

「しゃあねえ。俺の秘密見せてやんよ。その代わり、お前も自分のこと話せよな」

少女はうなずかなかった。座ったまま、ただジッとゴバンを観察するように見上げる。

「えっと…そうだな。一番手っ取りばやく…」

ゴバンは地面に置いてあった山刀を取り、鞘から引き抜くと、柄を少女に向けて渡した。怪訝そうに見上げる少女。ゴバンは悪戯そうに笑いながら、右腕を彼女の目の前に突き出した。

「じゃあよ。それで俺の腕切り落として…」

ザンッ！！

血が飛び散る。速い！

「お、お前なあっ！！イツ…イテテテ…」
「？」

少女は不思議そうに、右腕を押さえて痛がるゴバンを見る。

「少ししか切れないぞ？」

その余りの純真な瞳にゴバンは勢いをそがれ、顔をしかめながら苦笑した。

「フツ―躊躇しないかな？」

「お前がやれと言った」

「…そうだけだよ、心の準備ってもんが…あーイテ。それよりこれ見ろよ」

ゴバンは自分の腕に付いた刀傷を、少女によく見えるように近づけた。

それはまるで魔法のようだった。傷が目に見えて回復していくのだ。

「再生していく…」

「ああ、これ以上は切ろうとしても切れない。刀ぐらいじゃな。固いんだよ。それに表面が傷ついててもすぐに治っちゃう」

「なぜだ？」

「知らね。生まれつきだからよ。おかげで村追い出されたり…って、まあその話はどうでもいいか」

少女は一旦ゴバンの顔を見て、再び傷口を熱心に見つめた。本当に熱心に…ゴバンにはそれが嬉しくもあった。いささか常識外れではあるが、強い好奇心を持つのは彼女が間違いなく人間である証だ。ただ、今も脳裏に過ぎる洞窟での惨事が、消しがたいものであることもまた事実なのだが…

「じゃ、お前のことも話せよ。お前は何だ？」

ゴバンは少女の言葉をマネるように訊ねる。

少女はあらかた傷口が閉じるのを見終えると、やがて顔を向け、こう言った。

「——分からない…」

一瞬だけ顔をしかめるゴバン。

「ああ、生まれたばかりで誰だったのもねえか。じゃあよ、洞窟でのコトは覚えてるか？」

少女はしばらくゴバンをジッと見つめ、少しだけ間をあけてから話し始めた。気を許し始めているようだ。

「最初の映像は——気が付いたら私の前にはお前がいて、別の場所からは人間の気配を感じた。だから殺さなければいけないと思った

んだ」

「…なんで？」

ゴバンは、高ぶりそうになる声を押さえながら訊ねた。

「分からない。ただ、その時にはそう思った。何か大きな力が頭の中で働いて…」

「何だ？その大きな力ってのは？」

「分からない」

「じゃあ今は？俺を殺したいと思うか？」

すると少女はキョトンとした顔を向け、こう言った。

「あの時も私はお前を殺そうとは思わなかったぞ」

「…なんで俺だけ？」

「だって、お前は这个世界の人間じゃない」

一瞬、二人の間に沈黙が流れた。

「お…おい待てよ。俺は人間だぞ」

少女はただクールにゴバンを見つめる。そこには明らかな否定の意味が込められていた。

——人間じゃない——

それは彼の中に眠る、消えることのない業を呼び覚ます言葉…ギヤアッ！

突然、ペソアが叫んだ。

「？」

「人間が来る…」

つぶやくように少女は言う。まだ視界には入らないが、彼女には分かるようだ。すると、遠くから金属的な音が近づいてきた。

キュラキュラキュラ…

カシヨンカシヨンカシヨン…

「なんの音だよ？」

それは徐々に大きくなり、やがて焚火の光が、人間とは思えない二つの奇異な影を浮き立たせた。

「おーなんだあ、こんな山中で火イ焚くなんざあよ。ベクターじゃねえんかあ？」

野太い声が、不穏な金属音を押し退けるように響いた。そして甲高いがもう一人、男の声。

「…にしちゃあ今どき小規模すぎですぜえ」

現われたのは下半身がキャタピラになった巨大な髭スラ男と、足が機械の痩せ男だった。

「おっ！棺だぜアニイ。間違いないよ。ベクターだ」

痩せ男は嬉々として馬車へ近づいていった。
ガシッ！ガシッ！ガコン！

「あーでもやっぱカラだわアニイ」

痩せ男は棺の鍵を壊して中をのぞき見ると、そう言った。カポン

も興奮して、ブルブルと鼻息を荒く吹き出す。

「ま、ナッツパーツなんざめったに拝めるモンじゃねえやな。それより見るよ。あの二人よ、ほとんどまっとうな肉体だぜ。棺がカラでも十分だ。パーツ代わりに売っちまわぁーな」

「そりゃあいいッスねえ」

まるで人間離れた二人は、明らかにゴバンにも聞こえるような声で算段している。

だがそれは、ナッツパーツを探すことを生業とする者の宿命と言ってもいいだろう。つまりそれ程の価値と、逆に言えば希少性。そして運ぶ者への危険性を合わせ持つ存在。それがナッツパーツなのだ。盗賊たちは彼らを単に『ベクター』（運び屋）と呼び、今ではそれが定着していることから、その危険度が知れる。

ギヤア！ギヤアア！

危険を感じたペソアが青い光を発しながら飛んできて、ゴバンの肩の上に止まる。

「おい…」

ゴバンは盗賊たちに背を向けながら、静かに、しかし明らかに不機嫌な口調で少女に訊ねた。

「…今は人間を見て殺したいとは思わねえのか？」

少女は首を小さく横に振った。

「なにも…それにもう大きな力も感じられない。ただ、あの人間が私を傷つけようとするなら別だ。自己防衛が何より優先する」

ゴバンは少女の手から山刀を奪い返すと、それを腰の鞘に閉まった。

「それ聞いて安心したぜ。ここは俺にまかせろ」

ゴバンは振り返り、機械人間二人と対峙した。

「さあてつと。お熱い別れの言葉は済んだっかなあ？ヒヒッ！ねえ、アニィ。終わったらちよつとだけ。あの女、気に入っちゃってさあ。いいスかねえ？」

痩せ男は機械の足をカシャカシャと忙しく足踏みしながら、淫猥な表情を少女に向けた。

「ケツ！好きにしろ。だがよ、俺のように生殖器まで機械になっちまった不幸モンにやあ面白くもねえんだ。さつさと済ませよ」

「へえへえ、ウヒッ！たあーのしみだなあ…つと！」

突然だった。まったく来るそぶりも見せていなかった痩せ男が、機械ならではの脚力で一気にゴバンの目前までダッシュし、千枚通しのように鋭く尖った指で眉間を刺しに来たのだ。だがゴバンには痩せ男の動きがよく見えた。少なくとも少女が振り降ろした山刀のスピードに比べたら、スローモーションだ。

ゴバンは苦もなくそれを避けると、人間の肉体ではあり得ない、固く、そして強烈な肘打ちを、痩せ男の延髄にお見舞いした。

「ゲヘッ！」

そこは機械ではなく、ただの肉体だった。痩せ男は一発で気を失い、倒れる。そして洞窟の中と同様、ゴバンは左の手のひらを髭ツ

ラ男に向けた。

「はあっ？なんのつもりだあ、小僧」

髭ヅラ男は持っていたライフル銃を既に構え、スコープのように目盛りの付いた機械の瞳がゴバンを狙っていた。だがゴバンはまるで動じない。

「俺は今機嫌よくねえのよ。その自慢の下半身壊されなくなかったら、今すぐUターンして帰んな」

「な、何言ってやがんだバカが。もうこっちはとくにテメーの額に照準合わせてんだよ。それに俺の自慢は足じゃねえ。この目だよコイツあどんな速えー動きも捉えんだぜ。だから避けようったってムダだあ。小僧」

「じゃあ撃つてみな。無くなんのはオメーの足だ」

ゴバンは不敵な笑いを見せる。

「クツ、この！」

髭ヅラ男は感情にまかせ、躊躇なく長身銃を撃ち放った。銃声が森に響く。

ビシッ！

完璧な射撃で、それはゴバンの眉間を捉えた。銃弾の勢いもそのままに、ゴバンの顔が後ろに弾かれる。額から出た血が糸を引く。だがそれだけだった。弾丸はゴバンの皮膚を抜けることなく跳弾したのだ。

「——これ、お返しな」

前に突き出した手のひらが、一瞬光に包まれた。そして…
ドゴオオッ！

銃などとは規模の違う、雷鳴のような空気の割れる音が響きわたった。手のひらから何かが打ち出されたのだ。

ゴバンの左腕が反動で大きく後ろに弾かれる。いや、少し違う。まるでブロウバックするピストルのように、ヒジと二の腕の間がスライドしたのだ。後ろに飛び出したヒジと、二の腕の間の皮膚は裂け、まるでチーズのように糸を引いて伸びる。機構そのものは正に機械。だが、見た目は極めて生体的だ。そして手のひらの内側から皮膚を突き破り、5センチ径の砲弾が射出された。あるうことが、彼の手首よりも太い弾が…

ガッンッ！！

「えっ！？」

髭ヅラ男は理解できていない。だがもはや下半身のキヤタピラは装甲を貫かれ、大きく開いた穴から紫色の煙が立ち昇っていた。弾の性質なのか、爆発は起きない。

「——いつ、ひっ…いでえ…いでえよ…」

状況を把握した途端、髭ヅラ男は叫び出した。機械の体に神経が通っているのかは怪しいものだが、内部全てが機械とも限らない。出血はないようだが…

「死なねーよ。この男が目え覚ましたら仲間と連絡取ってもらいな。機械パーツの交換ならオメーらでもできんだろ」

ゴバンはクルリと背を向け、少女の元まで歩いていくと、不機嫌そうな顔を更にしかめた。

「イチチチ…」

よく見れば大砲を撃った手のひらと、ブロウバックしたヒジの辺りからはボトボトと血が流れ落ちている。もちろん、さつきと同様に次々と細胞が再生していつてはいるのだが…

「クソツ！だからコレ使いたくねえんだ…それよりここはよくねえや。河岸替えようぜ」

少女の口元は無表情ながら、明らかな好奇心を瞳に宿らせていた。

「お前のその手…どうなってるんだ？」

「知らね。生まれつきだからよ」

・
・
・

憎しみはあった。

虐待がいつから始まったのかは覚えていない。少なくとも一番古いその子供の記憶は、血のこびり付いたナイフを持つ母親の姿だった。他の子供と違うからなのか？いくら傷つけても治癒してしまいう体が疎ましく思えたからなのか？そうだ。やがてその体が、両親の精神的なけ口を一心に受けることになるのだ。

だが彼らは忘れている。それでも子供に痛みはあるということ。あつという間に治癒しようが関係ない。痛みはあったのだ。傷つける者たちに、いつしか心の痛みがなくなろうと…

だから憎しみを持った。父を、母を憎んだ。食わせてもらわなければ生きていけない弱みが腹立たしかった。やがて子供は、自ら村

を出ていくはずだったのだ。波風を起こすことなく、誰に気にされるでもなく、当たり前前に消えるはずだった。

——なぜ、あんなことができると思ったのだろうか？

子供には以前から、左手に感じる違和感というものがあつた。何度が夢に見ることもあつたし、夢から得た産物は、眠りにつく前の空想として利用されることもあつた。だがそれが現実に行けるなど……ある日のこと。子供は憎しみの巢でもあつた自分の家に左腕を向けた。それは戯れに過ぎなかったに違いない。だが憎しみは本当だ。全ての怒りを、高ぶる神経を手のひらに集約させたその瞬間——運も悪かった。飛び出した弾丸は家の脇にあつた燃料用タンクに命中し、あつという間に引火、爆発した。そして唐突に憎むべき対象は消えたのだ。

以前から誰もが子供を異端視していたし、村の人間にとっては、いいきつかけに過ぎなかったのだらう。村からは自ら出るのではなく、追い出されることになるのだつた。

だが一人だけ、子供を曲がらない眼で見る者がいた。旅立ちの日、占星術師の老婆は子供に語りかける。

「十六夜の丘に立つ幼子や。世の流れなる物の怪に翻弄されることはない。天に過ちはなく、全ての物象に奇跡はあれど、唯一無二は存在しない。されど全ての存在は唯一無二でもある。天とはそういうもの。その矛盾ゆえに掴めぬもまた天。

幼子や。同じ宿星を持つ者は必ず存在する。出会いなく果てたる者の背にあるは挫折。そして暗黒。挫折なければその先に軌跡が開けるは必然。それも天の配剤よ。

幼子や、同じ宿星を求めて生きよ。そしてそれを愛せ」

そうして老婆は背を向けた。それが村との最後の繋がりであれば、子供はどんなにか救われたことだらう。

——お前は人間じゃない——

それは老婆と行き違いに飛んできた村人の罵声だった。まさかそれがその後、延々と憑いて回るとは、その時は考えもなかった。

・ ・ ・

「お前、名前は？」

揺れる焚火を挟んで、ゴバンと少女の二人は向かい合っていた。彼は取りあえず自分自身に対する疑問を、今は抱かないことにした。そんなものは昔から考えてきたし、答えも出ていない。それよりも今は重要な疑問が山ほどあった。

「知らない。私の中にある記録には少なくともない」

「記録？ああ、記憶な。ま、生まれたばかりだしな」

しかし少女は首を振って否定した。

「違う。私は生まれたばかりだが、たくさんの記録を持って生まれた。だから言葉も話せるし、戦い方も知っているんだ」

「ああ、よく知ってるさ。お前の強さは」

ゴバンは肩をすくめる。

「でも私は自分が何なのかも知らない。生まれた時に私を操ろうとした力のことも…」

少女の目が伏し目になる。新鮮だった。今、こうしている間にも、少女の表情は確実に増えているのだ。本人はそれに気付いて

いるのだろうか？

「じゃあよ。俺が付けてやろうか？お前の名前」

少女が意外そうに顔を上げた。

「私の？お前がか？」

「なんだ不満かよ」

少女はゴバンの目をただジッと見る。少なくとも否定はしていない。

「よし、お前の名前は——」

一瞬の間。

「ズバドン！俺の故郷の言葉で『最も速い者』って意味だぜ。どうよ、気に入ったか？ズバドン」

少女は目を逸らした。とても微妙で分かりづらいが、何か気に入っていないような…

「なんだダメかよ。——いい名前だと思ったんだけどなあズバドン…」

その時、ゴバンは不意にあることを思い出した。今思えば故郷で数少ない友達とも言えた占星術師の老婆。彼女が胸に飾っていたライトグリーンの宝石。あれは確か…

「『ルーマ』ってのは？意味は分かんねえけど、昔知った婆さんが

付けてた宝石の名前なんだ。お前の瞳の色とよく似てる」

少女は再び瞳をゴバンに合わせる。そして心なしか頷いたような気がした。

「じゃ、決まりだ」

ゴバンは満足そうに微笑んだ。

「明日は取り敢えずポリスに戻るかな。ルーマもいつまでも俺の服ってワケにもいかねえし……しばらく面倒みてやんよ」

「ポリス？」

「ああ、都市のことさ。山のふもとに『プラタナ』ってポリスがあつてよ。俺はそこに雇われてるベクターなんだ。ま、詳しいことはおいおいな」

しかし何か気掛かりがあるのか、ルーマはどこか考え深げだ。

「ん、何よ？」

彼女の表情に気付いたわけではない。ただその時の彼女の無言に限って、ゴバンは気になったのだ。そしてそれは、ルーマの言葉を引き出すに絶妙のタイミングでもあった。

「……私が生まれた時、まだ何かの力に操られていたようなあの時、考えていたことがあって――」

しかしなぜだろう？ゴバンはさっきから、そのタイミングを逃さずに話し掛けている。それが彼女を急速な『心の解凍』に導いていることは確かだ。それは敏感とか鈍感とかの類ではなく、人と人と

の繋がりの中にはごくたまにあることなのだ。波長が合うという存在が…

「——私はある場所へ行かなくてはいけないらしい。そう命令されていたのを思い出したんだ」

「どこよ？」

「ずっと北の方だ。場所は分かってる。でもそこが何なのかは知らない。行ってみないと…」

「ふーん…ルーマはそれ知りたいのか？」

コクリと頷くルーマ。

「よしっ！俺も付いてってやるわ。面白そうだし」

ニヤリとゴバンは笑う。しばらくの間言つべき言葉を探していたルーマだったが、やがて顔を上げてこう言った。

「ゴバン、お前は単純なんだな」

「あ！？そりゃあ俺に対する感想か？ちょっと引つかかんけど…初めてじゃんよ。そういうのさ」

ゴバンは口を開けて嬉しそうに笑う。もちろんそれはルーマが、彼を初めて名前で呼んだことに対する素直な喜びでもあった。

「もう寝ようぜ。ルーマ」

やさしい日々

昨日と同じ雲ひとつない青空の元、ゴバンはカポンを駆り荷車を走らせていた。肩の上に止まるペソアは揺れに全く動じることなくキョロキョロと辺りの丘を見回している。静かなものだ。なだらかな幾つもの丘には、様々に実を付けた農作物で溢れ、一帯の豊かさを象徴している。だが同時に、横道の至る場所には砦が設けられ、いつ起こるとも知れない戦の存在を容易に想像させた。やがて道の先には賑やかな町並みが。そのさらに先には、城壁で囲まれたポリス中枢区がそびえていた。

ゴバンは一旦馬車を止めてカポンの背から飛び降りると、後ろの荷車に歩み寄った。そして棺を軽く叩き、声をかける。

「おいルーマ。平気か？」

もちろんこの棺は死体ではなく（生体的には）生きたナッツパーツを入れるためのものだ。空気を取り込むための穴はあるし、ある程度の断熱性もあった。だが今日は昼前からかなり気温が高いうえ、いつものモノ言わぬパーツとはワケが違う。

「——少し…暑い。でも平気だ」

ややあって、ルーマから返事があった。

「ワリイな閉じこめちまって。お前は肉だらけだからよ。目立つちまう」

「悪かったな」

ルーマはゴバンの表現に幾ばくかの不快感を感じたが、それがなぜなのかはよく分からなかった。

「ゴバンは平気なのか？見た目は私と同じだぞ——肉だらけだ」

少し強めの語尾はお返しのつもりだったが、ゴバンには意味をなさなかった。

「俺はこの辺じゃ知れてるしな。それに見えない部分が機械つてコトになってる。ウソだけだよ」

実際ゴバンが弱ければそんな理由は通らなかっただろう。例えばナッツパーツではなくても、肉体部分の目立つ人間はそれだけで、パーツ代わりの標的とされることがあるほどだ。そしてそのことは村を追い出されてから後、ゴバンがぐくり抜けてきた修羅場の数々を容易に思わせた。何しろ彼が村を出た時は、まだ子供だったのだから。

やがて馬車は賑わいを見せる町並みを抜け、城門の中——プラタナポリス中枢区へと入っていった。

・
・
・

この時代の人間にとって逃れられない宿命というものがある。それは俗に機械病と呼ばれる病気だ。

生まれつきではない。機械への変態は、たいがいが幼児期に起こり、それを阻止する術は全くない。ただ変態を起こす部位には固体差があり、どんな機械へ変わるのかについても同様だった。そして

部位や変わるモノによって、人間が生きるために必要な何かしらのラインが断たれた時。それは死へとつながる。

例えばもしも機械化が内蔵に起こった場合。それはほとんどの場合死を意味する。もちろん、代替のきく何かしらの機械へ変わることも稀にあるが（心臓→人工心臓など）、その多くが、この世界の機械技術の遥か先にあるため、故障した場合は非常に厳しい状況に陥ることになる。

あるポリスでは成長過程の幼児期、機械化により約半数の人間が死亡するという調査結果も報告されているほどだ。

だが機械化を無事乗り切ってしまえば、その機械部が単純な仕組みであればあるほど、整備次第で幾らでも長持ちをさせることができる。そればかりかパーツ交換さえ不可能ではない。つまり半永久的な維持も夢ではなくなるわけだ。とはいえ肉体部分の老化を免れることはできず、結果として人間の寿命は変わらないのだが…

しかし例外もある。

肉体だけが老いの宿命から逃れられないのなら、肉体も『交換』してしまえばいい。その材料として必要不可欠なのが『ナツツパー』であり、時には生きた人間さえ、交換の素材とされることもある。そしてそれを可能にする機械が、この世界には存在している。

『神器』と呼ばれ、それを奪い合うことこそがこの世界の戦争の歴史であり、国の歴史でもあった。神器を持つ国は城壁を築き、ポリスを形成し、また、神器を奪おうとする国は尽きることなく現れ、時にポリスを打ち負かして新たなポリスを生む。その繰り返しだ。

各ポリスの領主は（戦争や内乱などで命を落とさない限り）長命で、かつてゴバンがいたポリス『ドツタ』の領主などは、五百年近く生きているとさえ噂される。一部の権力者たちだけが持てる不老長寿の夢。それこそがこの世界の動向を知る上で欠かせない、中心的なファクターなのだった。

だが誰しも分からないことがある。

世界動向の中心でもある神器と、ナッツパーツとはそも『何』なのか？と言うこと。宗教的な教えや言い伝えなら幾らでもあったが、
事実には誰一人、知るものはいないのだった。

・
・
・

「悪かったな。気づかなくてよ」

ゴバンがなんとも気まずそうに、ベッドの上に横たわるルーマに声をかけた。両手には水を入れた手桶を持ち、ちょうど戸を開けて外から入ってきたところだった。陽が高くなるほどに気温を増していく中、分厚い石造りの家の中はひんやりとしていてゴバンをホッとさせた。

決して広くはなかったが、ポリスより支給される専属ベクターの家は御影石で組まれた堅固なもので、下級兵士たちの家と共に城壁の中——ポリス中枢区に建てられていた。非常時には砦にもなるよう設計されているため窓は小さめで、快適な住環境とは言いがたが、それより室内に井戸がないのがゴバンには不満だった。或いは、湿気対策のためなのかも知れないが…

声を聞いて顔を向けるルーマの顔は上気し、頬と鼻の頭を赤く染めている。少し怠そうだ。その脇ではペソアが彼女を看病するかのように、付き従っていた。

「なぜ謝るんだ、ゴバン？暑さに耐えられないのは私のひ弱さだ。ゴバンのせいじゃないぞ」

ルーマは暑い棺の中に長時間いたため、軽い熱射病にやられたのだった。

「でも知ってたわけだからよ。ルーマが生身の体だってこと。すぐ忘れちまうんだ、俺。自分が普通じゃねえから」

ガタン！と、ベッド脇に置いてあった椅子に勢いよく腰掛けると、ゴバンは顔をしかめながらそう言った。その音に迷惑そうに、ギャア！とペソアがひと鳴き。ルーマはゴバンをジッと見つめている。いや、観察していると言った方が正しいかも知れない。

ゴバンは汲み上げてきた井戸水にタオルを浸してギュツと絞ると、それを広げてルーマの額に乗せてやった。いや、乗せてやろうとした瞬間――

ガシッ！

ルーマがゴバンの両の手首をつかんだ。

「――おい、なんのつもりだ？」

「ゴバンこそなんのつもりだ？」

「なにつて……ただの濡れタオルだろうが」

ルーマの怪訝そうな瞳は変わらない。意味が分からないらしい。

「だからこれは……」

言い掛けてゴバンは言葉を止めた。ルーマの素早い手の動きにまるで反応できなかったことが、悔しかったというのもある。早い話、意地になったのだ。

「いいから病人は病人らしくしてろっ！」

ゴバンは力ずくでルーマの額にタオルを置こうと力を込めた。だがその瞬間、ルーマは手を離して拳を固め、右からゴバンのアゴを

かすめるように鋭いパンチを繰り出す。

ガスッ！

虚をつかれたかのように一瞬ゴバンは力を失い、シーツをかけるルーマの体の上にガクンと身を落とした。ゴバンはそのままの態勢でポツリとつぶやく。

「ねらってやっただろ…」

アゴに右フックを決められたゴバンは脳を左右に振られ、軽い脳しんとうを起こしたのだった。強い打撃の必要なしに相手をダウンさせる、かなり高度なテクニクだ。

「お前の肉は硬いからな。それにいきなり変なことをしたお前の方が——あ…」

ルーマが何かに気づく。

「ゴバン！これすごく気持ちいいぞ、この布！？」

偶然にもゴバンの手を離れたタオルはそのまま、彼女の額の上に落ちていた。

「ジョーシキだって…」

呆れたようにゴバンが言った。ルーマはキョトンとしている。

「…そうなのか？」

「ああ、だから大人しくしてろって…ま、説明しねえ俺がワリイか」

ゴバンが頭を振りながら体を起こすと、ルーマはそのアゴの辺り

にソツと手を触れた。

「悪かった……」

「平気さ」

ゴバンはなんでもないとばかりに肩をすくめて瞳をそらしたが、ルーマは尚もゴバンを見つめ、やがて言った。

「ゴバン。私はこんなことすら知らない。これは普通だと思うか？」
「え？」

ゴバンはルーマを見る。彼女の意図が分からなかったのだ。ルーマは額のタオルをめくるように手に取りながら言った。

「コレ。常識だつて——今そう言ったな？」

「ン……まあな」

「では私は普通じゃないってことだな？」

「かもな。でも、だからなんだってんだ？」

ゴバンはいぶかしんだ。そこから続くだろう言葉に、自分と共通の暗い影を予感したからだ。しかし違う。実際にルーマの口から出た言葉は、おおよそゴバンが想像したどんなものとも違っていた。

「——え？」

「聞いてなかったのか？だから良かったって——ゴバンと同じで良かった。……そう言った」

タオルから手を離すとパサリ……と、彼女のライトグリーンの瞳を隠してしまった。それはゴバンがルーマの表情を見る時にアテにする唯一のもの——だがそれ以上に確かな、今までの彼女ではあり得

ない、ハッキリとした表情がそこにあった。

ルーマの口元が微笑んでいる…

それはゴバンにとっても救われた瞬間であつたかも知れない。彼女も自分自身の存在理由に孤独を感じていることは確かだつたろう。しかしそれにも拘らずルーマは笑っている。ゴバンの中に同じものを感じ、投げ所を得たのかも知れない。

あれはいつだつたろう——と、ゴバンはかつての苦々しい記憶に思いを馳せた。

あの時は自分だけが持つ、この体が嫌いだった。

何しろ自分を襲つたベクターたちでさえ、恐れて逃げ出すような体だ。それが腹立たしかった。無くしてしまいたかった。だがナイフで傷を作るぐらいではダメなことも分かっている。まだ両親が試したことのない方法が必要だつたのだ。

ナイフで自らの肉を削ぎ落とす痛みを、どれほどの人間が知っているだろうか？ 腕を、足を、そして顔を…

死へ通じるほどの、激しい痛みを感じた時の脳は実に慈悲深い。痛みを快樂へ変え、精神は幻想へ向かい、人は天国を見るという。だが残念ながら、ゴバンの行為はそれに値しなかった。ただ痛みのみが体全体を支配し、その行動を大きく鈍らせる。ナイフを持つ手が止まる。そして結局は治癒力が勝るのだ。だがそれでも、あの時期に味わった精神的苦痛に比べたらマシとさえ思う。どれだけ叫んだか分からないのだ。まだ声も変わらぬ年頃だつたというのに…

ゴバンは大きく首を振り、現実に戻る。

確かなことは一つ。

——ルーマに同じ苦しみを味合わせる訳にはいかない。

いつしか静かな寝息をたて、ルーマは胸をゆっくりと上下させていた。口元だけ見ても確信できる表情にゴバンは安堵感を覚える。それで十分満足していた。そのはずだつた。しかし——

「いいよな…」

小さな声でつぶやくと、ゴバンはルーマの額にかかったタオルを少しだけずらし、寝顔がよりよく見えるようにした。今度は途中で腕をつかまれるようなこともなく、熟睡している。

彼女の安心しきったあどけない顔がそこにあつた。

ゴバンの胸に広がる形容しがたい感情。それが心地よかった。生まれて初めて感じるもの——彼自身、まだ気づかないもの……

悩みも疑問もいっぱいある。辛いことも苦しいことも。考えなくてはいけないことも山のように。でも今は、彼女が与えてくれる幸せを味わうことの方が、より重要な気がするのだ。

・
・
・

それからの二週間を、ゴバンはポリス内でルーマと共に過ごした。これから先の危険を少しでも減らすためにも、この世界の常識をある程度は教える必要があると判断したからだ。彼女は早く旅立ちたがってはいたが、ゴバンの前で平気で着替えをするような常識ではさすがに困る。相手がゴバンだからというのならまだしも、今の彼女ならば市場のド真ん中で裸になることさえいとわないのではないだろうか？もちろん、なんの必要性もなしにそれをするほど馬鹿ではないが……

いずれにしろルーマの教育の場として、この城壁の中——プラタナポリス中枢区が最高の場所であることは間違いなかった。それはここが、世界に点在するポリスの中でも外れに位置し、戦乱に巻き込まれることが比較的少ないことも一つ。それと領主の性格を反映しているのか、特に城壁の中は平和そのもので、人々も裕福だった。しかもゴバンはこのポリスで信頼を得ており、彼が誰を連れ込もうが引き止める者はいないのだ。ましてや金髪の美少女など——せい

ぜい井戸端会議の格好のネタになるぐらいのものだろう。

そしてゴバンにはもう一つ、ルーマと共に暮らすことで確かめておきたい思いが生まれていた。

・
・
・

「今日はどこへ行くんだ？」

ゴバンが床の上に敷いたむしろの上で目覚めると、ルーマは既に起きていて、ベッドの上から見下ろすように声をかけた。決して笑顔とは言えないが、彼女の瞳は輝いている。最近では毎朝の日課となりつつあり、ゴバンは彼女の表情が、目覚めの度に生き生きとして来るのを実感していた。

そしてもう一つ、ルーマに小さな変化があった。最初の頃はいつ旅立つのか？そのことを話題にしない日はなかった。その度にゴバンは適当にごまかしたもののだが、ここ数日、彼はそのセリフを聞いていない。それが何を意味するのかは分からないが、ゴバンは最近、ルーマが物思いにふける姿をよく見かける。そしてそれは少なくとも、彼女にとっていいことのように感じられた。

「あ…ああ、ルーマ。お早よう…」

「お早よう。ゴバン」

彼女はすぐに返した。教育の成果だ。ゴバンはシャツの中に手を入れて、ボリボリと鎖骨の辺りを掻く。あくびをしながら、まだ少し眠そうだ。

「それよりお前さ…」

ゴバンはあることに気づいた。

「…その首に下げてんのなんだよ？」

「ああ、これか！」

ルーマはまるで待っていたかのような、嬉しそうな笑みを見せた。
ゴバンの眠気も覚める。

「知らないのか？これはネックレスって言っただぞ」

それは色硝子のちりばめられた、なかなか美しい首飾りだった。

「そんなのは知ってんよ。どうしたんだっての。俺買つてねーぞ」

「さつき散歩に出たらエルメさんがくれたんだ。なんでも私は色気というものが足りないらしい。ゴバンに捨てられないためにも必要だって言ってた」

「あのババア…何度も妹だと言ってんのによー」

ゴバンは縛っていないウェービーな髪の毛をバリバリと掻いた。

ここ数日は城壁内に限って、ルーマ一人での散歩を許していたのだ。もちろん、城の中や他人の家など、入ってはいけない場所は教え込んであるし、幸い彼女の記憶力は素晴らしいものがあつた。

それにしても『ゴバンの妹』というのが、とてつもなくヘタクソな嘘だったことは確かだろう。二人は似ても似つかない。

ルーマが首を傾げるようにしてゴバンを見つめると、ストレートの長い髪が軽く、サラリと肩から落ちた。

「なあゴバン。私、色気あるか？」

「——は？」

驚いた。ゴバンはすぐに返事が出せない。

「ないのか？」

真顔で訊ねるルーマに、さすがに照れ臭くなり顔をしかめるゴバン。

それを見たルーマの表情が明らかに曇った。しかし——と、ゴバンは思う。考えてみればルーマには、色気の意味など分らないのだ。こんなことを真面目に取って、彼女の気持ちを消沈させるのもバカらしい。

「いや、あるさ。色っぽいから安心しろ。な、ルーマ」

それを聞いたルーマはあつという間に機嫌を直す。

「本当か！？」

「ああ、スゲー色気だ」

さつき以上の笑顔で微笑むルーマ。

「良かった！じゃあ私、今から行ってきた方がいいか？」

「え、どこに？」

「エルメさんのところ。本当の色気を知りたかったら来いって言われたんだ。なんか色々教えてくれるらしいぞ」

だいたい想像はついた。エルメ婆さんは皮膚離れした化粧の厚さで有名なのだ。本人は顔の一部が機械なのを嘆いていて、顔の綺麗な女性（つまり機械部分のない顔）を見かけると、誰かれともなく化粧を塗りたくなるらしい。まあそれも、中枢区内が平和な証拠な

のだろうが…

「あー…、ワリイけどな。今日は一緒に付き合ってもらいてえんだ」
「そうか。じゃあその後にでも…」

誉められたのがよほど嬉しかったのか、ルーマはどうしても行きたいらしい。もちろんゴバンは、どうしても行ってもらいたくない。塗り壁になったルーマの顔など見たくないからだ。

「いや、だからなルーマ。実は明日出発しようと思ってんだけどよ——」
「ホントか!?!」

ルーマの表情が変わった。

「ああ。だから準備とか色々あんだろ?色気の研究は帰ってきてからにしようぜ。な」

ルーマはしっかりとうなずき、それまでのことを完璧に頭から除外した。なぜならそれは彼女にとって、ポリス内での面白さ、喜びとは別次元の問題なのだから。

「なあ、ゴバン…」

突然ルーマが思い詰めるような表情を見せた。

「ん、どうしたよ?」

しかしルーマはすぐには話さない。考えている。そこには、相手をより知りたいからという、欲もあるのかも知れない。しかしそれ

には、自分をさらけ出すことも時に必要なのだ。『人と話す』ということ。彼女はこの一週間で、その本当の意味を学びつつある。やがてルーマは、ここ数日の物思いの訳をゴバンに明かした。

「私はここでの生活が好きだ。ポリスの人間は好きだし、何よりゴバンと一緒にいると不思議と安心する。楽しい…って言うのか？今はそれがよく分かる」

浮かべたのは笑顔——しかしそれはどこか切なげだった。

「…でも、それだけだと辛い。どうしてかな？楽しいし、安心してゐるのにどんどん不安にもなる。この感じ、どう説明していいのか——難しいな」

ルーマにはそれ以上表現することができず、もどかしそうに口を歪めた。だがそれは、正にゴバンが思っていたことそのものでもあった。そして彼は既に答えを導きだしている。旅立つ前に知っておきたかったこと——この一週間にはそういう意味があった。

「分かるさ。知りたいんだろ？自分がなんなのか」

「ゴバン…」

「俺も分かったんだ。ルーマと暮らしてハッキリな。自分が傷を持ったままだって…、ガキの頃から何も見つけてねえってことをよ」

ゴバンは一瞬顔をしかめる。照れを隠す時のクセだ。

「ルーマは俺の傷を癒してくれる。でも同時に傷を思い出させもするんだ。たぶん、お前も同じ傷を持つてるからよ…俺と。だから自覚できた。だからこの傷は小さくなくちゃいけねえって思った。俺

も知りてえ。自分がなんなのか。この二週間は面白かったけどよ、ここにいても何も変わらねえもん。そういうことじゃねえの？」

ルーマは意外そうにゴバンを見た。そうだ。言われれば分かる。そういうことなのだ。言いあてられたことが嬉しかったし、その感情も新鮮だった。

「でも…ゴバン。私と来てもゴバンのことは何も…」

ゴバンは肩をすくめながら、言葉でそれを遮る。

「分からねえかも。でもルーマに答えが見つければ、俺にも何かあるって…そんな氣イすんだよ。だから俺も行くんだ。今はもう、面白そうってだけじゃなくてな」

そして最後に笑みを見せながら、自慢げにルーマにこう言った。

「単純なばっかじゃねえだろ？」

・
・
・

最後の挨拶に——そう言って別れてからどれくらい経つだろう？ゴバンは城門の出口を前にして、イライラと足を石畳の道に叩いていた。道の脇には幌付きの荷車を繋いだカポンと（棺は置いてきた）、その背中で退屈そうにしているペソアの姿がある。

「——にしても遅えーな」

どうやらこの一週間の間に、ルーマはずいぶん友達を作ったらしい。というより、彼女はポリス内の年配層の住人にやたら人気があったようだ。実際ゴバンと二人で歩いていると道々声をかけられ（それはもう、既に有名なはずのゴバン以上の人気だった）、しかも驚いたことに、彼女はすべての相手の名前を、一度聞いたという理由だけで全て言つてのけるのだ。

「おや、お出かけかい？仲のいいことだね、ルーマ」

「ありがとう、シエルダビ・ルスラダニムさん」

といった具合だ。（その後ゴバンのアドバイスによって、挨拶はフルネームで返す必要のないことを教えられるのだが…）それに加えてルーマの飾らない言葉使いも、人気の大きな要因だったかも知れない。つまり、本来ならひがみの対象になりかねない彼女の綺麗な顔立ちや金髪が、女つ気のない喋りや世間を知らない無垢さによって、人間の庇護心を掻き立てるのだ。そうなる中には、彼女と親しく話すという行為そのものを自慢する者たちも出てくる。

ルーマは確実に有名人になりつつあった。そういう意味でも、ポリスを出るにはいい潮時だったのかも知れない。

「ゴバン、遅れてすまない！」

息を弾ませながらルーマが戻ってきた。ちょうど城門の外を見ていたゴバンは、彼女が駆け寄ってくる姿に気づかなかった。

「あれ？おいルーマ。俺が買ってやった防具は…」

生身の彼女の体を気遣つてのことだった。それと少しでも金属的な印象を見せておけば、興味を示す者の割合も減るだろうから。

「置いてきた。やっぱりあれがあると動きづらいし…」

しかしゴバンはすぐに、ルーマの変化が防具どころの騒ぎじゃないことに気づいた。何しろゴバンの口から続きの言葉が出てこない。目を奪われている。

「どうした？ゴバン」

「いや…お前、その顔…」

そこにあつたのは化粧をしたルーマの姿だった。それだけじゃない。服はゴバンが買ってやった男物の服ではなく、薄絹の丈の長いスカートだったし、以前よりも上等な宝石の付いた首飾りに腕輪。それに大きくはないが耳飾りまで付けられている。

ルーマは済まなそうに謝った。

「あ、これはエルメさんが——すまない。すぐに済むと言われて、その…私も興味あつたし…」

それは、皮膚離れた化粧が神髄のエルメ婆さんとはとても思えないほどに、上品で薄い、ルーマの皮膚の綺麗さを生かした化粧だった。頬のうつすらとした桜色は彼女本来のものだったし、目のシヤドウは薄く上品に、でも少し大人らしく。そして赤い口紅は、もとも薄かった彼女の唇に女性らしさを与えていた。

ゴバンは何か不自然にルーマに出発を促す。

「あ…いや、別にいいんだけどよ——そ、そろそろ行くか…」

ルーマに危険が及ばないよう荷台に幌を付けたというのに、ゴバンはすっかりそのことを忘れて彼女を荷台ではなく、自分の脇に座らせた。もちろん防具のことも頭にない。

ピシッ！

手綱を叩くと馬車は石畳の道をゆつくりと進み、プラタナポリスの城門をくぐり抜けた。市場の雑踏を、人混みを分け入るようにしてゴトゴトと馬車は進む。道行く人々は薄手のドレスを着るルーマに明らかな興味を示したが、何かを目論もつとする者は現れそうにもなかった。逆にそれが、身分の高さを象徴しているように見えたのだろう。

「ゴバン。私、このポリスで友達ができたぞ」

周りの目を気にすることもなく、ルーマは正面を見据えながら誇らしげにそう言った。

「エルメ婆さんのことか？」

ルーマはコクリとうなずく。

「その証につて色々くれたんだ。化粧もしてくれた。でも一番は泣いてくれたんだ。私のために…」

言葉が途切れる。よく見るとルーマの瞳は潤んでいた。本当に嬉しそうに…

ゴバンは手綱を左手だけで扱いながら、もう一方の手をルーマの頭の上にフワリと置いてやった。言葉とは違うコミュニケーション。彼女はそれを受け止めた。うつむいたまま、もう一度コクリ…と、うなずく。それはありがとうの意味。

そしてゆつくりと顔を上げ、こう訊ねた。

「ゴバン…私、色っぽい？」

ゴバンの手綱を持つ手が硬直した。以前にも聞かれた質問だったが、今度のゴバンは顔をしかめながら――

「まあな」

――とだけ言った。

ルーマはまだジッとゴバンを見つめている。続きがあると期待したのだ。しかしやがてあきらめたのか肩をすくめると、少しつまらなそうに口をとがらせるのだった。

仕方ないだろう。何しろ前は「スゲー色気だ」だったのだから……しかし今度の言葉は本音だった。彼はルーマに対して初めて、女性としての色気を感じたのかも知れない。裸を見た時にさえ感じなかった何かが目覚め始めている。

ゴバンに魔法をかけたもの――それは化粧などではない。強いて言えば、化粧をしたいというルーマの意識。それが化粧に魔力を封じ込めたのかも知れない。以前ゴバンが思ったように、ルーマには確かに色気の意味は分かっているまいだろう。でも意味を知るか知らないかなど、どうでもいいことなのだ。少なくともこうは言えるだろうから――

ルーマは確実に女性になりつつあった。

ジェネ

「ふわぁゝあ…」

広い荒地をゴトゴトと進む馬車を操りながら、ゴバンは眠たそうに大きなあくびをした。見上げた先には気持ち良さそうに上空を旋回するペソアの姿があり、それを少し羨ましげに見つめると、退屈をしのぐ術のないゴバンは再び前方を見やった。

ルーマは昨日とは違い、ゴバンの言い付けを守って幌付きの荷台の中でジツとしている。正直意外だった。もちろん声をかければひよっこりと顔を出すのだろうが、取り立てて話をするほどのことも思いつかないし、それに間もなく宿場町が見えてくるはずだ。

太陽は既に西に傾きはじめ、夕方を迎えようとしていた。

それにしても——と、ゴバンは思う。昨晚の自分の落ち着きのなさはなんだろう？と。

ルーマと寝起きを共にするのは日常となっていたし、野宿も出会った最初の夜に経験済みだ。しかし昨晚は何か違った。平気な顔をしてスースー寝入るルーマをよそに、ゴバンはどうしても寝付けなかったのだ。

一つ、ゴバンが気づいていない変化が彼女にはある。

昨晚、ルーマが川へ水浴にいった時のこと。彼女は自分の意志でゴバンから見えない場所にいることを確認して衣服を脱いでいた。ゴバンが教えたこととはいえ、今までの彼女ならばそう意識することもなく、結果として平気でゴバンから見える場所で服を脱ぐこともあっただろう。だが昨晚に限っては違った。そしてたぶん、これから先も…

ある意味それが、寝不足の全てを物語っていたのかも知れない。

「お、町だぜ！」

ゴバンはどこかわざとらしく、頭の中の煩惱をふっきるようにあえて口に出して言ってみた。前方に見えるのは、プラタナポリスの制圧下にある町の一つ。ゴバンも幾度となく訪れている町で、北へ向かう峡谷の入口に位置する小さな宿場町だ。しかし今日は、何やらいつもはあまり目にするのではない人ばかりができていた。

ゴバンは馬車を止める。

「ドウドウ……」

「付いたのか？」

荷台の中から、ルーマがひょつこりと顔だけを出して声をかけた。体を隠すようなその動作はどこか不自然にも見えたが、ゴバンは特に気にも止めなかった。

「ちょっと様子が変だ。お前は中にいな」

ルーマは少しつまらなそうな顔。どうやら彼女も退屈ではあったらしいが、それでもおとなしく従った。

ゴバンは地面に降り、鞍に下げた袋の一つから大きなソラ豆を2〜3取り出すと、カポンに与えてやった。肩に乗るペソアが「俺にもよこせ」と言わんばかりにクチバシで突こうとするが、ゴバンはそれを手で払い除けた。全身機械のペソアに食えるわけではないのに、アピールだけはうるさい。

ちなみにペソアの食料（というより燃料）は水で、クチバシの奥にしまわれたストロー状の舌で補給する。なぜ水だけで動き続けられるのかは謎だし、まして水素原子を含む液体ならばなんでも燃料になるなどということは、ゴバンには知るよしもない。

機械化という現象が生み出すものの中には、かなり高度な技術が含まれていることが稀にある。しかしこの世界の機械技術力のせいぜいが18世紀に進んでいるものでも20世紀初頭レベルで、それほど高くはない。機械化はあくまで病気という概念があり、許されるなら誰もが生身の肉体を手に入れたいたいと思っているのだ。そして生身の肉体を平気でさらけ出すというのは『襲われない者』。すなわち権力者の証でもあった。

ゴバンが人込みを分け入って行くと、やがてその中にはゴバンと同様、プラタナお抱えのベクターたちが3人、お互いを牽制するように睨み合っていた。と言っても、確かにプラタナの紋章の付いた防具を付けているものの、顔に見覚えがないところを見ると、たぶん中枢区内に住むことの許されていない、レベルの低いベクターたちなのだろう。ちなみに紋章付きの防具はゴバンも持っているが、プラタナ王と接見するような時以外付けることはない。もちろん、彼の体では必要もないのだろうか…

「なんだ。ベクター同士のケンカかよ…」

最初、つまらなそうにゴバンはつぶやいて、立ち去ろうとした。しかし――

ギヤアツ！ギヤアツ！

「おい、なんだよペソア。静かにしろって！」

それは何かを必死でアピールしているようにも見える。それに釣られるようにもう一度騒ぎの元を見ると、ベクターたちから少し離れて、一人のまだ12〜3歳の少女が緊張した面持ちで立ち尽くしていた。しかもその少女は、ヘソの見える丈の短いシャツと、膝上丈のスカートという姿でありながら、見える部分に機械が存在していないのだ。タチの悪いベクターや盗賊たちにとっては高価な『パ

「ッ」以外の何物でもない。

「あれ？よく見りゃあのガキ…」

そうだ。ルーマのいた洞窟に入る前、偶然通り掛かった商人が連れていた少女だ。癖の強そうな短めの髪の両脇を、赤い石の付いた髪飾りで止めていて、髪は茶と金のまだら毛——間違いない。それになぜかあの時も、ペソアが急に騒ぎだしたのでよく覚えている。とすると商人は…

「あゝあ、殺られてるよ…」

少女から少し離れたところ。太った商人は血だらけで既に果てていた。

しかし——と、ゴバンは首をひねる。

あの時、ゴバンが見た少女の体は、両腕共に不細工な機械だったし、腹の部分も金属だった。一般的に盗賊やタチの悪いベクターに襲われないよう、弱い者は機械の部分をあえて見せるような衣服を着ることが多い。そのための丈の短いシャツなのだろうが、今はそれが逆効果だ。

たぶんゴバンが見た少女の体は、道中の危険を避けるために商人が着せた機械の偽装だったのだろう。

ギャ、ギャアアッ！

尚も叫び続けるペソアの声に、ベクターたちがうるさいとばかりにゴバンの方を睨んだ。仕方なくゴバンは歩み出る。

「あゝあ、かえーそうに。なんで商人が死んでんだよ？」

「じっ！？ゴバンシャノム！」

一斉に三人のベクターが叫んだ。ゴバンは下級ベクターの間でも、

かなり知れてるらしい。

「お、お前は高給取りだ。ここは引いてくれねえか」

右腕がレイピア（尖った剣）のようになった長身のベクターが、虚勢を張るように一歩前へ出た。

「あんたさあ、俺の質問に答えてねーじゃん。答えてよ」

そのゴバンの冷静さに、思わず後ずさるベクター。

「あつ…だ、だから。この商人がワリイんだぜ。俺たちの弱みに付け込もうとするからよ」

「弱み？」

別の、図体の大きい男が続けた。

「明日は月末だろ？一定以上の仕事こなしてねえベクターが切られる日だ」

「え、そんな決まりあんの？」

ゴバンが本当に意外そうな顔で答えると、三人はバツが悪そうに顔をしかめ、一人のベクターが頬を赤らめながら叫んだ。

「お、オメーは稼ぎがいいから知らねえだけだ！」

「あーワリイワリイ」

ゴバンの見せた笑顔に、叫んだベクターも心の中で安堵していた。つい饒舌になる。

「ま、つまりよ。この商人は明日がその期限日だつて知つてて、バカ高え値でその女あ売りにきたんだ。『他に手に入れられるパーツがあるか?』とか又かしやがつてよ。で、頭きたから3人で殺っちまったつてわけさ。な、俺たちやワルかねえだろ?」

「ふーん、なるほどね…」

少し呆れるようにゴバン。後は想像がついた。何しろ3人に対してクビを免れるための商品が一つ。奪い合いにもなる。

「でも俺にはそのガキ、パーツには見えねえけどな。おいお前、喋れんのか?」

少女はゴバンが他のベクターたちと違うことに、目ざとく気付いていた。

「あ…ええ。喋れるわ。あたしナッツパーツなんかじゃないもん。一緒にしないでよ!」

意外と気丈だ。その瞳からも、芯の強さを感じさせる。

ゴバンは無防備にも、ベクターたちの中央まで歩み出て肩をすくめてみせた。

「人間じゃねーかよ」

「そ、そんなの知るかつてんだ! プラタナに関係ねえ女あパーツにしちまつて何が…い、いけねえんだ? なあそう思うだろ、ゴバンさんよ?」

ゴバンに話し掛けているベクターの目つきが、途中から明らかに変わった。その視線の先には、背後からレイピアを突き刺そうと迫る長身のベクター——彼らは、そしてプラタナの誰もが、ベクターとしてのゴバンのウデは知っていても、体の秘密までは知らないの

だ。まさか剣が効かない体だなどと…

「死ねっ！」

ギャッ！

ペソアが驚いたように空に飛び立つ。だが背後のベクターに驚いたのではない。ゴバンのあまりに早い動きに足場を失ったためだ。そしてゴバンは特殊な体に頼ることもなく、まるで分かっていたかの如く剣をかわすと、裏拳を男の顔面に叩きこんだ。一瞬にして気を失い、ズルズルと滑り落ちるようにベクターは崩れる。或いは誘った？

「あーあぶねー。今ので寿命三日分は縮まったんじゃないかな？——ってワケでよ。このガキ、俺がもらうことにするから」

少女の手を取って連れ去ろうとするゴバンに、残ったベクターが一斉に叫ぶ。

「どっ、どんなワケだよ！？」

「決まってんじゃない。慰謝料代わりさ。気にしないでいいよ。金まよこせなんて言わねえから。ガキだけで。寿命三日分だからな。そんなもんだろ」

ギリッ！と、明らかに一人のベクターが奥歯を鳴らした。

「クソッ！テメーは今ここで死に…ハガッ！」

一瞬だった。相手よりも遥かに素早い、逆に踏み込んでのゴバンの頭ツキがまともにベクターのアゴに入ったのだ。ゴキッ！と鈍い音がして、ベクターはそのままゆっくりと倒れていく。

「あゝあ、なんで仕掛けんだバカ！せつかく見逃してやろうって思ったのにさあ。そんぐらい空気で分かれたの！」

そして突然、ゴバンの瞳が鋭くなる。

「で、あんたはどうする？」

その言葉に、もう一人の図体の大きな男はお手上げとばかりに両手を上げて、降参のポーズを取った。

「ツイてねえな。まったくこっちが慰謝料もらいてえよ…」

しつかりと不満だけはブツブツ漏らしながら、男はあきらめて去っていく。しかしそれを見届けると、ゴバンは参ったぞと言わんばかりに頭をバリバリと掻き始め、あえて後ろを見ないようにしながら顔をしかめていた。

「あ、あのさ…」

おずおずとしたその声に、ゴバンは仕方なく後ろを振り返る。もちろんそこにいるのは少女だ。ゴバンの肩に戻ってきたペソアが、ギヤア！と、威嚇するように声を上げるが、ゴバンはそのボディをコツンと叩き、ペソアを制した。確かに面倒ごとではあったが、このうえ少女を脅かすのはいささか気の毒に思えたのだ。

周りを見回すと、町の人間たちは今も興味深げな瞳を少女に向けている。彼女の価値を知っているからだ。このまま見過ごせば、少女はあつという間に誰かに捕まり、パーツとして売り飛ばされるだろう。とはいえ、ゴバンにしても暇ではない。少女をかくまう余裕などないのだ。

「お前、どつから来たよ？」

まずは聞こう。どうするかはそれから——ゴバンはそう思った。しかしそれを聞いた途端、少女の表情がいきなり輝きだしたのだ。

「ありがとう！わざわざ送り届けてくれるのね！」

「へっ！？」

マヌケな声が出た。

「あ、いや。だから場所聞いてみねえと——」

「ドツタポリスよ！そんなに遠くないわ！」

「どっ……！？」

耳を疑った。なぜなら彼女にとってそこは、かつて雇われていた場所であり、そして今は追われているポリスなのだ。そう、あのロブランがいるポリスでもある。

「——ドツタはマズいなあ……」

その言葉を聞いたか聞かないか、或いは意識的に無視しているのか、少女はゴバンの手を両手でガッチリと握り、もう決定したかのような満面の笑顔を見せる。

正直、ゴバンは頭を抱えたい心境だった。方角的には北だし、これから向かう方向に間違いはない。しかし当初は、ドツタポリスの制圧地は迂回するつもりでいたのだ。

「……名前は？」

「ジエネよ！ジエネ・ガット」

「なあ、ジェネ。ワリイんだけどよ——」

言い掛けたゴバンの言葉を、少々強引にジェネが遮った。

「ああ、でもなんて親切なのかしら！いい人っているのねー」

ジェネはゴバンからクルリと体を横に向け、まるで夢見る乙女とばかりに両手を胸の前で組んで喜びを表現している。周りの観衆にもアピールしているその様は、どこかわざとらしくも見えた。

「おい、だからよ——」

「ああ、ゴバンって言ったかしら？本当にありがとう！」

再び遮られた。いささかゴバンもイラ立ちを覚え、言葉を荒げる。

「お前なあ！だから人の話はちゃんと聞——」

「どうかしたのか？」

まただ。だが今度は少女ではない。同時に、明らかに周りで見えていた群衆にどよめきが起こった。

「何か問題でもあったのか？ゴバン」

声の主はルーマだった。

「おいおい、馬車中にいろって——っておい！？お前その格好……」

言い掛けて絶句し、ゴバンは額を手で押さえた。

朝、ゴバンが馬車の中にルーマを押し込めた時は、彼女は厚手の長袖シャツにズボンという、いたって目立たない格好だったはずだ。

しかし今は化粧こそしていなかったものの、エルメ婆さんにもらった袖なしのドレスを着て、しかもスカートから出ているのは素足だ。どよめきも起こる。

ルーマは自分の服装を見つめると、バツが悪そうに肩をすくめた。

「え！？あ、これは、ヒマだったから…つい」

「靴はよ？」

「ゴバンに何かあったと思って、急いでたから…」

馬車の中は、確かにルーマにとって退屈な場所だったらしい。しかし、ただ揺られる馬車の中でずっとジッとしていたわけでも、寝ていたわけでもなく、彼女なりの遊びを見つけていたことは確かのような。町に付いた時には既に、着せ替え状態だったに違いない。

「上物だ…」

どこからともなく、小さくそうつぶやく声が聞こえてきた。ルーマの姿は露出度こそジェネのように多くなかったが、その薄いシルクの生地は、どう見ても機械部分を感じさせない。少なくとも価値の高さは一目瞭然だった。

「あーもういいから馬車に乗れ！おいジェネ、お前もだ」

ジェネの反応がかなり遅れた。ルーマの存在に驚いたのかも知れない。

「——あ…ってことはゴバン。本当に乗せてくれるの！？」

「本当につて…おい！テメーが言っただろーがよ」

「ありがとう！いい人っているのねー」

再びジェネの『夢見る乙女』ポーズに、頭を抱えるゴバン。

「——もういいって。そのかわり中枢区ん中まではゴメンだからな。こっちにも事情があんだ」

ゴバンはそう言いながらも、早く馬車に乗るよう、手で荒々しく合図した。

「あ、それはもちろん！それにあたしの村はエリアの端の方にあるの。でもどこへ行くの？今夜はこの町に泊まるのかと思ってたのに……」

「ここはもうアブネーんだよ。野宿だ、野宿！」
「でもさ……」

ジェネは何か不満そうだ。

「なんだよ！」
「だって見てよ。あたしの格好」

ジェネは短いスカートを両手で広げてみせる。

「だから？」

「あたしの服は買つといた方がいいと思うわよ。こんな格好じゃ盗賊が寄って来ちゃうしさ。ね、ゴバン」

そう言つて、ジェネはニツコリと笑った。

・
・
・

それにしてもなぜポリスでもない、ただの宿場町に、バカ高いドレスが売っているのがゴバンには不思議だった。とはいえよくよく考えてみれば、あの町に「ハデな女」が多いのは知っていたし、彼女たちが何の仕事をしているのかも知識としては知っていた。実際ゴバンも夜の町をうろつけば、必ず声をかけられたものだ。

それを思い出すにつけ理由はすぐに分かったのだが、ジエネに財布を渡してしまったことを、ゴバンは今さらに後悔していた。しかもジエネは、そんなチャンス逃さない術を心得ているようで、当然、ゴバンが危険のない人間だと言うことも見抜いていたようだ。

「あたし一度こういう高そーなドレス着てみたかったのよねー。ねえ、ゴバーン。あたし色っぽいー？」

ジエネはついさっき買ったばかりの、高価なドレスを両手で広げ、ヒラヒラと舞って見せた。そのフリルのいっぱい付いた深紅のドレスは、まるで踊り子のそのようにも見える。

「クソガキ！」

ジエネの大人ぶった声色に、ゴバンは見向きもせずに戻る。興味ゼロだ。辺りは既にとつぷりと暗くなり、食事を終えた三人は焚火を囲んで、寝るまでの暇を少々持て余し気味にしているところだった。

「なによー、せっかくあたしが道化役を引き受けてわざわざ着て見せてあげたのにさあ。そんなリアクション取られたんじゃ場が盛り上がらないじゃないよー」

ジエネはすっかり地を出し始めている。

ゴバンが買わされたのはこのドレス一式と、ごく地味な厚手のシヤツとズボンだった。ただしシヤツとズボンに関しては、ゴバンが後から仕方なく買ったものだ。旅の安全のために…

「何が道化役だよ。バカ高い服選びやがって。だいたい盗賊よけだあ？ドレス買ってどーすんの！」

「えへへー、いいでしょ」

コクリ…と、ゴバンの隣にいたルーマが、もの欲しそうな目であらずく。自分は何も買ってもらえなかったせいだろうか？心なしが不満そうだ。

「ちえ、バツがワリイや…」

顔をしかめるゴバン。するとルーマは彼の二の腕にソツと触れると、無言のまま首を左右に振って慰めた。気にしてないということ进行いたらしい。

「ねえ、さつきから気になってたんだけどさ…」

「なんだよ！」

「なんでルーマは喋らないわけ？」

「無口なんだろう？」

ゴバンはそ知らぬ顔。ルーマも奥の方でコクコクとうなずき、無口ぶりをしきりにアピールしている。

「でも最初に会った時は普通に話してたしさ、彼女見てるとさつきから喋る気満々じゃない。ぜーったいおかしいわ」

確かにルーマは、今も興味津々でジエネを見つめ、何か話したく

てウズウズしているようにも見える。ジェネが疑うのも当然だろう。そしてそれは、ゴバンがルーマに一言「ジェネとヘタに親しくしてボロ出すなよ」と、言ったことが大きく関係していた。

ゴバンにしてみれば、ジェネがドツタポリスの人間であることはもちろん、彼女の好奇心やお喋りを何よりも危惧していた。ここでジェネに話したことが、ロブランやドツタに伝わらないという保証はどこにもなかったからだ。

しかしルーマは嘘と本当をうまく使い分けるほどに器用ではなかった。それはルーマ本人も心得ていて、ゴバンの言う『ボロ』を出す可能性が高いと彼女自身、判断したのだ。その結果出した結論が『沈黙』なのだろう。

ただルーマとしては、ジェネが洋服を選んでいる時に使った、聞いたことのない幾つかの言葉に興味があったし、歳の近い同性である彼女に好奇心を抱いてもいた。実際、ゴバンを店の前に立たせての女二人だけのショッピングが、ルーマにとってかなり新鮮だったことは確かで、それだけに本音を言えばジェネと色々な話をしてみたかったのだ。そしてそれらが彼女の中で複雑に絡み合い、『無口だけドフレンドリー』という不自然さを生んでしまったのだろう。

「ねえ、あたしの素直な疑問はこのままムシされちゃうのかしらね？」

いつまで待ってもゴバンから何も言葉が返って来ないのを見て、堪りかねたジェネが訊ねた。だがゴバンは不機嫌そうにムスっとしたままだ。

「あー、なんか感じ悪い。すっごい秘密隠してそうに見えるわ」

ジェネの好奇心は止まりそうにない。

「うつせーなあ！誰にだって言いたくねえことぐらいあんだろつがよ。大したことじゃねえ！あんましつけえと放り出すぞ」

腹立ち紛れに声を荒げるゴバン。しかし、そんな彼の脅しにもジエネはまるで動じることなく、ゆっくりと、微かな笑みを浮かべながらこう言った。

「へー？知られたくないことって例えば…ルーマの裸がすごく綺麗だってこととか？」

「なっ！？」

それが何を意味しているのか、ゴバンにはすぐに分かった。

「おい…」

「や、やあね。そんな恐い顔しないでよ。たまたま彼女が川で体洗ってるところ見ちゃっただけなんだからさ」

ゴバンが向けた鋭い瞳に、さすがのジエネも少し怯んだようだ。

「さつきか？でもお前、あん時は俺の目の届くところにいたじゃねえか」

「うん。そこでしょ？」

ジエネはすぐそばの、地面の盛り上がった場所を指差した。

「そこ、意外と見晴らしいいのよ。あたし草原育ちだから目はいいしね。ホントにびっくりしちゃった。全身生身の人間が他にもいるなんてさ」

あまりにあっさりと言ったので、ゴバンはその言葉の重要性をす

ぐに理解できなかった。しかし不意に気づいて、ガバツと顔を向ける。

「なんだって!？」

「フフ…だからあ。あたしも『フルボディ』だってこと」

「フルボディ…」

一瞬、ゴバンの脳裏に記憶の断片がオーバーラップした。しかしなぜだろう？重要なことのはずなのに、よく思い出せない。

「知らないの？機械のない体のことよ。だからあたしの体もルーマに負けないくらい綺麗なの。フフ…見たい？」

首を傾けて悪戯そうに挑発するジェネに、ゴバンは至ってマジメに。そしてハッキリと答えた。

「ああ、見てえな…」

途端にジェネの顔が赤くなる。まさかそう来るとは思わなかったのだ。

「ば、バツカじゃないの！ゴバンなんかに見せるわけないでしょ。

男ってホントにイヤラシイんだから！」

「え？あ、違う。そーじゃなくてよ——参ったな…」

ゴバンは我に返ると、バリバリと頭を掻いた。見たいと思ったのは確かだが、それは彼女が本当にフルボディなのかどうか、純粹に知れたかったのだ。思い出しかけた記憶の断片を、より鮮明なものにするために——そう。ゴバンはフルボディという言葉を、以前にもどこかで聞いたことがある…

ブンッ！

突然だった。そんな音が聞こえてきそうな勢いで、ルーマの顔がゴバンの視界を塞いだのだ。焚火の前で座るゴバンの膝に手を乗せ、額がぶつかり合うほどの距離で二人は向き合った。

そして――

「ゴバンは見たらダメだ！」

「ヘッ？」

ルーマの言葉に大きくうなずいたジエネは、すかさず立ち上がる。

「まったくよ！ルーマも気を付けるのよ。男なんてねー、みんな野獣なんだから」

「や、野獣……？」

俺が？とばかりに顔をしかめるゴバン。それを尻目にルーマは立ち上がり、クルリとジエネの方に振り返ると、好奇心に満ちた瞳でこう言った。

「私ならいいか？ジエネ」

「へっ？な、何がよ？」

どうやら『だんまり』はやめたらしい。好奇心が押さえ付けられなくなつたのだろう。

「だからジエネの裸見るの。私なら同じ女だし。ゴバンのように野獣でもないぞ」

「あんたの前で脱げって？なんで？」

「え？だって……見たいから。綺麗な体……」

「やーよ！そんなの」

ジェネの思いのほか強い口調に、ルーマは少し意外そうに首をかしげた。と同時に、フルボディに対する好奇心以上のものがルーマの中で生まれ、その追求は止まらなくなった。つまり、ジェネはなぜ嫌がっているのか？

「えーと…ってことはつまりジェネは——綺麗じゃないってことか？」

「失礼ね、綺麗よ！スツゴクね！」

「なら見せて」

「イヤッ！」

「私のは見たのに…？」

悲しそうにジッとジェネを見る。

「~~~~っ」

「あ、そうか。恥ずかしいのか？」

「べ、別に！」

ジェネが僅かに動揺したのを見て、ルーマは確信した。その感情は自分にも分かるから…

「そうだ！もし恥ずかしいのなら私も脱ぐぞ。二人一緒なら…」

そう言ってルーマは、いきなり自分の衣服に手をかけ、シャツのボタンを外そうとした。

「よけい恥ずかしいっての！もう信じらんない。レズじゃないんだからね。だいたいゴバンだって信用できないしさ！」

「見ねーよ」

ゴバンは既に背を向けている。

「私がしっかり監視するから安心していいぞ。あ、馬車の中なら覗かれることもないかも…」

「信じるよ…」

ゴバンがボソリとつぶやく。

やがてジェネはあきらめたように天を見上げ、大きくため息をつきながら言った。

「…いいよここで。他に人なんていないし。あ、ゴバンはダメだからね!」

一応クギ刺し。

「もう…まさか裸になってまで確かめさせられるなんて思わなかったわ…」

そう言っ、とうとうジェネはドレスの紐を解きはじめた。

・ ・ ・

ギヤア!ギヤア、ギヤアッ!
ペソアが突然叫んだ。

「な、なに!?!」

ジェネはたつた今脱いだドレスを胸に当てて驚く。

ペソアが夜中にいきなり騒ぎ出すのは珍しいことだった。その声を受けて、カポンもブルブルと鼻息を吐き出して足踏みをした。ペソアは人の気配に特に鋭敏で（それはナッツパーツを見つけたす能力にも関係していた）、おかげで、夜中でも見知らぬ人間が近付けば警報代わりになる。

「盗賊か!？」

地面に置いた山刀を取り、ゴバンがジェネの方に振り返りかけたその時――

ゴキン――!

「まだダメだ!」

ゴバンの顔をムリやり戻すと、ルーマは耳元でささやくように言った。

「――私には感じないぞ」

人間を感じる力――その能力に関してはルーマもペソアには負けない。実際しばらく待ったが、人が近づく様子はなさそうだ。

「ね、ねえ……あたし、服着ていいかしら？」

緊張感から何も言えなかったジェネが、ようやく二人に声をかける。

「ああ、すまないジェネ。もういいぞ」

相変わらずのルーマの口調だったが、その声は優しく、ジェネを何よりも安心させた。

「あの鳥、なんで騒いだの？」

「分からない。でも盗賊が来てもゴバンが守ってくれる。安心していいからな」

ルーマは心強い笑みと共に、地面に落ちていた下着を手渡してやった。ちなみに当のゴバンはうな垂れるようにして、首をととも痛そうに押さえたままだが…

「ありがとう。ルーマ」

ジェネも嬉しそうに笑う。ルーマの中に力強いものを感じたのかも知れない。

「ジェネの体は綺麗だな。機械病にかかってないからなのか？」

「うん、そうよ。ルーマも？」

一瞬ルーマは動揺したが、表情に出すことも、不自然な間を作ることもなく冷静に対処した。そこに嘘はなく、気を使う必要もなかったからだ。

「そうだ。病気にはかかっていない」

ジェネはゴバンに買ってもらった（というより勝手に買った）様々な下着——中にはジェネの体型では必要のなさそうなもので、順々に装着していった。ルーマはそれを興味深げに見つめている。

「あ、ねえルーマ。ここ、結んでくれる？」

「えーと…これでいいか？」

「うん、ありがと。でもヘンよね。みんなあたしたちみたいな体になりましたが…てるのにさ、実際こんな体持つと大変だもんね——あ、でも…」

ジェネの表情が変わった。

「ううん、一番大変だったのはお母さんか…」

「お母さん？」

ルーマが顔を傾げた拍子に、肩からサラリ…と、髪が落ちた。もちろん母親の概念は知識として知っているが、実感として分らなかったから…

「うん。あたしは小さかったしね。何が大変なのがよく分かってなかったから。あれは…えーと、六歳ぐらいの頃かな？機械病にかかったフリをしたの。家ぐるみで」

「機械病のフリ？」

「そう。普通は三歳ぐらいまでにはかかるのよね、アレ。でもあたしはいつまで経ってもかからなくて、村の人間たちも変な目で見始めて、それでね」

最後にドレスをスルスルと着込むと、ジェネは肩をすくめておどけてみせた。

「十三歳になった今もこの通りよ。アハ…。で、ルーマは？あたしより年上よね。でも病気にかかってないのね。すつごく興味あるわ。生まれは？ルーマのその肌だと…やっぱり北の方？」

「あ、えーと…」

戸惑いを見せるルーマ。

頭の回転の早い彼女も、ここでは少しばかりの間を作ってしまった。すると唐突に、ゴバンが不機嫌そうに叫ぶ。

「おい！俺はいつまでここで寂しく膝抱えてなきゃいけないんだ！？」

「え？あつ、そうだった。——ジエネ、もういいか？」

「あ、うん」

「おせーよ、まったくよー」

ゴバンは尚もブツブツと言ったが、それはルーマへの助け船でもあったかも知れない。と同時に、ルーマに話題を変えるきっかけと機転を与えた。

「そうだ、ジエネ。私、ひとつ聞きたいことが…」

それは本当に、さっきから聞きたくて聞きたくてしょうがなかったことの一つでもあった。

「なあに？」

「コルセツトって、何だ？」

「は？」

ジエネは一瞬顔をしかめる。が、すぐに快く答えた。

「さっき紐結んでくれたでしょ？アレよ。あの下着」

「え？あれって防具じゃなかったのか！？」

思わず吹き出すジエネ。

「ぷつくく！ルーマって何にも知らないのね。アハハハ！アレ付けるとね、スタイルが良くなるのよ」

「スタイル？」

彼女には今一つピンと来ないらしい。

「ルーマならそうね…あたしのよりもつと胸元のあいたドレスがいいわ。その下にコルセット付けて胸強調して…きつとスゴク色っぽくなると思う」

「色っぽく…本当に？」

ルーマの表情が変わった。クスクスと笑うジエネは何か嬉しそうだ。

「だってルーマの肌白くて綺麗だもん。あ、ねえ。ちょっといい？」

「なんでボタン外すんだ？わっ、ジエネ！？」

「わあ！胸にもそばかすないのね。いいなあ…」

「そばかす？ジエネにもなかったぞ？」

「あたしはルーマみたいに肌白くないし…決めた。このコルセット、ルーマにあげるよ。ホント言うところサイズがね…アハ。悔しいけど、きつとルーマにだったら合うと思うわ」

クスクスと笑い合いながら、尚も会話を——というよりじゃれ合いを止めようとしない二人を見て、いや、実際見ることもできず、ゴバンは一人背を向けて頭をバリバリと掻いていた。

「俺…先に寝ちまっていいのかな…」

工兵隊時代

「ミヨール中隊の誘いを蹴ったゴバン・シャノムってお前？」

それが最初の出会いだった。

ゴバンは兵員宿舎の庭の片隅に一人座り、鞘から抜いた工兵隊用のマチエーテを手でもてあそびながら、刃先に映る顔には殺気すら漂わせていた。しかし話しかけてきた男は全くためらうことなく、いきなりズカズカとゴバンの懐に入ってきたのだ。いや、よく見ればその顔はあどけなく、14歳のゴバンと比べてもそう差はないように思える。恐らく同じように、隊に入っただけの新兵なのだろう。

「あ、ワリイワリイ。オレ、パシエットっての。よろしくな」

手を差し出した男はニカーツと、白い歯を見せて気持ち良く笑った。

どんなに人を拒絶するオーラを発していても、気にせずに入ってくる輩はどこにでもいるものだ。そんな時にはいつもするように、ゴバンは無視を決め込むつもりでいた。しかしなぜだろう？この時だけは彼の顔を見たときに、そんな気持ちもどこかへと消えていた。或いは単に歳が近いというだけの、他愛もない好奇心からなのかも知れない。

「で、シャノム。なんで工兵隊に志願したんだ？ミヨール中隊って言えば、ドツタじゃかなり有名な部隊なんだぜ」

ゴバンはマチエーテを鞘に納めると、静かな口調で言った。

「——ただの人殺しよりマシだからさ」

「マシ？へー、でもお前スッゲー『ブキ』じゃん。工作研修見てたぜ。見てて危なっかしーの、マジで。そんなん平気か？」

「不器用じゃいけねーかよ？」

相手の気さくさを打ち砕くような、射すくめるような瞳。

ゴバンはその後の相手の反応が、たいがい二種類に別れることも良く知っていた。怯むか怒るか——だが、彼は違った。

「アッハッハ！そりゃそうだ。要はやる気だもんな。不器用なヤツほどマジメだしさ」

パシエットは可笑しそうにケラケラと笑いだしたのだ。別にゴバンを馬鹿にしてるわけではない。本当に楽しそうな、空に抜けるような笑い。それはゴバンの知らない笑いでもあった。

パシエットは続ける。

「噂じゃ隊長のロブランが、ムリヤリお前のこと工兵隊から引き抜こうとしてるとかって聞いたけど——まあいいや」

一瞬だけ見せたその表情を、ゴバンは見逃さなかった。自信家の人間だけが持つ特有の瞳と、それを隠す抜け目なさ——ゴバンには分かる。そしてこの時、衣服に縫い込まれた階級章を見たゴバンは、初めて気づいたのだ。パシエットと名乗るこの男が、同じ新兵などではないということを……

「なあ、シャノム。良かったらオレの隊に来いよ。『パシエット工兵大隊』だ。オレ、これでもそこの隊長だからよ。来てくれりゃミ

ヨール中隊なんかには渡さねえぜ」

ゴバンより一つ上にしか過ぎない15歳の少年は、そう言って気さくに笑った。

・ ・ ・

「寝らんねえ……」

やがてゴバンはあきらめたように体を起こすと、大きくため息を付いた。ついさっきまで、馬車の中からはクスクスと笑い合うジエネとルーマの声が聞こえていたのだが、今は虫の声と川のせせらぎだけが辺りを征している。ゴバンは木々の向こう側からチラチラと差し込む月の光を見つめながら、ボーッと思索にふけていた。

「——まさかな……」

つぶやくように一言。

今ゴバンの頭の中には、怒涛のようにかつての記憶が流れこんできていた。いや、最初の一本をたぐり寄せたのはゴバン自身だ。

頭の中にふと浮かんだ疑問。そして不安——後は勝手に向こうからやってきて、忘れていたはずの様々な記憶が溢れ出して止まらなくなっただけだ。

忘れていた？

いや、違う。記憶の奥底に沈むほどに、年月は流れていない。たかが三年だ。その気になれば思い出は幾らでも出てくる。それはただ単に、ゴバンが思い出そうとしなかったただけに過ぎないのだ。だが今は違う。どうしても思い出す必要があった。

自分が気づいたことに、いったいどこまで信憑性があるのか？記憶の彼方にそれを解く鍵はないのか？

つい昨日までは赤の他人でしかなかった。今も口やかましいだけの存在だ。しかし彼女の笑顔を、ルーマとのじゃれ合いを見るにつけ、不安はゴバンの中でどんどん大きく膨れ上がっていった。

そしてそれが単なる思い過ごしに過ぎないことを、ゴバンは何よりも切に願うのだった。

・
・
・

峡谷を越えてからは、青々とした草原が地平の彼方まで広がっていた。馬車はドツタエリアへと向かう一本道に差し掛ってから、今日で既に二日目になる。恐らく通常のラウスならば倍はかかるであろう道程を、脚部が機械の力ポンは何の苦もなく（機械的なトラブルにも見舞われず）ひたすら走り続けていた。

もう間もなく、ドツタポリスの制圧エリアに入るはずだ。

「——バン？ゴバン？どうしたのゴバン？」

「えっ！？」

ハッとして我に返った。

手綱を握ったままのゴバンは、まるで白昼夢を見た後のように辺りをキョロキョロと見回して、状況把握に努める。

「危ないなあ。ゴバンってば寝不足？」

クスクスと可笑しそうに笑うジェネ。いつの間に隣に来ていたのだろうか？ゴバンはバツが悪そうに頭をバリボリと掻いた。

「別に寝てたわけじゃねえぞ。まあ…考えことをよ」

「考えごとって？」

「ガキの頃のことさ。それよりルーマはどうしてる？」

ゴバンは何げに後ろを振り返ると、幌の隙間からはルーマの長い金髪だけが見えた。

「寝てるわ。昨日はちよつと夜更かししちゃったからね」
「昨日も…だろ？」

ジエネはエヘ…と笑った。

「なんかルーマのこと奪っちゃったみたいね。ごめんね」
「ン？別に構わねーよ」

それは本心だった。

ルーマも実際ジエネとの会話を楽しんでいるようだったし、ゴバンにしてみても、自分の時間が持てることは都合が良かったからだ。しかし今はもう、考えたところで仕方のないことなのかも知れない。思い過ごしであろうがなかるうが、もう間もなくジエネを送り届ければそれで終わる。それっきりもう、二度と会うこともないかも知れない関係に過ぎないのだから…

「ねえゴバン…。あ、あのさあ…」

一瞬ドキリとした。突然気まずそうに話しかけてきたジエネに、ゴバンは自分の心が見透かされたような気がしたからだ。あえて無言で、ゴバンは先を促す。

「あ…えつと——やっぱなんでもないの。へへ…」
「なんだよそりゃ!」

ガクン…と、肩の力が抜ける。

「あ、そうそう! 興味あったんだ。ルームとはもうしたの?」
「はい?」

「だからあ。もう…したの? ルームと」

意味が分からない——いや、すぐに想像したものはあったが、そんなことを聞くはずがない。急激に広がりそうになる煩惱をゴバンはムリヤリ押し込めた。

「き、君はなんのことを言っているんだい?」

「もう! ルームと同棲してたんでしょ? 聞いちゃったんだからね!」
「やっぱそのことかよ!」

思わずツツコミを入れるゴバン。

「だいたい同棲ってのは…ちっげーよ、バカヤロウ! かくまっただけだ」

「えー、でも何日も一緒に暮らしたんでしょう? 立派な同棲だわ! それにルームがフルボディだってこと、ゴバンが知ってるなんてさあ。なぜかしらねー?」

「そ、それはまあ、色々あってよ…別に裸を見たとかってーか、その…」

もちろんハッキリと見た。だいたい出会いからしてルームは裸だったのだし、戦慄さえ覚えたあの瞬間、脳の記憶媒体は大活躍していたのだから——今もハッキリと思い出せる。

「——したのね？」

「だから何をだよ……！」

ジェネは自分からツツコミを入れておきながら、ゴバンの言葉に両頬を押さえて「やーらーしーっ！」と、大きな声で叫んだ。すごく嬉しそうだ。逆にガツクリとうな垂れるゴバン。

「——ガキは嫌えーだ……」

しかしそのジェネの奇声はいきなり止まった。突然、咳込みだしたのだ。

ゲホッ！ゴホッ！

「オーイ、平気か？」

ゴバンは手綱を器用にさばきながら、片手でジェネの背中をさすってやる。

「あ、へーキ……ツケホ！どうしたのかな？コホ！朝からなんか喉がね」

「風邪じゃねえの？いつまでも寝ねーからだぜ。だいたいさっきからはしゃぎ過ぎなんだって。人のこといじめやがってよー」

「——ゴメンね……」

ここぞとばかりに反撃に出ようとしたゴバンの言葉は、ジェネの素直さにあっさりとかわされてしまった。しかもジェネはなぜか、フウ……と、ため息をついてしまう。

「ん、どうしたよ？」

「ん？あ、えと…きつと私、夢見てたと思うの」
「夢？」

ジェネはコクリとうなずいた。

「ルーマと一緒にはいだりね、ゴバンと一緒にこうして馬車に乗ったり。ずーっとこうして三人で、毎日旅をしながら生きられたら素敵だろうなあ…ってね」

ゴバンにはジェネの真意が分かりかね、小首をかしげた。

「ふーん？でももうすぐ故郷に帰れんだからよ。それもいいもんなんじゃねえの？そう言えば聞いてなかったけど、お前家族は？親とかはまだいんの？」

一瞬の奇妙な沈黙。

「あれ？なんかワリイこと聞いちゃった？俺」
「——あ…え、えーとね。あたし、ゴバンに話さなくちゃいけないことがあって…」

「なんだよ改まって…あ、待ちな！」
「えっ！？」

ゴバンが上を見上げる。
ギヤアツ！ギヤアツ！

ペソアだ。よく晴れた青空の中、旋回しながら何かを訴えているように見える。もちろん、ペソアが訴えることなどだいたい限られているのだが…

「人間か？」

「え、もう!？」

ジェネの奇妙な反応。何が「もう」なのか？

しかしそのことに疑問を抱くこともなく、ゴバンは素早く手綱を引いて馬車を止めると、立ち上がって前方に目を凝らした。ルーマもいつの間にか起きたのか、幌の隙間からゴバンに声をかける。

「ゴバン、前の方から人の気配を感じる。大勢だ」

「ああ、見えた。なんかテントみてえのが立ってんな」

「あ、ゴバン。あのね…」

ジェネは何かを話そうとするが――

「いいからジェネは馬車ん中に入ってな。ルーマもだ。様子見てくる」

ゴバンはジェネの言葉に耳を傾けることなく、さっさと馬車から降りてしまう。そして慣れた動作で鞍袋の脇に付けられたホルダーから山刀を取り出し、それを腰のベルトに突き刺すと、前方に注意を向けながら歩き出した。

「ゴバン、待って！私もいく」

しかしすぐに後ろからルーマが駆け寄ると、ゴバンの背中を軽く叩いた。

「おい、危ねーから馬車ん中にいろって…」

「たぶん役に立てると思う。ゴバン…ダメか？」

その表情はいつも以上に落ち着いているようにも見える。長い髪

を風に吹かれながらジッと見上げるルーマに、ゴバンはため息をつきながらもうなずいた。

「髪がうっとうしいな」

「髪？」

自分の髪を手で持って、不思議そうに訊ねるルーマ。

「風になびくと目立つんだよ。その金髪は。敵に発見されやすくなる」

「あ！」

「——まあいいや。これ使え」

ゴバンは自分の髪を縛っている革紐を解いて、バサバサと顔を左右に振る。

「わー、ゴバン。紐取ると顔、変わるな。女の人みたいだ」

「バーカ、こんなゴツイ女がいるか。ホラ、後ろ向けよ。縛ってやる」

「うん、ありがとう」

ルーマは嬉しそうにうなずいた。

ゴバンはルーマの長い髪を手で束ねると、革紐を髪の下の方で縛ってやる。風に負けないようにするためだ。

二人は道沿いに、さっき見えたテントの見える辺りを目指した。ちょうど正面はうまい具合に尾根になっていて、態勢を低くしていれば視認されることはない。ゴバンたちはそれをうまく利用しながら徐々に近づき、真正面に軍隊らしき集団が駐屯している様を捉えた。

「ヤッペーな…ドツタ軍だ」

「ドツタ軍？ロブランがいた軍隊か？」

ゴバンは肩をすくめる。

「よく覚えてんな——でもなんでこんな辺境に…？」

確かにここはドツタエリア内ではあったが、中枢区へ直接通じる道ではない。端の方を僅かに横切るだけの道であり、軍隊に出会う危険などまずないだろうと思っていたのだ。

「ジエネを送るには、この道以外だと——参ったな」

中枢区付近を通過する道以外、思い当らなかった。ゴバンが考えあぐねて頭を掻いていると、いきなり下の方から、ルーマがゴバンの衣服をクイッククイッと、引っ張った。なぜか彼女はしゃがんでいる。

「へ？お前何してんの？」

「いいから、見て！」

ルーマはしゃがんだまま、手に持った小石で路上に図を描いていた。

「いい、ゴバン。ここが私たちのいる場所。これがドツタ軍。これ尾根ね。ドツタ軍の馬車はここ。全部で四両ある。兵士はこの尾根のすぐ向こう側に何人かいるけど、馬車の近くにはいないみたい。後はみんなテントの中にいるんだと思う」

ルーマは次々と、たった今一瞬見たばかりの駐屯部隊の配置を図

に描きだしていく。

「おいおい、今ちよつと見たただぞ!？」

「うん。でも分かるの。なんでかな…?」

ルーマは小首を傾げながらも、今度はワケの分からない数式を書き、更に続ける。

「大雑把だけど…これがカポンの速度を表す数字ね。尾根の向こうは緩やかな斜面だからもう少し速くなると思う。それから距離。人の速さがこれで、馬車から一番近い人間までの距離が——これをこの式に当てはめて…」

「あーちよい待ちな。何が言いてーのか見えてこねえんだけど——計算はいいから。ぶつちやけて言ってみ?」

ゴバンも数学を全く知らないわけではない。工兵隊時代、パシエツトに少しは教わっている。しかしルーマの描きだすそれは、記号一つ取っても見覚えのないものばかりで、ハッキリ言ってちんぷんかんぷんだった。しかも作戦を立てる時に数学など、パシエツトだつてやらない。

「ぶつちやけ…?え、えーと…」

「だからよ。答えだけ教えろつての」

ルーマは納得したようだ。

「ああ、そうか。えつと…ぶつちやけて言つとな、カポンのスピードなら思いつきり突っ切れば確実に抜けられる」

「ホントかよ!？」

「うん。それに、カポンみたいに足が機械のラウズは他にいないっ

てゴバンが——えーと、同棲してた時に私聞いたぞ」

「同棲じゃねーって！」

思わずツツコミを入れるゴバン。たぶんジエネが教えたに違いない。

「同棲じゃないのか？」

「いや……まあそれはいいや。とにかくよ。カポンの足は維持すんだけでもけっこう金がかんだ。自分の足ならともかく、ラウズにそれだけかける物好きもいねえだろ」

「じゃあ平気だ。きつと追い付かれることもないと思う」

「よし、それで行こうぜ。俺そーいうの好きだしよ。あとついでに、もう一つ。俺からも作戦があんだけどよ」

ゴバンはニヤリと笑った。

・
・
・

カポンはラウズの中でも特別な存在だった。

機械病には全ての動物がかかるわけではなく、人間と、一部の人間に近しい動物だけが機械病に感染する。もちろんその理由は定かではないが、ただ言えるのは、もしも機械病にかかる野性種がいたなら、その種はあつという間に絶滅してしまうだろう。機械は人間の整備なしに維持できないものだからだ。

本来機械というものは、それが精巧なものであればあるほど、その維持には莫大な費用がかかる。それはミクロン単位の精密な仕事をこなす、言わば特別な『職人の手』が必要になるからだ。

ましてや機械病によって体の一部となった機械部位は、通常の単

なる機械とは大きく異なる。当然と言えば当然だが、この機械は肉体と共に成長することになるからだ。

それだけに、精巧な機械への変異をしてしまった者の苦労は大きい。なぜなら成長過程にどこかの部品——例えば歯車が一つ壊れてしまったとしよう。その場合、代わりの歯車は機械部位の成長に合わせて頻繁に変えてやる必要がある。すぐに噛み合わなくなるからだ。そして精巧で複雑な機械ほど、部品が多く壊れやすい。

そのため機械部位が壊れた場合の交換は、（それが命に拘るか、もしくは金持ちでもない限り）たいがいは成長を終えてからするのが普通だ。従って成長過程の子供の中には、壊れた部分がほったらかしにされて動作しなくなり、あたかも障害者のように杖や義手、義足などに頼るケースも少なくはない。

しかしカポンは違った。たかが動物でありながら、壊れた部品は絶えず交換され、その成長過程に思う存分、野を駆け回ってきた。それだけに脳と機械部位とのシンクロ率も高く、その動作性能も極めて高いというわけだ。

しかもカポンの部品の中には、壊れれば（ゴバンたちの時代の技術力では）二度と直せない類のものも多かったのだが、それらが未だに壊れていないという運もある。

つまり色々な意味で、カポンは奇跡的な存在と言えたことは確かだった。

・
・
・

「お前が拾ってきたラウズだけどさあ……メチャクチャ厄介な。ちょい解体すんだけどまあ骨折れるわ——えーと、名前なんつったっけ？」

あぐらのまま、コキコキと首を回して一息つくパシエットの前に
は、まだ小さな、背丈にして1メートルほどのラウズがいた。ラウ
ズにしてもこの状況は既に慣れたもので、時折辺りをキョロキョロ
と見回すものの、ジツとしている。

「カポンだ」

パシエットの横で膝を抱え、ジツと作業する様を見つめていたゴ
バンが答えた。

「ふーん？カポン…カポンね——歩く時カポンカポン音立てるから
？」

「違うつて！俺の育った村で『世話のやける』って意味だからカポ
ンにしようつて、この間言っただじやんかよ！」

「あーワリワリ。ほら俺さ、人の話聞かないから」

そう言つてパシエットはニカーツと、いつものように目を細めて
気持ち良く笑った。ゴバンもつられて笑う。

ゴバンがパシエット工兵大隊に入ってから一年。今ではゴバンの
パシエットに対する言葉にも、以前のようなトゲはない。いや、そ
れどころか二人の間には、友情のようなものさえ生まれつつあった。

「でも悪いなパシエット。いつもやってもらつてさ」

「しゃーねえさ。拾った時から膝イツちやってたかな。コイツ今
一番成長する時期だから、小まめに部品付け換えてやんねえと…」

「ああ。でもそれだけじゃなくてさ——俺の給金だけじゃ部品代出
ねーし…」

「あーいいのいいの。こんな俺のポケットマネーでなんとかなん
のさ。さすが大隊長殿だろ？」

「自分で言つな！」

そしてプツ…と、ゴバンは吹き出した。パシエットもつられる。実を言えばパシエットは、ゴバンのこんな表情を見るのが何よりも好きだった。

「ま、鑄型師のオヤジは昔っからのコネがあるし、俺がやる作業なんざ人件費タダだかな。それに俺もコイツいじくんの好きなんだよ。実際関心するぜ。この中は——って、まあ、ほとんどはワケ分かんねーんだけどな」

パシエットはカポンを見ながら、ボサボサの猫っ毛をバリバリと掻く。

「俺はそんな時のパシエット見てんの…好きだな」

自然と出た言葉だった。

パシエットは少し意外そうにゴバンを見つめ、目が合うとなぜかパシエットの方から話題を変えた。何か言おうとしたように見えたのだが…

「あ、そうそう！給金って言えばよ。近々戦争おっぱじめるらしいぜ」

「どここと？」

「知らね。…って言うかまだ秘密だ。一応、守秘義務ってヤツでさ。ワリイな。でもよ、今度の戦争に勝てばかなりの報酬が出るかも知んねーぜ」

「ふーん…」

ゴバンのその顔は、決して喜んでなどいなかった。別に戦争が恐いわけではない。ドツタに来る以前の、毎日の日常

——ゴバンにとってそれに勝る恐怖はなかったのだから……

村を出てからは毎日が戦いだった。見た目に機械を感じさせず、ただの子供ということももちろんある。ゴバンは一見して、親バカな権力者たちを満足させる最高級のパーツであり、絶えず標的にされる運命にあった。しかし恐怖はそういうことではない。もつと恐ろしいものがあつた。

それは戦いではなく、日常だ。睡眠に入るまでの長い長い時の移ろいだ。孤独や、夜毎に襲う狂気だ。なぜこれほどまでに時がゆっくuriとしているのか？それが信じられなかった。その止まった時間から抜け出したかった。

ロブランの目に止まったのは偶然に過ぎない。抜け出したいという、ただそれだけの理由から、やがて誘われるままにドツタの兵士となり、ただ気に食わないという理由だけでロブランの元から離れた。信念などとは程遠かつたし、言わば単にひねくれていただけしかない。

そんな時、パシエツトと出会ったのだ。

ドツタに来たことを間違ひと思ったことは一度もない。あの時を逃していたら、ゴバンもやがては狂気に慣れ、ゆっくりと歪んでいっただろう。ただ、来たことを間違ひとは思わなくとも、ドツタを出ようとしたことは数知れない。それは今もそう。しかし深く考えるほどに、最後は必ず同じ結論に辿り着くのだった。

——ここを出ることなどあり得ない……と。

確かにここは——ドツタポリスは、余りに戦争を仕掛けすぎる。

自己中心的な野心に左右されすぎる。それは得体の知れないものに包まれた醜い君主の心だ。ドツタの兵士でありながら、ドツタというポリスに吐き気さえ感じる。だが、この好戦的なポリスにいる辛さ以上に、ここを出ることの方が辛いのだ。ここには絶対に失いたくないものがある。

ゴバンにとってそのことが、今もドツタにいることの全てだった。

「なあ、ゴバン……」
「え!？」

ハッとしてゴバンは我に返った。

「なにボーツとしてんの? お前タマにそうな」
「……悪い」

パシエットは肩をすくめてみせる。

「ま、いいや。それよりお前さつき、俺が機械いじってるとこ見んの好きだつて言ったよな?」

「ン? ああ……」

「俺、お前と会ってから一年ぐらい経つけどさ、お前の口から『好き』つて言葉聞いたの初めてなんだぜ。知ってた?」

「え!?! まさか?」

「ホントさ。ま、オレ人の話聞かねーけどな」

再びニカーッと笑う。

言葉に全く説得力はないのに、それが全てを納得させてしまう。必要と判断したことに關して、彼が忘れたり聞き逃したりすることがないことを、ゴバンはこの一年間の付き合いでよく知っていたからだ。

そしてパシエットは再び作業に戻る間に、サラリとつけ加えた。
「……悪かねえな」

ゴバンの胸がなぜか高鳴った。

それはこんな時にだけ見せる、パシエットのいつもとは少し違う笑顔。彼が気を許した瞬間にだけ見せる顔だ。

——その顔を見ていたい……

理由はそれだけだった。ここに居ることの全てだ。

ゴバンは生まれて初めて他人に憧れを抱いた。心酔した。そして彼の明るさを、前向きな自信を、自分のものにしたいと——そう思うのだった。

戦いの理由

「行くぞ、ゴバン」

「いいぜ！」

ピシッ！

手綱を叩く音とともに、カポンの硬質で力強い足が大地を一步一歩踏みしめた。速度が上がるに従って車輪はやがてガタガタと激しく音を立て、砂塵を巻き上げ、そして小石を弾く。もう間もなく尾根だ。

左手で手綱を、右手で長い鞭を力強く揮うのはゴバンではなく、ルーマだった。そのすぐ脇でゴバンは右手を支えに仁王立ちになり、左手は準備運動とばかりに指を開いたり閉じたりしている。

徐々に尾根が近づいてきた。その稜線の向こう側は青い空だ。そして次の瞬間、ガタン！と、ひと際馬車が跳ね上がると、二人とも軽く宙に飛び上がった。一気に開ける景色。眼前にはなだらかに下る草原が広がり、ブッシュを背にしてドツタの駐屯軍がいた。

「位置はさつきと変わらないぞ、ゴバン！」

「よし！馬車も見えた」

正面には六頭立ての大型馬車が四両、横一列に綺麗に並んでいる。うまい具合だ。ゴバンは左手を前方に差し出し、開いた指の隙間から馬車を捉える。

「まだ…もーちょいか」

ゴバンたちの乗る馬車は、斜面の力を借りて更に加速していた。ドツタの兵士たちもいきなり現われた暴走する馬車に、ただただ慌てるしかない。テントから出てくる兵士たちもいたが、彼らもオロオロとするばかりで、何もできずに叫ぶのみだった。

「クソッ！揺れやがんな…」

苦言を呈したゴバンだったが、ペロリ…と、乾いた唇を下で濡らした。その表情は自信に満ちている——彼が憧れたパシエットの顔だ。

やがて四両の馬車の車両が横一列にピタリと並んだ瞬間。

「てえっ！」

ドゴオオオン！！

轟音は空に抜けることを拒まれかのように、大地に響きわたった。ゴバンは撃った反動を吸収し切れずに体ごとズレ、背後にあった幌がそれを受けとめる。もちろん、ブラウバックした際に飛び散った血しぶきと共に…

弾丸は全く弧を描くことなく、この時代の最高性能を誇る大砲でさえ得られぬ一直線の弾道で、横一列に並ぶ四両の馬車全てを貫いたのだ。繋がれたラウズが明らかな動揺を示して叫ぶ。しかしそれが決定的に車両をズラす前に——

「おまけっ！」

ズゴオオン！！

再び大気が割れる。ゴバンは幌に身を預けたまま大砲を撃ち放ち、弾丸はもう一度馬車を貫いた。一発ではうまく壊せない可能性があったからだ。背後にこびり付く血糊は更に増し、反動により増えた

体重を受けとめきれなくなった幌は、倒れるようにして壊れた。ゴバンは、ジエネのいた荷台の上に倒れこむ。

「アハハハハーツ！イッテーツ！」

腕の痛みから逃れたいがためなのか、或いは完璧な射撃にハイになっ
ているのか？ゴバンは狂喜するように笑った。用心のためにと
伏せさせられていたジエネが、驚いて叫ぶ。

「な、何があつたのよ！スゴイ音がしたわよ！？」

「アハハー、なんでもねえ。よし、ルーマああ！抜けるぞっ！こ
れでもう追いつかれんこともねえだろ」
「分かった！」

ピシッ！

振り下ろされる鞭は、更に回数を増す。

ルーマも珍しく興奮しているようだった。共同作業の喜びという
やつだ。しかし――

「ゴバン、ちょっと来て！」

ルーマが叫ぶ。それに馬車の速度が明らかに落ちた。ゴバンはジ
エネに背を向け、ルーマの元へいく。

「見て、右の方。草原に土煙が…」

ルーマが指差す右前方には、まるで動物の集団がまっすぐこちら
へ駆けてくるかのように、土煙が上がっていた。ブッシュが邪魔で
姿は見えない。だが…

ギャアッ！

ペソアが上空で叫ぶ。ルーマもほぼ同時に気づいた。

「人間だ！」

「——だろうな。ルーマ。馬車の速度上げる。向こうが道に出る前に抜けるんだ」

「分かった」

ピシッ！

再び馬車は速度を上げ、ゴバンはさっきと同じようにルーマの脇に立ち、土煙の方向を観察する。よく見えない。だが一瞬だけブزشュが途切れた時、その姿がゴバンの目にもはっきりと見て取れた。

「あれは…」

ゴバンは愕然とした。今はまだ旗だけしか見えないが、しかしそれで十分だった。ゴバンにも見覚えのある旗。それは最も会いたくない人間が統べる、集団の旗だったのだ。

「——ミヨール胸甲騎兵隊…」

しかも敵の位置からいっても、ゴバンたちが抜ける前に騎兵隊に道が塞がれることは確実だ。もちろん引き返せばそこには駐屯軍がいる。恐らく今度は確実に銃弾が飛んでくることだろう。自分だけなら何とでもなるが、今はルーマやジェネが…

「ルーマ、馬車止める」

ルーマは振り返り、無言でうなずくと、手綱を引いてカポンの脚を止めた。ゴバンは荷台の方にいったん、トン！と降りると、自分の荷物入れの中から何かを取り出した。その折りに、小さな声でジ

エネに耳打ちする。

「お前はまだ見つかってねえはずだ。幌の下に隠れてな。俺らがどうなっても出るんじゃないぞ」

「あ、ゴバン…あの…」

しかし話し掛けようとしたジエネの言葉は無視され、再びルーマの脇に戻ると、ゴバンは取ってきたものを手渡す。

「ルーマ、これを使え」

「ゴバン、これ!？」

それは刃の大きく反り返った短剣だった。

「湾刀だ。お前の判断で使っていていい」

「でも——使えって言われても…」

ルーマは戸惑いを見せる。洞窟でのこと、それにその後のゴバンの言葉を思い出しているのだろう。

——殺しに対する、強烈な嫌悪…

「ん? ああ、そう言えば俺、殺しは嫌いだって言ったんだよな。あれは本音さ。でもよ、しょうがねえことってのも世の中にはあんのさ。それがアレなんだよ」

ゴバンは、今やハツキリと姿を現したドツタが誇る騎兵隊に顔を向けた。ラウズを駆り、胸には鍛え上げられた鍛鉄のアーマーを装備した統率された集団——

「アレは俺やお前みたく特別な人間の命を平気で断ちにくる。人間

であることの『誇り』を奪いにくるんだ。失いたくなけりや戦うしかねえ。けど言っとくぞ」

ゴバンは少し間を置いてから、続けた。

「――殺しに慣れたら終わりだからな」

ルーマは湾刀を見つめ、黙ってコクリとうなずいた。今では彼女にもよく分かる。洞窟での殺意――あれが自分の意志であるとは思えなかったが、それでも記憶だけは残った。それは思い出されるほどに、ルーマの胸を締め付ける。それは彼女が人間に近づくほどに、大きくなっていったのだ。

ゴバンは既に山刀を腰に差し、敵を見つめている。先頭のラウズに跨がるのはロブランだった。

「チィッ！先遣隊の役立たずが。足止めもできんとはな。危うく逃げられるところだ！」

ロブランは大声で文句をたれると、次は一転して不適な笑みを見せてゴバンに話し掛けた。

「よお、ゴバン・シャノム！洞窟では世話になったなあ」

「なによ。また使えねえ部下引き連れてきたの？でも数は増殖してるみてーだな」

ゴバンは微動だにせずに正面を向きながらも、瞳を動かして周囲の状況把握に努めた。

「フン！言っとくが、あん時の兵隊じゃねえぞ。金で動くゴロツキどもだ。エリア外に部隊回すのはザバル・ドッタ様がお嫌いだな」

今度は前回のようにはいかなえ」

ゴバンは肩をすくめてみせる。

「どーりで。ご主人様のご意向ってヤツかよ。ドツタの君主が呆れんな。人間、長く生きると臆病んなるらしいや」

「おいゴバン！ 仮にもかつての君主だろうが。まったく！ お前は俺の元で教育してやりたかったぜ。優秀な兵隊になれたものを… パシエットのヤローがクズにしゃがった」

ゴバンの表情が変わった。

「…パシエットはいいヤツだったぜ。少なくともオメーよりは人間だった」

「どう言おうが構わんさ。俺は俺の正義をまっとうするだけよ」

「あん、正義だ？ そりゃドツタにとっての正義だろうがよ」

「そうだ。その何が悪い？ 俺はドツタの兵隊だからな。そのために俺はお前と、その脇のバケモノを捕獲させてもらう」

その言葉に、ゴバンはとつぜん目をむいて、怒りをあらわにした。

「ルーマはバケモノじゃねえっ！」

ロブランはほくそ笑みながら左手を上げると、騎兵は散会し、ゴバンたちを囲んだ。ロブランはすかさず後ろへ下がり、一部の騎兵がその前に盾を持って密集する。ゴバンの大砲を警戒してのことだ。

「キツタネーなあ、なに下がってんのよ。昔のオメーはそんな臆病じゃなかったぜ！」

「やれ！」

有無を言わさぬ号令と共に、ゴバンたちに騎兵隊がにじり寄ってきた。片手に持つのは銃だ。

「——ルーマ、カポンに飛び乗れ！早く！」

ゴバンはルーマの耳元でささやくと、カポンと馬車を繋ぐロープを山刀でぶった切った。ルーマは疑問を抱くことなくカポンに飛び乗る。彼女にもすぐに分かったのだ。ここで戦闘になれば、流れ弾がジェネに当たるかも知れないということを。

ロープが切れたことを確認すると、ルーマはゴバンの合図も待たずに鞭を叩いた。カポンは機械のダッシュ力で一気に駆け出すが、ゴバンは遅れることなくカポンに飛び乗る。ドサリ！と、カポンに跨がり、ルーマの真後ろにピッタリと付く。そこまでの動作を、二人は一瞬のうちにやってのけた。

駆け出したカポンの真正面には騎兵。既に銃を構えている。ルーマは一つの決心と共に腰から湾刀を抜いた。正面からの銃弾ならばかわす自信がある。背後はゴバンで守られている。正面の騎兵をすれ違いざまに…

その時だった。いきなりルーマの耳に何かが突っ込まれた。次の瞬間。

ドゴオオオン！

すぐ脇で轟音が響いた。その音は耳をつんざき、ピーン…と、脳を直接刺激する音だけを残して一瞬、現実の音をなくした。

「ハッ！？」

思わず息を飲むルーマ。前方の兵隊の胸にとつぜん大穴が空いたのだ。アーマーを物ともしないゴバンの大砲の威力。

「このまま抜けるオ！」

音は戻ってきたものの、そのゴバンの叫び声はどこか遠い。そしてルーマは違和感に気づいた。さっき耳に詰め込まれたのは耳栓だった。耳元での砲撃の備えを、ゴバンはしてくれたのだ。

ルーマはゴバンに言われるがまま、カポンに鞭を振るった。たった今ゴバンが狙撃した騎兵の脇を全力で擦り抜ける。しかし、すぐ横にいた騎兵が素早い読みでゴバンたちの横から迫り、脱出を阻もうとしていた。そして構えた銃を二人に向けて撃ち放つ。

ポンッ！

やけに軽い音だ。しかも出てきたのは銃弾ではない。それは――

「網！？」

まるでそれは魚を取る投網のように、ゴバンたちが見上げる高さで大きく開いた。しかしルーマは瞬時に見抜く。見事な手綱さばきで、網から逃げるための最適な場所へとカポンを操る。そしてカポンの『脚』も、その動きに付いてきた。

「ゴバン、伏せてえ！」

ルーマの叫び。ゴバンはルーマの後ろに被さるようにして体を伏せると、落下する網は微かにその背をかすめ、うまく網を擦り抜けた。

ゴバンはすぐに後ろを振り返る。既に前方はもちろん、横にも敵はいない。背後だけだ。ゴバンはこの形を最初から狙っていた。もはやルーマに危険はなくなった。

「このまま戦うぞ。絶えず敵に後ろを向けてろ！」

「え！？なんで？」

ズオオオオン！

ルーマの言葉は、後ろを振り返りながら撃つゴバンの砲撃音にかき消された。その衝撃はゴバンの体を通して、彼女の背にも伝わる。しかし伝えたのは衝撃だけではない。ルーマは初めて、戦いに恐怖した。

「ゴバン！正面の方が戦いやすい。向けるぞ！」

手綱を脇に引こうとするルーマを、ゴバンは慌てて止めた。

「ダメだ！飛んでくんのが綱だけとは限らねーんだ！お前の体はタマ弾けねーだろうがよ！」

「見ないと敵が把握できない！情報がないと不安なんだ。それに弾は弾けなくても、私は避けることができる。正面からなら平気だ！後ろだけゴバンが守ってくれば……お願いだゴバン！」

ルーマの必死な言葉に、ゴバンはうなずくしかなかった。そのルーマの表情に、ありありと恐怖が見て取れたからだ。そしてパニックが引き起こす不測の事態を、ゴバンは何よりも恐れた。時にそれが死を招くということを、戦争を経験したゴバンはよく知っていたからだ。

ルーマはカポンを操り、敵に正面を向ける。

ドゴオオッ！

ドゴオオオン！

たて続けに二発。そして更に一発……と、ゴバンが大砲を撃つ度に、騎兵が一人、また一人と倒れていく。ゴバンはただとにかく、急いで敵を一掃したかった。早ければ早いほど、ルーマに降り掛かる危険は少なくなるからだ。確かに彼女は銃弾を避けられるとは言ったが、それが百パーセントだという保証など何もない。今はただとに

かく、敵が多すぎる。

それでも、ルーマの位置取りは見事としか言いようがなかった。敵は距離を詰め、挟み撃ちをしかけようと目論むが、ルーマの絶妙な位置取りがそれをさせない。ゴバンにしても正面を向いたまま撃てるだけに、より狙いやすくなった。敵の投網銃は射程が短く、近づかれない限り危険もない。だがその時。

「バカモノ！生け捕りが絶対命令だぞ！貴様、やめんか！」

どこかで士官らしき人間の叫び声がした。そして次の瞬間、明らかに今までとは質の違う銃声が響いたのだ。

パンッ！

それは一直線の弾道を描いて、ルーマの額に向かって飛んできた。しかし、ルーマはまるで最初から分かっていたかの如く、首をズラして弾を避ける。避けた弾はゴバンへ…

「ぐあっ！」

「ゴバン！ヘーキか！？」

振り返るルーマ。

「首の肉少し持ってたただけだ。問題ねえ！」

ドゴオオッ！

ズゴオオーン！

すぐさまゴバンの立て続けの砲撃。既に敵は混乱しつつあり、間もなく士気は崩壊するに違いない。命令無視もその一つだ。

（いけるっ！）

二人が同時にそう思った時だった。

「ゴオオオーバアアアアーーン!!」

まるで咆哮のような、ロブランの叫び声が響いたのだ。

「なんだ!？」

「これを見るおおオオ!!」

その声の先を見た途端、ゴバンは自分の目を疑った。なぜならロブランがジェネを自分のラウズに寄せ、胸の前で羽交い締めにしていたのだから…

「しまった!？」

ガマンできずに幌の下から出ようとでもしたのだろうか?それともロブランが馬車の中を探った?この状況下で?

「このガキはなんだオラア!死んでもいいのかよ!」

ロブランは興奮していた。恐らくは彼が考えたと思われる捕獲作戦が、まるでゴバンたちに通用しないということもあるのだろう。それにかかなりの数の部下を既に失っている。

「やつぱりお前はとんでもねえよ。クソがつ!大事な部下をこんなにしやがつてよオ!」

ロブランは機械でできた大きな右手で、足元に転がっていた穴の開いた屍を拾うと、ブラブラとゴバンたちに対して指し示してみせた。しかし屍はすぐに捨てられ、巨大な右手がジェネの喉元に突き付けられる。

「まあいい。こつからは立場逆転だ。ゴバンよ。このガキはなんだ？え！？置き去りかよ。それとも今ここで殺しちまうていいのかあ？」

「ゴバン…」

ルーマは振り返り、不安げにゴバンの顔を見つめる。

「クソ…なんで…」

どうにもならない苛立ちもある。しかしそれ以上に、突然浮かんだ思想。それがゴバンには腹立たしかった。

（自分は今、ルーマとジェネを天秤にかけていた…）

確かにジェネは途中で拾ったただの子供に過ぎない。このままロブランの言いなりになってもジェネは救えないかも知れないし、ルーマさえも道連れにすることになる。冷静に考えればジェネは見捨てるべきだ。より損害の大きい選択などすべきではない。兵隊ならばそうする。いや、兵隊であつた時でさえゴバンは…

「——俺は人間だ…」

ボソリとつぶやくゴバン。そして力なく頭を垂れた。

「ゴバン、平気か？顔が青いぞ」

「ロブラン、聞けよ！」

ゴバンはルーマを見ることなく、ロブランに向かって叫んだ。

「ハッハア！おとなしく投降する気になったかよ？」

「ああ！そうしてやるさ！だけどそのガキは放してやれ。交換条件だ」

「フン、いいぜ。お前がおとなしく捕まるってんならな」

ロブランは不敵な笑みを見せたが、ゴバンは気にせずに続ける。

「それからコイツもだ！」

「ゴバン！？」

ゴバンの手がルーマの頭の上に置かれると、彼女はそれを払い除けるように首をブルンと振った。

「な、なに言ってたんだ、ゴバン！そんなのダメだ！」

「言う通りにしな。アイツに捕まれば、お前はパーツとして殺されるんだ」

「ヤダ！私だけ逃げるなんてできるわけないだろ！？」

「オメー死にてえのかよ！自己防衛が何より優先すんだろーが！」

思わずゴバンは声を荒げたが、ルーマは逆に冷静だった。

「もちろん…それは今もそうだ。でもまだ死は決まったわけじゃない。なのに何でゴバンやジエネを見捨てなきゃいけないんだ？みんなで同棲したのに…」

「ば、バカヤロウ、あれは同棲じゃなくて野宿だ！こんな時に間違えんな。それに捕まりゃあ逃げることなんて——チツ！」

ゴバンはルーマを言い含めることもできずに、奥歯をギリギリと噛んだ。

「ふふん、仲間割れか？よし、俺が仲を取り持ってやろうじゃないか。ゴバンよ。さっきの答えは『No』だ。俺たちはお前ら二人とも欲しい。ドツタ様がお望みなんでな。それができねえなら、こ

のガキは殺す。どうすんだ。仲良く来るか？ガキが死ぬ様を見るか？ン？」

その言葉にゴバンとルーマは押し黙った。ジエネは一言も発しない。いや、締め付けられてできないのか？

「もう一度言う。これが最期だぜ。もしもおとなしく捕まるのなら、まずはそのラウズから降りてもらおう。二人ともだ。そして武器を捨ててゆっくりとこっちへ来い」

ゴバンは顔をしかめながら、ゆっくりとカポンから降り立った。ルーマもそれに続く。

「ルーマ、すまねえ…」

ゴバンはつぶやくように一言。そして山刀を投げ捨てる。ルーマもそれにならって湾刀を同じ場所に捨てた。

「…まだあきらめてないよな、ゴバン」

ロブランに聞こえないようルーマは小さくつぶやくと、ゴバンを見た。その時、いきなりゴバンがルーマの肩にのしかかり、体重を預けてきたのだ。

「ど、どうしたんだ！？ゴバン？」

しかし次の瞬間には、ゴバンはズルリ…と、ルーマが支えようとする手を擦り抜け、地面にドサリ！と倒れた。ルーマには信じられなかった。すぐにその場にしゃがんで、ゴバンを起こそうとした。しかしのぞき見たゴバンのその顔は、まるで死人のように蒼白にな

っていたのだった。

・ ・ ・

「作戦を説明する」

大きな地図を広げ、パシエットは部下たちの前で、珍しく引き締まった表情を見せていた。ゴバンもその脇で地図に見入っている。

「目標のマキシポリスは我が軍の進攻を阻害する大河を全面に構える。周囲に遮蔽物もなく、渡河の際には当然狙い撃ちに会うことになるだろう。かつてここを攻めた他国の軍隊は、全てここで撃退されている。だが見てくれ」

パシエットは地図に赤く丸の付いた地点を指差した。

「ポリスの西側。ここではこの大河が大きく曲がって、敵ポリスのすぐ近くまで切れ込んでいる。ここに攻城砲を設置することができれば、河を越えることなく、敵ポリス内に砲弾を撃ち込むことも可能なわけだ」

「しかし…」

部下の一人がそこに割って入った。パシエットは嫌な顔ひとつせず、微かな笑みと共に部下に言葉をうながした。

「なんだ？」

「…はい。この一帯は森と湿地です。ここに巨大な攻城砲を運ぶのには、少々無理があるのではないかと…」

パシエットは小さくひとつうなずく。

「確かに。攻城砲を運ぶにはしっかりとした道が必要だ。この場所にそれを作るには、大がかりな開墾と土木作業が必要になる。当然敵にもすぐ悟られるだろう。だが部品だけならどうだ？大きな道は必要ないだろう？」

「あ！」

部下が大きくうなずき、パシエットもニマーッと笑った。

「そうだ。攻城砲を運ぶんじゃない。部品を運び、設置ポイントで組み立てて攻城砲にするんだ。我々はまずそのための小道を作る。それが我が隊の今回の仕事だ。決行日はさっき言った通り。搬入路の完成後、資財運搬時のみミヨール中隊が配下に入り、運搬を手伝ってくれる。詳細は明後日再びここで。以上だ。機密クラスは特A+++。分かってるな。では解散！」

パシエットが椅子の背に体を預けるのを見届けると、明らかに彼よりも歳上の部下たちは無言で席を立ち、思い思いの思索を巡らせながら部屋を後にしていった。もちろん、部屋を出る際には一礼も忘れない。それは上司ということももちろんだが、パシエットへの信頼の表れでもあった。

その中でゴバンだけは席を立たず、やがて部屋にパシエットと二人きりになった。するとパシエットはいきなり大きく伸びをして、机の上に足を乗せた。

「あゝあ、かったしいーっ！」

ついでにパシエットは大あくびをした後、チラリとゴバンをのぞき見る。そこには何か考え込んでいるゴバンの姿があった。

「ン？なに悩んでんの？まーたお前はすぐそんな顔すんのな。どうした、ン？オニイチャンに話してごらん」

「茶化すなよ。別に悩んでるっつーか、なんでポリスに戦争しかなきゃいけねえのかと思ってただけさ。普通ポリス同士は仕掛けないもんだろ？お互い神器持ってんだからさ。ムダな戦いなんかしなくたって…」

「だから、一つじゃ足りなくなっただんじやないの？ウチが従えるベクター組織はデケエからな。収穫されるパーツを完全に処理すのに、神器一個じゃ足りねえのさ」

「なんでだ？なんでそんなにパーツが必要なんだ！？」

ゴバンの口調が少し荒くなると、パシエットは俺に当たるなど言わんばかりに、両手の平をゴバンに向けた。

「ま、経済的な理由が一つ。勢力拡大のためにな。それとも一つは、ザバル・ドッタと適合する肉体探しってのがある。それが一番だろうな」

「適合する肉体？…どういう意味だよ」

パシエットは意外そうに肩をすくめると、机から足を下ろし、ゴバンに語り始めた。

「なんだ知らねーの？神器を使って肉体を交換するにはさ、相性ってのがあんだよ。それが合ってねえとできないの。特に人間の脳ミソに関しては難しいらしくてな。ドッタのような権力者でさえ、生涯かけて相性の合うパーツに巡り合えるかどうかは五分五分らしい」

ゴバンは正直、驚きを隠せなかった。というのも、ドッタが五百年生きているというのは、単に長生きしているということを差す、

抽象的なものだと思っていたからだ。パーツ交換がまさか人間の脳にまで及ぶなど…

「…知らなかった」

「でさ、ドツタは今の脳に変えてからもう百年近く経つらしい。ハッキリ言ってもうヤバイのさ。だから焦ってる」

ゴバンはゴクリと唾を飲む。戦いに勝利するということは、同時に大量のパーツを手に入れられるということでもあるから…

「それが戦争の多さってワケかよ…」

「なに、イヤになった？ドツタにいの」

「…っていうか、パシエットはいいのかよ！それって単に個人的な理由だけで戦争やってるってことじゃねーか！」

ゴバンの言葉に、パシエットは椅子から立ち上がると、机の上の戦略地図をたたみ出した。

「じゃあ聞くけどさ、お前正しい戦争なんてあると思ってたの？今まで」

「…え？」

パシエットはくりりとゴバンの方に向き直ると、たたんだ地図を彼の胸に突き刺し、真っすぐな瞳で見据えた。

「だからさ、正しい戦争ってあんのか？」

「いや…」

「ねーだろ？あるなんて言うヤツはただのバカだ。権力者に踊らされてるだけのキチ。イさ。俺らは兵隊になった時点でそこに正義なんてモンはねーの！それが工兵だろうが何だろうが、ただの人殺し

なんだよ。覚えときな！」

パシエットは地図を小脇に抱え、スタスタと部屋を出ていこうと歩き出す。

「おい待てよ、パシエット！じゃあなんでお前は戦争やんだよ！」

ピタリ…と、一瞬だけ足を止めるパシエット。そして部屋を出る前に一度だけ振り返り、ポツリとつぶやいた。

「人間だからさ…」

その胸の中の

「空気がこれほどうまいものだとはな。…知らなかった」

それは数千年ぶりに男が吸う、生命の混在した大気だった。もちろん、長い時を仮死状態——いや、静止状態で過ごした彼に、数千年の狭間を感じ取ることはできなかったが、久しぶりであることは確かだ。

男は金髪の長髪を揺らし、感慨ぶかげに深呼吸をしている。そして脇に付き従う女性の一人が、無表情にその男を見つめた。やはり金髪で、ウエットスーツを思わせるぴったりとした衣服で、全身を覆っている。

「テロメア様、私の味覚中枢では、空気に味は感じ取れません？」
「そういう意味ではない。私は空気の臭いのことを…もういい。知りたければ端末を開けばいくらでも学習できるだろう？くだらぬことを私に訊ねるな」

「テロメア様、何かご不快なことでも？苛立っておいです」

その女性はあくまでクールに言った。

「フン！気にするな。どうせ感情を持たぬお前らには分かるまい。それよりもマスターユニットの所在が分かったと言ったな。どこだ？」

「はい。調査したところ、この世界で最も強大な勢力を誇る、ドクタエリアと呼ばれる場所であることが分かりました」

「ン？若干こちらへ向かうコースとはズレているのではないか？」

「はい。端末から行動履歴も調べてみましたが、一定していません。何よりも会話の異状が多さが気になります。詳細は分かりませんが或いは…」

男は、言い掛けた女性の言葉を遮った。

「ふむ、まずいな…マスターユニットの戦闘力ならば間違いないと踏んだが、或いは半ノイマノイドたちに捕まったのかも知れん」

テロメアと呼ばれる男は、思案げに顎に手をやる。

「よし、そこへ向かうぞ。私も出る」

「ですがテロメア様に何かあつては…」

「案ずるな。…とは言えそれもプログラム状の思考か？フン！それよりもマスターユニットがなくなれば、お前たちは統率された戦闘集団たり得ん。失うわけにはいかんだ。マスターユニットをただのパーツとしか思わん野蛮人どもに殺される前に確保する！」

「はい、分かりました」

その女性はそれ以上異を唱えず、素直に従った。テロメアの命令は絶対なのだ。いや、そのようにプログラムされている。

「作戦中の指揮は私が取る。少々危険だが、この世界の蛮族などに好き勝手はさせん。それに…」

最後にテロメアは、少し声のトーンを落としてから言った。

「…瞳が緑を欲しているのだ。こんな地下施設など、もう飽き飽きだからな」

・ ・ ・

見ていたのは過去の夢だった。

しかしそれは唐突に断絶され、目覚めるのだ。やり残したことを達成するため、現実に戻ろうとする意志ゆえに。

「ルーマッ！」

ガバッ！と、ゴバンはシーツを跳ね上げるようにして目覚めた。すぐ様辺りをキョロキョロと見回すと、ルーマは同じベッドに腰掛け、ゴバンを見ていた。ランプの灯りがそれを優しく照らす。

「良かった！気づいたんだな」

現実にあつたはずの危険がまるで夢であつたかのように、ルーマが優しい笑顔を向けた。しかし見回す部屋の中は安全というにはどこか嘘寒く、不自然だった。部屋には窓という窓が一つもなく、扉も鉄でできていたのだ。

「ここは？」

「ドツタの城の中だ。私たちのために特別作った部屋だつて」

「…そうか。牢獄ってワケかよ。あ~~~~っ！」

ゴバンはすぐに悟ると、苛立たしげに髪の毛をガシャガシャと掻いた。

「…アレ？何だこりゃ！？」

左手に違和感を感じて見てみると、それは肘から下をスツポリと覆う、金属の枷だった。ムリヤリ抜き取ろうとするが、とても抜けそうにない。大砲を使えなくするために、特別にあつらえたものなのだろう。

しかしそれはゴバンだけではなかった。

「お前もかよ？」

ルーマはコクリとうなずく。そしてある意味、彼女の方がより嚴重だった。ゴバンのように特別製ではないが、短い鎖の付いた手枷で両手の自由を奪い、それに片足には錘付きの足枷まで付けられている。恐らくはルーマの素早さを警戒したロブランの指示だろう。

「それより具合はどうだ、ゴバン。もう起きていいのか？」

「…ああ。みつともねえトコ見せちまったな。実は以前にもやったことあって…」

「貧血だつて？」

ゴバンの言葉を待たずに、ルーマが先に答えた。顔をしかめるゴバン。

「ま、まあ…ぶっちゃけて言えばそうなんだけど。でも何で知ってんだ？」

「連れてこられる時、医者みたいな人がロブランに話してた」

ゴバンは肩をすくめると、左腕をルーマの前にかかげて見せた。彼女の中に、ゴバンと出会った頃の記憶が一瞬だけよぎる。

「コイツを撃つたびに血が吹き出るのは見たよな。そのせいさ。撃ち続けてるとああなっちまうってこと、忘れてた」

「そうか。あんなに血が出るんだものな。でも——」

ルーマは辛そうにうつむく。

「——あの時は心臓が止まるかと思った。ゴバン、顔が真っ白で…死んだらどうしようって…」

「ルーマ…」

すると不意に顔を上げて、ルーマはニツコリと笑った。

「でも無事で良かった!」

ゴバンは少し照れ臭そうに右手でバリボリと髪の毛を掻き、部屋の中をもう一度見回す。

「そう言やジェネはここにいないんだな。ロブランのヤロー、約束は守ったらしいや」

「それが…」

ホツと安堵するゴバンに向かって、ルーマは明らかに険しい顔を見せた。無言で続きをうながすゴバン。

「えと…ジェネは——ロブランの仲間だったんだ」

「なんだって!?!」

思わずルーマに詰め寄る。

「うつん、違う。言い方が悪かった。利用されてたんだ…と思う」

「——でも利用ってたって…」

「うつん、だから最初から——宿場町で出会ったことも偶然じゃない

らしい。いただろ？一人だけ特別大きな男が。さつきロブランと一緒に部屋を覗きにきた。あいつも仲間だったんだ」

宿場町で出会った三人のベクターのうち、一人だけ逃げ出した大男が確かにいた。あれが？

「でもよ。ジエネには俺、その前にも一度会ってんだぞ？あれは……ルーマと出会った日だ。確かに商人に連れられて——まさか商人も？」

ルーマはコクリとうなずく。

「……って、待てよオイ！商人は殺されてんだぞ！？」

「それも大男が話してた。作戦をよりリアルにするための『演出』だって」

ゴバンはため息をつきながら首を左右に振ると、吐き捨てるように言った。

「チッ！演出で仲間を殺すのかよ。どーせ金で雇われただけだろうがよ。だいたいロブランたちのことはともかく、俺はジエネのこと信じたんだぜ。なんなんだそりゃ……」

そう言ったきり、ゴバンはベッドの上で黙りこくったまま、しばらくの間ボーッと座っていた。ジエネの会話や表情。その一つ一つを思い返しているのだ。

だがやがて、ルーマがしっかりとした口調で言った。

「でも私は信じたい。ううん、信じるぞ。だってあの時のジエネの笑顔は本当だった」

「ルーマ…」

「私はジェネの笑顔を自分のものにしたいって、それをゴバンに見せたって思ったんだ。だからあの笑顔が嘘だと困る。それにジェネと一緒に夜更かしした時のこと、悪い思い出にしたくないから。だから、えーと…私、間違ってるか？」

少し不安そうに…しかし真剣にゴバンを見つめるルーマの眼差しに、ゴバンは首を左右に振る。

「いや…俺も思い出した。今思えばさ、ジェネは何かを打ち明けようとしてるみたいだったんだ」

「何かって？」

「分かんね。でもたぶん、ロブランとのこと、正直に話そうとしたんじゃないかってよ。もっと俺が気にしてたら良かったのに。ニブイな…俺」

フウ…と、ため息をつくゴバンの肩に、ルーマはソツと手枷ごと両手で触れる。そして優しく話し掛けた。

「私だってジェネとずっと一緒にいて気づかなかったんだ。ゴバンだけのせいじゃない。それにジェネは言ってた。こんな体持つと大変だって。私たちを騙したことだって、たぶん生きるために——そう言うことなんだと思う」

「そうだな…」

二人は静かにうなづく。そしてゴバンは同時に、ルーマの中で育っているしつかりとした意思が嬉しかった。最初の頃からは想像もつかない。

「そうだゴバン。お腹減ってないか？」

「えっ!？」

その言葉にゴバンは驚いた。まるでルーマは、これから何か作るうかと言わんばかりの口ぶりだ。何しろプラタナにいた時にさえ料理は全てゴバンが作っていたし、彼女は興味を抱くそぶりすら見せたこともなかったのだから…

しかし言われてみれば、確かに空腹ではあった。

「ああ、そうだな。減ってる」

「うん、分かった!」

ニコニコしながらルーマは立ち上がり、奥のもう一つある部屋へと、ゴロゴロと片足の錘を引きづりながら歩いていった。

「おいおい、ヘーキかよ?」

しかしそれには答えず、すぐにトレイを持って戻ってくると、ゴバンの前に差し出した。

「さ、食べていいぞ」

嬉しそうな顔と共に差し出されたのは、予想外と言つべきか予想通りと言つべきか、ただの冷えた囚人食だった。

「なんだ。あんまり自慢げに出すから、てっきりなんか作って持ってくるのかと思った」

「そんなワケないだろ? 材料も何もないのに」

ポリポリと頬を掻くゴバン。

「いや、まあそうなんだけどよ。…うん、でもありがとな。いただきます」

「うん！」

ルーマはニツコリとうなずく。

そんな顔を見ていると、ゴバンには不思議と、自分が囚われの身であることが信じられなくなってくるのだった。それに、まずいはずの囚人食が、信じられないくらいおいしくも思えた。時たま脇を見ると、ルーマの嬉しそうな瞳と出会う。それはジエネの勝ち気な笑顔とは似ても似つかないが、きっかけを与えたのは紛れもなく彼女なのだ。

「…なあ、ゴバン」

「ん？」

それは食事を終えてからのこと。いつしか笑顔も消えて何か考え事をしていたルーマが、不意に話しかけてきた。

「いつか本当に、ゴバンに料理作ってあげられるかな？」

言葉だけではない。ルーマの表情がすごく切なげに見えて、ゴバンの胸は高鳴った。

「ああ。ここ抜け出したら頑張って作ってみな」

「私に作れるか？」

「できるさ。あ、そう言えばエルメ婆さんは料理にもうるさいんだぜ。なんなら教えてもらおうといい。俺の料理じゃアバウトすぎてよ。帰ったら俺からも頼んでやんよ」

「ホントに!？」

ゴバンはもちろんとばかりに、バチリと大きな目くばせをする。
ルーマは満足気に、しかし、すぐにまた暗い表情に戻ってしまった。

「…帰れるかな？プラタナポリス」
「当然だろ」

質問を予測していたのだろう。ゴバンは速答する。

「それじゃあ、ゴバン」
「ン？」
「機械病ってなんだ？」

それは予測していなかった。

「…前に教えた以上のことは俺も知らねえ」
「じゃあ、半分機械の体と全部肉体の体と、どっちが本当の人間だ？」
「え？」

考える間もなく、ルーマは続ける。

「ナッツパーツってなんだ？ドナーツリーって？フルボディって？」
「お、おいルーマ。どうしたんだよ？」
「神器ってなんだ？それから…えーと、それから…」

ルーマは一つ大きく唾を飲み込んでから続けた。

「…私は人間か？」

結局はそれなのだ。ルーマの中にあるものはゴバンと同じ不安。しかしそれでも、彼は答えを用意してやらねばならなかった。ルーマと出会ったからには、ゴバンは以前と同じではいけない。それは十分すぎるほど分かっていた。

ゴバンは自分でも意識することなく、自然にルーマの頬に手が伸びていた。彼女の髪の毛がサラリ…と、ゴバンの手の甲を流れる。

「そうやって悩んでるのは人間の証拠だろ？生まれ方がどうだろうと関係ねえよ」

「う、うん。でも…」

しかし、ルーマの表情から不安は消えなかった。ゴバンにはそれ以上の言葉が——いや、たぶん今は何を言っても…

「証明してやるよ」

「え？」

そう言うと、ゴバンはルーマに顔を寄せていった。そして微かな、ほんの短い間、二人だけの時が流れる。

ジャラリ…と、ルーマの手枷の音が部屋に響いた。

「——ん…」

驚きはなかった。ルーマはただ、ゴバンの体の大きさと温もりを感じていたし、ゴバンはルーマの肩の薄さを感じていた。二人は生まれて初めて、心の何かが満たされたのだ。

沈黙から抜け出し、最初に話しかけたのはルーマの方だった。

「…今の知ってる。キスって言うんだろ？」

「ちえっ！身もフタもねーな」

先手を打たれたこともあるのだろうか？照れ臭いというより、本気で顔をしかめるゴバンだったが、それでも感じていた。ルーマの話す言葉の中に、いつもとは違う音色があったことを…

「…でも何だろう？胸がおかしいんだ。こういうのは知らない…」

ルーマは少し不安そうに胸を押さえ、うつむいてしまった。

「ほら、やっぱ人間じゃん。それが証拠さ」

「え？」

パツ！と、顔を上げるルーマ。

「ルーマの胸の中にあるもんだよ。それを持つのが人間さ」

「えと…そうなのか？」

「そう思うぜ」

「ゴバンも感じたのか？」

「…まあよ」

顔をしかめるゴバン。今度は照れた。

ルーマはそんなゴバンを真つすぐの瞳で見上げ、いつもとは少し違う、女性が甘える時にだけ出す音色でささやく。

「…もう一度確かめていいか？ゴバン」

・
・
・

ドツタポリスは建国から五百年以上にも及び、現在ある国の中では最古の歴史を持つ。その長い歴史のほとんど全てを、君主のザバル・ドツタは見つめてきた。

ドツタは既に、建国者である父親の顔の片鱗も覚えていない。かつてはまるで似てもないと思っていたはずの肖像画が、今の父親像の全てとなっていた。それほどに時は流れていたし、実際彼は老いた。そして若く、自分とシンクロできる脳を欲した。

今までは運が良すぎたのだ——と、誰しもが思う。そしてそれは事実だった。

ドツタは老齡期を迎える前に、代わりの肉体を手に入れる幸運に恵まれ続けてきた。しかしそれでも、かつて元の肉体であった頃の記憶というものは既にイメージでしかない。それが事実なのか創作なのかすら自信が持てない事柄も数えきれないほどある。とはいえ、歴史書を紐解く手間を惜しんでまで、過去を振り返る気にはなれないのも事実だった。彼は今なお、未来を夢見ている。

五百年というあまりにも長い人生も、脳をすげ替えてきた人間にとっては苦痛でも何でもなかった。それが醜い自己中心的な欲であろうと、ドツタは目的のある充実した人間であつたし、苦しみを忘れるのが人間の本性だから。

だが最近、ドツタの物忘れは日常的なことにまで及び、かつてない程にひどくなっていた。さらに老いは人間に恒久的な苦しみを与え、過去の苛みをも思い出させる。人を弱気にもさせる。今はまだ権力者としての威厳を保ってはいるが、それもいつまで維持できるものなのか……

配下の者たちは、権力の座を奪おうとする危険な存在となりつつあった。その状況は揃いつつあったのだ。だがその中であって唯一、ドツタが頼りにしていたのがロブランであり、それこそが、謀反を企てようとする者たちへの牽制ともなっていた。それだけロブランは敵に回したくない相手でもあつたわけだ。

ロブランは忠実にドツタの命令に従い続け、それ以上の野心を抱

かなかった。そしてそれこそが、ロブランの城内での力ともなっていたことは確かだろう。

ロブランはまさに、生まれながらの軍人だったのだ。

・ ・ ・

きめ細かな御影石の彫刻が施された椅子に深く座り、ザバル・ドツタは明らかに張りのない声で、ゆっくりとロブランに声をかけた。部屋にいた衛兵たちは人払いされ、今は二人しかない。

「…ン、よくやったな。手柄であるぞ…あー、ロブラン・ミヨール」
「ありがとうございます。部下たちも喜びます。ザバル・ドツタ様」

ロブランもゆっくりとした口調で淡々と答えた。大声を出さなくても、ドツタの耳は今もさほど衰えていない。

「ところでロブランよ。最近は二つの神器とも、ほぼ休みなく稼働しているということは聞いておるか？」

「はい。我がドツタポリスのパーツ収穫量は、今なお増えているそうですな」

「ふむ。でな、ロブランよ。余は三つ目が欲しいのじゃ」

ロブランは顔色ひとつ変えない。ドツタも微動だにしなかったが、心の中では大きく身を乗り出していた。

「…となると、再びポリスとの戦争でございしますな？」

「うつむ、問題はそこなのだ。一番手近なポリスとなればミルレイズがあるが…あそこの防衛能力は、先のマキシポリス以上とも伝え

聞く。警戒もされておるしな。それで…つまり悩んでおるわけだ」

実際、国力ともなればドツタポリスはずば抜けている。平地での戦争であれば、近隣の複数の国を同時に相手にしてでも勝てる力があるだろう。だが攻城戦となれば話は別だ。よほどの奇策がない限り、城を攻めるには敵戦力の7倍は必要と言われる。従ってポリスが陥落する時というのは、たいがい内乱期のドサクサというパターンが多い。安定したポリスを落とすのは並大抵のことではないのだ。

「プラタナポリスはどうでしょう？」

突然のロブランの言葉に、ドツタは少し戸惑いを見せたようだった。

「プラタナ…と申したか？」

「はい」

「じゃが…プラタナを攻めるには、まずあの細い回廊を通らねばならぬぞ」

「はい。確かにプラタナはその地の利ゆえに、今まで戦乱に巻き込まれることのあまりなかったポリスでもあります。しかしそのことでもあるのでしょうか。私はつい一週間ほど前にあの辺りを通りましたが、ほとんど警戒しておりませんでした」

「まことか！？」

今度は本当に椅子から身を乗り出してから、苦しそうにフウ…と息を吐き出し、再び背をもたれかけた。自力ではそれ以上起きることもままならないようだ。

「はい。かつて賑わいを見せたと言われる防衛拠点の宿場町も、か

なり小規模なものとなっていたのが証拠。正直私も驚きました。平和ボケというやつでしょうか…」

ロブランはドッタの興味深げな様子を見るや、すぐさま後を続けた。

「我がミヨール胸甲騎兵大隊と適当な工兵隊を差し向けて頂ければ、一週間以内に回廊の出口に堡壘（砦）を築いて見せましょう。そうなればプラタナは何ら問題のあるポリスではなくなります」

「そうかそうか。さすがはロブランだ。ではパシエツト工兵大隊を付けよう。文句はあるまい？」

ドッタはニヤリと笑う。しかしロブランは一瞬戸惑いを見せた。

「ザバル・ドッタ様。パシエツト隊は先のマキシポリスとの戦争で既に全滅しておりますが…」

「ン？なんと！？そ、そうであった——余としたことが…クツ！」

パシエツト隊の全滅は、ドッタ内で知らぬ者はいないほど有名な話なのだ。

ドッタはいったん顔を下に向け、そして再び上げると、その表情は明らかに切迫した者の顔になっていた。そして今までの口調から一転、叫び出したのだ。

「ロブラン！次の戦争ではできるだけ死者を出すでない。敵にもじや！生け捕りにして全てパーツとする。それとお前が捕獲した二名だがな、ナツツパーツの方はただちに神器で脳を取り出して余との相性を見るのじゃ！」

「ですがザバル・ドッタ様。意思を持ち、素晴らしい戦闘能力を持つ、かつて例のないナツツパーツなのですが…」

「何を申すか！！しょせんただのパーツであろう！余は早く若い脳が欲しいのだ。こんな…こんなところで余は…余は――」

突然、ドツタはブツブツと独り言のようにつぶやくと、やはり突然、再びロブランに話しかけた。

「それと例の不死身の男だな。直ちに研究所と連絡をとって体の謎を突き止めさせるのだ。よいなっ！」

「はっ！」

ロブランは敬礼をし、クルリと踵を返すと、スタスタと部屋を後にした。

・ ・ ・

「ゴバン、私なんだか眠くなってきた…」

二人はなんとかこの牢から抜け出す方法はないかと、あちこち探りを入れていた。しかし疲れたのだろうか？ルーマが眠たそうにあくびをした。

「ああ、そか。そう言えばルーマは寝てねえんだよな」

「う…ん。すまないゴバン。ベッド借りるう…」

しかしルーマが倒れこんできたのは、ベッドではなくゴバンの方だった。

「うわっ！おいこっちじゃねーって」

ルーマはいつになくボートとしていた。いくら眠いとはいえ…
その時、ゴバンも気づいたのだ。

「なんだ？俺もなんか——おい！これおかしいぞ。おいルーマ起きろって！」

しかしルーマはそのまま倒れ込み、それを起こそうとしたゴバンもガツクリと膝を付いた。体に全然力が入らない。

「効いてきたようだな…」

その時、鉄扉の向こうから聞きたくもない声が聞こえてきた。

「心配しなくていいぜ、ゴバン。ヤバイ薬じゃあない。すぐに目覚めるさ」

「ロ…ブラ…ン」

霞む目で辛うじてそれを捉えた。脇に数人の兵士を従え、皆、見慣れないマスクをしている。恐らく催眠を誘発する薬を牢内にまいたのだろう。

「お前らは油断ならねえからな。念には念。運びやすくするためつてワケだ。ああ、安心しな、ゴバン。お前のお呼びはもう少し後だからよ。とりあえずそっちのバケモノに用がある」

「クソツ…ルーマに何…すんだよ！」

ゴバンは必死でルーマを守ろうと体を割り入れる。

「決まってるだろ？パーツンなってもらうんだ」

「…ざけんな！」

「いゝやフザケてねえ。俺だって惜しいと思っただぜ。そのバケモノの戦闘力は買える。だがドツタ様の意向なんですよーがねえのさ」

ゴバンは乱れそうになる意識を、なんとか堪えて集中した。そして全神経を足腰に集中させる。そして次の瞬間――

「させるかよっ！！」

ゴバンは猛烈なダッシュを見せ、ロブランに突っ込んでいった。そして左腕を包む金属の枷を武器代わりに、鋭い突きをロブランの露出した首筋へ伸ばした。

「うおっ！」

脇の兵士たちも思わず声を上げる。たぶん彼らならば、避けられずに絶命したことだろう。とても薬が効いている人間の動きではなかった。しかしロブランはそれを苦もなく、スルリと交わす。腕を取り、ゴバンを羽交い締めにした。確かに早かったが、いつもの彼の動きではなかったのだ。

「クソッ、離せ！離せよオラァッ！」

「ふん、残念だったな」

ゴバンは懸命に暴れるが、ロブランはまるで動じない。しかもその激しい動きは、ゴバンにより深く薬を吸い込ませ、意識が遠のく。

「おい！」

しかしロブランは、容赦なくゴバンの髪の手をつかみ上げた。

「聞きなゴバン！お前とかかわった人間は死ぬ運命ってことだ。それがお前の宿命なんだよ！俺には最初っから分かった。だから俺と兵隊やつてりゃあ良かったのによ！」

「な…にをバカ…が…」

「思い返して見るんだな、え！お前は血の臭いが強すぎる。俺と同じく。テメーだけ抜け出そうとした報いってことだ。おい、氣イ失う前に見ろ。アレだ！見えるか？アレだよ。アレが今オメーがすがってるモンの最期の姿なんだよ」

ロブランは兵隊たちにアゴで指示を出す。

「ヤ…メ…ロ…」

兵隊たちはルーマに近づいていくが、彼女は既に、まるで反応を見せない。ついさっきゴバンがその手にしていた体を、容赦なく抱き上げるのだ。

ジャラリ…と、ルーマの手枷が音を立てて響く。

「フン、パシエットの次は女のナツツパーツかよ！軟弱なもんにはかり肩入れしやがってよ。クズが！」

ロブランは、ブン！と、ゴバンをベッドの上に投げ出すと、不快そうに背を向け、牢の外に出ていった。ルーマを抱える兵士たちも後に続く。

なんとかベッドの上に這いつくばり、霞む目の先で最期に捉えた

映像――

それは、今もなお革紐でまとめられ、控えめになびく金色の長い髪の毛だった。

神器

なぜあの日に限って寝付けなかったのか？

そう。確かに寝苦しい夜ではあったが、今にして思うとあれは『予感』だったのかも知れない。

・
・
・

テントの布地を通して透けてくる月明かりは、いつしかゴバンにとって止めどない思考を映し描くキャンパスとなっていた。普段ならばやがて考えることにも疲れ、睡魔が襲ってくるものだが、その日は違った。どうしても寝付けなかったのだった。

布地に映る木々のゆれる影にも誘われたのだろうか？とうとうゴバンは眠ることをあきらめ、月明かり差し込む深夜の森へと出た。

虫の声を聞きながら小道の先を少し行くと、巨大な二基の攻城砲が木々の切れ間から忽然と姿を現した。それを天頂近くから差し込む三日月の光が、青く染めている。既に外装は完成しており、戦争開始の号砲ともなつて火を噴くのも、もう間もなくのことだろう。ゴバンにとって戦争は歓迎すべきことではなかったが、既に腹は決めている。それにここまでやってきた仕事そのものには満足していたし、目の前の巨大な大砲への愛着が生まれていたことも確かだった。だからこそ分からなかったのだ。今やハッキリと分かるようになった、この胸騒ぎが何なのか…

「…ン？」

ゴバンはふと、攻城砲を隠すダミー用の茂みが地面に落ちていることに気づいて、そこへ一歩踏み出した。それに見張りはどうしたのだろうか？

（おかしい！？）

そう思った瞬間、耳が不穏な音をとらえた。虫の大合唱に邪魔をされて聞き取りづらかったが、それは間違いなく導火線を火が伝う音だった。

ハッとした次の瞬間――

ドゴオオオオーン！！

暗やみだった夜は一瞬にして輝き、白昼となった。それを脳に伝えた直後、ゴバンの中で景色は逆に暗転した。あまりに突然のことに、ゴバンの脳は防衛本能を発揮する間もなく、当然、過去の記憶が走馬灯のように流れる暇もなかった。何も感じることさえできずに、ゴバンの意識はあつという間に断たれるのだった。

ゴオオオオオオオオ！

それが次に聞こえてきた音だ。

ゴバンには最初それが激しいスコールに思えた。しかし何か違う。その奥に聞こえるものは、バーン、バーン、という銃声のような音。それに時おり叫ぶ人の声。それだけだ。見えるものは何もない。だがゴバンは確信していた。それが夢などではなく、現実であるということを…

激しいスコールが耳鳴りであることに気づく頃、徐々に回復する視力と共に、いつの間にか日の出を迎えていることを知る。そして何とか霞む先に見えたのは、もはや原型を失い、黒くくすぶる攻城砲。それにあちこちに果てた死体だった。

ゴバンは起き上がって、フラつきながらもどうにか肩膝をつく。

「ゴバン！？テメー生きてたのか！」

聞こえてきたのはロブランの声。彼は少し後方で野営をしていたはずだ。その彼がここにいるということ。それにいつの間にか流れた時間の意味…

「…パ…シエツト…は？」

体中が火のように熱い。

「ウツ！？お前、よくそれで生きて…」

「パシエツトはよ！」

痛みを堪え斬れずに叫ぶ。

「し、知らねえ。昨夜奇襲を受けて工兵隊は全滅だ。死体ん中にはいねーみてえだがな。敵は撤退したが捕虜もかなり取られた。そんなかも知れねえ。いずれにしろ作戦は失敗だ。おい、衛生兵！重傷者だ。早く！」

ゴバンはかまわず立ち上がった。

「おい無茶すんな。それで生きてんのが不思議——なっ！？なんだ？なんだぁお前！？」

既にゴバンの体はボロボロになった衣服と、垂れ下がる皮膚との区別もつかないほどに酷いものだった。体中が血と泥で赤黒く染まっている。しかしそれがロブランの目の前で、見る見るうちに治癒していくのだ。

「…悪魔か——！？」

信仰を持たないロブランが、初めて口にした言葉だった。

ゴバンはさっきまでの死にかけの状態が嘘のように、瞳に光を宿しだした。ボロボロの衣服はそのままに、構わず駆け出したのだ。

「おいゴバン、待て！」

「ミヨール隊長、どこへ!？」

兵隊の一人が背後から叫ぶ。

「お前らは先に撤退してろ！」

ゴバンは既に森の中へと消え、ロブランもその後を追った。

埋没しそうになる意識と戦いながら、ゴバンは必死で戦っていた。ただとにかく走った。やらなければならないことが——大切な人が待っているから……

(パシエット!ー!)

ゴバンは叫んだ。森の中、裂ける唇をも構わず叫んだ。叫び続けたのだ。

しかしそれは全て森の中に吸収されてしまう。いや、それどころか、いつしかゴバンの周りは森ではなく暗やみだった。視界ゼロの闇の中に、全てが吸収されてしまう。

——助けるんだ。助けるんだ。助けるんだ——

闇の中から何者かが訴えてくる。

(誰だ!?)

——助けるんだ。助けるんだ。助けるんだ。助けるんだ。助けるんだ。助けるんだ——

闇の声は延々と終わることなく続く。

(うるせーよ、黙れっ!んなこた分かってんだよ。俺はパシエットを……)

——違う——

闇の声が否定した。

いったい何が違うというのか?それにさっきまで走っていた森は?後ろから迫ってきたロブランは?

考えている暇はない。どちらにしろこの暗やみを抜け出さなければ

ばパシエットは——いや、待て!?

——助けるんだ。助けるんだ。助けるんだ——

ゴバンは気づいた。訴えているのは自分自身だ。闇の奥から叫ぶ、自分の声。そこから抜け出そうとする意志。そして意志が求めているのはパシエットではなく……

(…ルーマー!)

ゴバンはようやく、暗やみの先に光を見つけた。

(あそこか!?)

しかしどうにも足が重たい。暗やみが沼地のように足を取り、引き抜くことができない。深い眠りという……闇。

一度現われた光が、再び遠ざかるうとする。

(くっそおおおおおっ!!)

歯を喰い縛る。今ここで抜け出さなければ、あの光を手にしなれば、また闇の中に埋没してしまう。見たくもない、もはや助けられないと分かっている夢の続きを見せられるだけだ。そしてパシエットの死と共に夢から目覚めた時、現実でも全てを失うのだ。

そんなのは……そんなのは絶対に嫌だ!

・
・
・

「——今度は助けるんだっ!!」

ゴバンはぐっしょりと掻いた寝汗を飛ばしながら、ベッドから飛び起きた。そしてすぐにバランスを崩して床に、ガタン!と、転がり落ちる。

「クソッ!」

どれくらい時間が経ったのだろうか?まだ薬が抜けない。体思うように動かない。だがそれでもゴバンは四つんばいになって、なん

とか立ち上がろうとしたその時。

「…ゴバン、ゴバン」

ささやくような声で、鉄扉の向こうから聞こえてきた声。それは紛れもない、ジェネの声だった。

「ジェ…ジェネかつ!？」

ゴバンは顔を向けるが、覗き窓にはジェネの姿は見えない。いや、頭だけが辛うじて見えた。

「あ、良かった。ここだったのね。叫び声が聞こえたからもしかしたらと思って…」

「いったいどういうことだよ？」

「話は後。今ここ開けるから…」

カチャカチャ…と、鍵穴に差し込む金属の音が聞こえてきた。しかしなかなか開かない。ジェネは鍵の束のなかから、合う鍵を探していた。

カチン!

ようやく確かな音がして、やがて鉄扉は開いた。ゴバンもなんとか立ち上がる。

「ゴバン、無事？」

ジェネが飛び込んでこようとして、ゴバンは慌ててそれを制した。まださっきの薬が残っているかも知れないからだ。ジェネもゴバンの動きを察したようだ。牢から離れ、ゴバンがフラつきながら出てくるのを待つ。

「…おいジェネ。どういうことだ？」

「あの…謝って許されることじゃないのは分かってるけど。でも—
—ごめん…」

「んなこたどうでもいいんだよ。状況教えろ！こっちはルーマがさらわれたんだ。パーツにされちまう」

「聞いたよ。だから何とかできないかって、チャンス伺ってたの」

ジェネは鍵の束から一つづつ、ゴバンの左手を拘束している枷の鍵穴に突っ込む。

「ルーマを助ける気はあるんだな？」

「と、友達だもん…」

カチリ！と、音を立て、ゴバンを拘束する枷は解かれた。

「今は深くは聞かねえ。それよりここはどこだ？」

「ドツタ城の東塔地下よ」

「東塔？知らねえな。本城とはつながってんのか？」

「この階段を登って一本道よ。地下でつながってるの」

「分かった！」

それだけ聞けば十分だった。ドツタポリスはかつてのゴバンのねぐらでもある。一度だけパシエットに連れ立って、本城最上階にある神器も見たことがあるのだ。

ゴゴゴオウウウン！

ゴバンが駆け出そうとしたその時、突然地面が揺れた。遠くの方で爆発音のような音も聞こえ、思わずゴバンが叫ぶ。

「な、なんだ！？」

「私にも分からないけど、どこかの国が責めてきたみたいなのよ。それで城の中の兵隊はほとんどみんな出払ってて、それでこうして……」

「分かった。取りあえず感謝すんぜ。俺はルーマを助けに行く！」

そう言っつてゴバンは駆け出した。ジェネも後を追おうとする。

「待って！ン…ゴホ、ゴホツ、ゲホツ！」

まだ風邪が癒えていないのか、ジェネは突然咳き込みだして顔を覆う。それをなんとか押さえ付けて見上げた時には、ゴバンは既に階段の向こうに姿を消していた。さっきまで薬で眠らされていたことが嘘のように速い。

「…ゴバン」

切なそうに見上げるジェネは今も苦しそうに胸を押さえ、肩を下させて呼吸を荒げた。だがそれだけではない。彼女はそれに気づいているのだろうか？

ジェネの首筋には、さっきまではなかったはずの大きな灰色のアザができていたのだった。

・
・
・

「なんだアイツらはあつ！？」

城の外に駆け出てきたロブランは、中枢区内で展開されている光景を見て叫んだ。そこは既に戦争状態だったのだ。だいたい城壁や城門が無傷であるのに、なぜ中枢区内部で戦火が上がっているのかが理解できない。

「ミヨール隊長、ご無事で！」

ロブランの側近でもある大男が駆け寄ってきて叫んだ。

「状況はどうなっている！」

「は、はい。キャタピラ兵、全滅とのことです！」

キャタピラ兵とは文字通り、キャタピラと重装甲のボディパーツを体に取り込む兵士たちのことで、彼らはドッタ中枢区内最後の防衛部隊なのだ。

「全滅だと！？早すぎるわ！」

足が遅い割に、砲兵などと比べると火気の弱いキャタピラ兵たちは、見た目の派手さとは裏腹に防衛任務以外ではあまり役に立つことがない。そのため攻撃的なドッタポリスの中にあって、実戦経験が少ないというネックがあったことは確かだ。だが脆さを見せたのは彼らだけではなかった。戦いの様子を見ながらロブランが叫ぶ。

「どういうことだ！？近衛狙撃兵隊がやられてるぞ！」

近衛狙撃兵隊——彼らはキャタピラ兵たちとは違う。ドッタが誇る一流のスナイパー集団なのだ。敵はどう見ても鎧さえ着ていないし、生身にさえ見える。格好の餌食のはずだ。しかし撃てども当たることがなく、全てがまったく無駄のない動きで避けられている。

「クツ…城外のミヨール隊を急いで動員しろ！俺が指揮できる兵隊がないと話にならない！」

しかしそうこうしている内に、敵は本城東門を突破し、内部へと侵入を開始していた。本城東門は、表から神器のある部屋へと行ける唯一の入口で、そこにはザバル・ドッタがいるはずだ。

「よりによつて、クソツ！俺は先にヤツらを追つて城内へ入る。後から続くよう伝えろ！」

「し、しかしお一人では……」

「んなコト言つてるヒマあねえんだ！急げよ！」

近衛隊が放つ銃声も、今では完全に沈黙してしまつたようだ。ロブランは単身、突如襲つてきた謎の兵団を追ひ、城内目指して駆け出していった。

走りながらロブランは思う。

（——にしてもヤツらの姿はまるで……）

・ ・ ・

「ルーマアアアツ！！」

ゴバンは叫び、本城の階段を駆け上がった。

——助けるんだ。助けるんだ。助けるんだ——

今もまだ夢の中の続きのように、心の奥から誰かが叫ぶ。パシエツトを追つた時の自分。その時の幻影が今の自分と重なつた。大砲を撃ち続けながら叫んだあの時の自分。今度はあの時とは違う。敵は出払っている。早くたどり付けろはずだ。今度こそ助けられるはずだ——ゴバンは必死で自分に言い聞かせる。

階段の最後の数段を一気に飛び越し、神器のある部屋へと続く長い廊下に出た。一直線に続く長い白壁の廊下は、シーンとしていて人影はない。

かつてパシエツトと共に一度だけ歩いたことがあるその廊下を、

今は一人で走る。部屋は突き当たりを曲がった場所にたった一つ。迷うことはない。

ゴバンが聞いているのは自身の激しい息遣いと、ほとんど吸収されてしまう絨毯を駆ける足音だけだった。とてもこの階で何かがなされようとしているとは、考えがたい気もする。ルーマはまだ連れられて来ていないのでは？とも思えた。だがそれもすぐに分かる。今や目の前にまで迫った角を曲がりさえすれば…

ゴバンは左足で急激にブレーキをかけ、それでも壁に激突しながら角を曲がり、部屋の入口をくぐった。

「ルーマツ！？」

瞳が真っ先に捉えた映像。それはゴバンにとっては吐き気をもよおすような光景だった。

ルーマは既に、神器の中に取り込まれていたのだ。

それは全部で十数個の透明なカプセルが並ぶ巨大な機械で、その中の一つに、一系まとわぬルーマの姿があった。神器から伸びる無数の管が、彼女の白く美しい肌を貫き、至る所から内部にまで入り込んでいる。そして液体に浸されているわけでもないのに、得体の知れない力によって、カプセルの中空に両手を上げるような体勢で浮いていた。かつてゴバンが見た、パシエットの姿とまったく同じように…

「だ、誰じゃ！？」

ホールとも呼べる天井の高い大きな部屋の隅。華美なデザインの車椅子に座りながら、神器の操作パネルを操っていたドツタが振り返る。脇にいた衛兵も銃を構えた。

しかしゴバンはそれを完全に無視し、神器の目の前まで駆け寄ると、ルーマの顔色を確認した。皮膚にはまだ血の気がある。

（助かる！）

ゴバンは左手の平をカプセルに向けて広げた。あの時もそうだったし、そして一度はパシエットを助け出したのだ。あの事件さえ起こらなければ、あの時だって助けられたはずなのだから…

ゴバンは軽く頭を振り、過去の悲劇を断ち切る。

しかしその直後だった。何の気配を立てることもなく、誰かが背後からゴバンを抱え込んだ。

「な、何すんだ！？ 離せっ！」

しかもそれは一人ではない。ゴバンをつかむ手や、抱え込む幾つもの腕。それらが体を、腕を、そして足をつかんで離さない。しかし、いくらルーマに心を奪われていたとはいえ、それだけの人間の気配を感じ取れないことなどあるだろうか？

異様なものを感じてゴバンは振り返る。

「なっ！？」

目を疑った。振り返った先にいたのは、ルーマだったのだから…いや違う。ルーマとまったく同じ顔をした何人もが無表情な女たちが、背後からゴバンを抱え込んでいたのだった。彼女たちにゴバンほどの腕力はなかったが、押さえているのが複数ということと、何よりもゴバンに力を入れさせない技を、彼女たちは心得ているようだった。

「お、お、お…お前たちはなんじゃ。ま、まさか余の防衛隊が突破されたとも言うのか！？ え、衛兵！ 衛兵！」

信じられないのはドツタとて同じだった。敵が攻め入ってきたことは知っていたが、当然城壁の外だと思っていたし、侵入されるこ

となど考えもしなかった。彼はすぐ脇に立つ衛兵に助けを求めるが、それは血しぶきとなって返ってきた。

「うわあっ！な、な、何じゃあ！？」

続いて、ドツタの膝の上に何かゴトリ…と、落ちてきた。目と目が合う。それは切り落とされた衛兵の首だ。体だけとなった衛兵は崩れ落ち、その背後にはやはりルーマと同じ顔をした女が、血の付いた短刀を持って無表情に立っていた。

「ひっ、ひiiiiiiiiっ！」

スパアッ！

叫んだ時には、その首は胴体から離れていた。

五百年もの長きにわたり生き抜いてきた欲多き男の命は、そこであっけなく消え去った。その生首は血を引いて床を転がりながら、最期には天井を見上げて止まる。瞳はどの段階まで、見たものを脳に伝えたことだろう…

「——これが神器か…」

いきなりの声に驚いて、ゴバンはカプセルの方を見る。その中には今もルーマが気を失ったまま浮いていた。変わりない。だが声はその背後だ。人影がある。いったいいつの間に…？

ビシッ！

透明だったカプセルは一瞬にして白くなり、そして割れた。

カプセルの中で宙に浮いていたルーマは、糸が切れたように重力の法則にしたがって落下していく。それを背後から伸びた長い男の腕が、彼女の体をフワリと受け止めたのだ。

不思議なことにカプセルの破片は、まったく飛び散ることなく整

然と垂直に落ちたため、さらけ出されたルーマの肌を傷つけることはなかった。しかしそれを抱えるために伸ばした男の腕は破片により傷つき、いく筋かの血が流れた。だが驚くべきはその後だ。その傷が一瞬のうちに治癒していく様を、ゴバンは見逃さなかった。

「!？」

ゴバンは相手の顔を見上げる。

ルーマによく似た美しい金色の髪と、美しい顔立ち。しかしそこに不似合いな、クセのある笑み。体のラインを浮き立たせるピタリとした衣服といい、男はどこか胡散臭い。

ルーマの体に食い付いていた管はいつの間にか途中でスッパリと切れていて、彼女の細い体からだらりとぶら下がっていた。男はそれごとルーマを肩でかつぐように持ち上げる。

「……まったく、野蛮な輩は何をするか分からん。だがようやく手に入れたぞ。マスターユニットをな」

男はゴバンの存在を全く無視して、クッククツクツと、どこか爬虫類を思わせる不敵な顔で笑った。

「テメー誰だよ!？ルーマを離せ!」

ゴバンは突っ掛かって行こうとしたが、女たちに押さえ付けられていたことに気づく。構わず動かそうとしても、それは間接の激痛となって返ってきた。腕を決められているのだ。

「クソッ!」

「ン?どうした。なぜその男を殺さない?さっさと処分するがいい」

男はゴバンに見向きもせず、女たちに言った。

「ですがテロメア様。これは半ノイマノイドではありません。当初の命令にはないターゲットですがよろしいですか？」

「半ノイマノイドではない？珍しいな。奇形というわけか。興味はあるが放っておけ。じき感染するだろう」

「分かりました」

突然、フツ…と、ゴバンを押さえ付けていた幾つもの手が離れた。思わず前のめりに倒れ、四つんばいになるゴバン。すぐに後ろを振り返ると、十人以上ものルーマと同じ顔の存在に、ゴバンは声を失った。だがその向こう。部屋の入口の気配にゴバンは気づいた。そこに立っていたのは――

「ロブラン！？」

「この侵略者があつ！！」

直後に銃声は二発響いた。彼はドツタの亡骸を見るや否や、連発銃を撃ち放ったのだった。単に感情的に撃ったわけではない。一発はテロメアの左目を。もう一発は右に避けることを見越して、顔一つ分照準をズラして撃った。以前のルーマとの戦いや、近衛狙撃兵たちの戦いを見て導きだしたロブランの戦法だった。

果たしてその戦法は正しかった。二発目が見事、テロメアの眉間を捉えたからだ。

「ぐあつ！？」

テロメアの顔は後方にズレ、眉間から出た血は糸を引く。

「ザマアッ！」

思わず叫び、拳を握るロブラン。

だがいったん後ろに振り返った顔は、ゆっくりと元の位置に戻ってきた。まるで効かないとばかりに首を左右に振り、ロブランをジッと見据える。しかもテロメアの額の傷は見る見る再生し、血の跡も消えていくのだ。

「なっ…!？」

テロメアは右手を前方に伸ばすと、まるでゴバンがやるのと同じように、手のひらを広げた。そして手のひらから、細く、赤い光が一直線に伸びて、ロブランの巨大な金属の右手を捉えたのだ。まるで赤外線照準器のように…

「ポイント固定」

テロメアがつぶやく。

「クソッ、こいつもかつ!？」

ゴバンのことを知るロブランは、その動作に危険を感じてすぐに部屋の外に飛び、壁ごしに隠れた。砲撃してくる様子はない。ロブランは即座に次の作戦移行すべく、頭をフル稼働させる。

しかしどうしたことだろう？

逃れたはずの小さな赤い光が、まるで印のように今も鉄の腕に貼りついていたのだ。ロブランは不思議に思っただけの線をたどっている。するとそれは信じられないことに、曲線を描いてテロメアのいる部屋へと続いていたのだった。

「なっ!？」

——光ではなく糸だったのか？

ロブランは一瞬そう思っただけで間に手を差し入れるが、それは間違いなく光だった。右腕を振ってそれから逃れようとしても、まるで暗やみを飛ぶ蛍の残像のように、赤い光は空間に線を描く。しかもそれは決して消えることはない。

一方、テロメアは本当にゆっくりと、余裕を持って次の言葉をつぶやいた。

「ノード弾、レベル1。射出」

パシュッ！

それはゴバンとはまるで違い、微かな音だけを立てて発射された。しかも血も出なければ、派手にブロウバックすることもない。

発射された物質は人が走る程度のゆっくりとしたスピードで、赤い光の線をたどるようにして飛んでいた。だが本当に飛んでいるのか？ゴバンにも弾丸そのものは見えない。微かに分かることは、その目に見えない弾が飛んでいる周囲の空間が、まるで塵気楼のように揺らいでいたということぐらいだ。実際には強烈な重力により空間が歪んでいるということなど、ゴバンには知る由もない。ましてや赤い光の中が特異空間であるなどということも…

ロブランもその歪みが近づくのを見た。そしてそれがロブランの右腕に届いた瞬間。

ボンッ！！

爆音が響いて床が揺れた。

「ぐわあああああぁあつ！！」

続いてロブランの奇声。そして、ガラン！と、ゴバンの目の前で吹き飛ばされてきたのは、ロブランの『もげた』金属の右腕だった。

ゴバンは奥歯をギリツ…と噛み締め、そしてテロメアを見る。

「フフン…」

その顔は恍惚と歪んでいた。優越感に浸る人間の顔。殺しを快樂にさえ変えてしまう凶器の顔だ。

ルーマが目覚めたのは、その時だった。

さっきまで気を失い、テロメアの肩で二つ折りになっていたルーマだったが、得体の知れない人間に抱かれているのを知ると手足を振って暴れだした。

「お前何だ！？離せ！」

「ルーマ、気づいたのか！」

だがどうしたことだろう？そのルーマの様子を見て、テロメアからさっきまでの余裕が消えたのだ。

「——マ、マスターユニットが…！？」

ワナワナと唇を震わせるテロメア。

「ご、ゴバン！こいつは何だ？」

「敵だ！それに体が俺みたく硬えし、ワケ解んねえもんを手のひらから撃ちやがる」

ゴバンの表情を見て、ルーマは瞬時に気持ちを戦闘モードに切り替えた。

ビシッ！

ルーマはゴバンにも見切れない鋭いパンチを顎に向けて放つ。しかし、テロメアは今も驚きの表情を崩していないというのに、ルー

マのパンチをあつさりと右手で押さえたのだ。それは見事としか言いようのない動きだった。そしてもう一方のパンチも同じ手が押さえる。いとも簡単にだ。

「てえっ！」

ドゴオオッ！！

ほぼ同時に足元を狙ってゴバンも弾丸を放った。だがこれも、ス Tanks を僅かに広げてあつかりと避けた。弾は背後の壁を貫通して抜ける。続けざまにゴバンは、彼にでき得る最速の連射を放つが、テロメアは全く問題なく二発目も避けた。

だがその的確な動きとは裏腹に、テロメアは表情にいつそう驚きを増して言う。

「有史時代の戦闘用ノイマノイドだ！？なぜここにいる？奇形ではなかったのか？それになぜマスターユニットに意思が……」

さらにゴバンが三発目を撃とうとした時、ルーマが叫んだ。

「ゴバン、後ろ！」

再び女の集団が、彼を取り押さえにきたのだ。すかさず反転し、手のひらを女たちに向ける。しかし――

ギリッ！と、奥歯を噛み締めた。

「……クソッ！」

ゴバンはそのまま女のタックルを受け、床に押さえ付けられてしまう。彼にはできなかったのだ。ルーマと同じ顔の人間を撃つことなど。

「テロメア様。危険と判断し、取り押さえました」

「うむ…」

「ゴバンを離せっ！」

ルーマがジタバタと暴れるが、テロメアは彼女の両腕ごと片手で抱え、動けなくしてしまう。

「…貴様、ゴバンと言ったな」

この時、テロメアは初めてゴバンに対して話しかけた。ゴバンは声を出すことなく、床に伏せられたまま顔だけをあげてテロメアを睨む。

「貴様も旧世界の生き残りか？」

「…なんの話だ？」

「ごまかさなくていい。貴様のようなものが自然に存在し得るわけがない。細胞に不老化を施したのだろうか？八千年の時を生き長らえてきたのだろうか？」

「ワケ解んねーな！テメーこそ何モンだ！？」

テロメアはジッとゴバンを見据える。

「…まあいい。では質問を変えよう。貴様がこのマスターユニット——ナッツパーツを見つけたのか？」

「……」

「だがこれはただのパーツではない」

「当たり前ーだ。ルーマは人間だ。パーツなんかでたまるか！」

ペッ！と、唾を吐くゴバン。

「フン…ルーマと呼んでいるのか？分かった。貴様に敬意を表して、私もそう呼ぶことにしよう。まさかマスターユニットに意思が芽生えるとは考えもしなかったわ。言っている意味が解るか？つまりルーマは人間などではない」
「クソッ!？」

ゴバンはなんとか体を起こそうとあがくが、押さえ付ける集団の力は強く、いかんともし難かった。

「どうやら本当に太古の生き残りではないようだな。ならば貴様になど話しても解りようもないだろうが…」

テロメアは少し考えるそぶりを見せ、結局は話し始めた。

「…一つだけ教えてやろう。今のこの世界には本当の意味での人間はいない。このルーマだけではないぞ。私や貴様もだ」

ふと、ゴバンはフルボディであるジェネのことを頭に浮かべるが、もちろん口には出さなかった。

「なにもそれは機械病のせいではない。それ以前から人間は人間ではなかったのだ。それゆえに機械病という奇病が生まれたのだが…、それは説明しても解るまい」

テロメアは逃れようともがいていたルーマを、ぐいつと引き寄せてから続けた。

「私の目的とは、自然が生み出したままの人間への回帰だ。私だけではないぞ。これは既に死に絶えた先人たちの思いでもある。ルー

マはその途中段階にある実験体を応用したものであり、この世界の機械人間共を一掃するのに必要な兵器なのだ。だから私が貰っている――いや、取り戻しにきた……という方が正しい。コレの元となった脳内プログラムは、私が作ったのだからな」

「テロメア様。お急ぎになりませんと、力場が揺らぐ恐れがあります。お早めに」

女のうちの一人がテロメアに近づき、耳打ちをした。テロメアはコクリとうなずく。しかしさっきまでの話は、ゴバンにはほとんどワケが解らなかった。

「ゴバンよ。貴様は実に興味深い。できるなら色々聞きたいところだが、今はそれにかまけている暇も我々にはない。特別に解放してやろう」

「な……に言つてやがる……」

「だがその左腕は危険だ。万が一ということもある……」

そう言つと、テロメアは腰に差していた短刀を女の一人に渡した。その様子を見たルーマは突然暴れようとするが、テロメアはガツチリと押さえて離さない。なぜか急に嫌な予感がしたのだ。

「ヤメロ！ゴバンにそんなことをしたら許さないぞっ！！」

いや、予感ではない。彼女にはテロメアが女へ発した心の会話が聞こえたのだ。それは彼女の中に元々備わっていた能力でもあり、ドナーツリーから生まれた後、失っていたものだ。

女が短刀を抜くと、鏡のような美しい刃先が現われた。そこには斑紋も何もなく、ゴバンが今まで目にしたことのない光を反射させていた。

「何を…ウツ！？」

既にうつぶせのゴバンに、女たちが寄ってたかって左腕を取り、ムリヤリそれをまっすぐに伸ばした。テロメアはほくそ笑みながらそれを見つめ、語り始める。

「フフ…本来、内部に至るほど反発力が強まる貴様の肉体に、刃物や銃弾程度の武器は効かない。弱い力で切るには限界があり、強い力が加われば瞬時に硬化するからだ。しかしその刃物は並のものと違うぞ」

二の腕に刃先が触れた途端、ゴバンの目の前で皮膚は少しも沈み込むことなくスッパリと切れた。

「……！？」

「言っても解らないだろうが、その刃先は少々特殊でな。連続疑一次元の固体結晶で、厚さが原子数個分でありながら欠損することもない。だから力を入れず、ゆっくりとでも切れる。つまりその特殊な体でも真つ二つにできるといふわけだ」

「ゴバン！ゴバンを離せ！離せっ！！」

暴れるルーマをものもしないテロメア。その言葉通り、刃先はゆっくりとゴバンの皮膚の奥深くまで侵入し、ほとんど隙間のない刃先と皮膚の間からはジツトリと血もにじみはじめた。そして急激にこみ上げた痛みに、ゴバンが悲鳴を上げる。

「ぐわあ！！」

皮膚は切れた部分との結合を試みようとするが、いかんせん刃先が邪魔をしてそれを許さない。ゴバンの中のかつての記憶——自ら

の皮膚を切り裂こうとした時のことが過る。刃の切れ味ゆえに、あの時ほどの痛みは感じないが、しかしより深刻だった。

「今、貴様のノイマン細胞は、凄まじい速度で分裂を繰り返している。だがそれにも限界が来るだろう。結局は切られた断面の修復だけにとどまり、もはや自らの治癒力では結合し合うことはできないのだ」

テロメアの目線から見える光景はおぞましいものがあつた。一人の人間に群がる女たちと血の惨劇は、どこか食人の風習を思わせる。もちろん、ルーマからもそれは見えていた。

「イヤだ！ゴバン、そんなのイヤだっ！！」

ブルブルと首を振り、泣き叫ぶルーマ。

やがてゴロリ…と、ゴバンの左腕が床に転がる。そして流れ出す血液。だがその血を止める猛烈な細胞の再生スピードが、皮肉にも両者の結合を不可能にしてしまう。やがて血の送られなくなった左腕は壊死するだろう。

ゴバンは永遠に武器を失うのだ。

「ゴバン！ゴバン！！」

一心に叫ぶルーマだったが、ゴバンはそれに答えることもできず、ただ息を激しく荒げるだけだった。痛みもあるが、何よりもショックで気が動転していた。女たちから解放されても尚、起き上がる力が生まれない。

「驚いたな。マスターユニットがこれほど強烈な感情を見せるとはいや、だからこそ面白いというべきか…フフ。学者冥利に尽きると

いうものだ。さあルーマ。一緒に来るのだ。真の人間世界の復活のために、力を貸してもらおうぞ」

「イヤだ、離せっ！ゴバン！ゴバン！！」

唯一動かせる足でバタバタと暴れるルーマだったが、その蹴りにもテロメアは全く動じず、女たちに指示を送る。

「転送準備だ。予定通り神器も一緒に地下施設に送る。そうだ。うむ」

ゴバンは朦朧とする意識の中でそれを見ていた。痛みや精神的ショックに気を割いたがために、さっきまで気力で押し込めていた薬による睡魔がぶり返してきたのだ。もはやテロメアが何を話しているのかすら、解らなくなっていた。時おり聞こえるルーマの叫び声だけが、とても鈍く脳内に侵入してくる。

その時、突然ゴバンの目の前に落ちてきたものがあった。ルーマの美しい金髪を縛っていた革紐だ。それが一瞬だけゴバンに覚醒する力を与え、残された右腕を伸ばしてそれを手にしようとした。それをつかみさえすれば、ルーマを救える気がしたからだ。

パシエットの時のことは事故だった。今度は違う。助けられる。これほど願って叶えられないことなど、あるはずがない。あれさえつかめれば…

視界が霞みゆく中、ようやくそれを手にしたゴバンは、失いかけていた現実の音を取り戻した。

次は体を起こそう。ゴバンは次の目標を定めた。左腕は既がない。右腕と、両足を、そして首をも使って。そして起き上がりさえすればルーマを救える。戦うことだって、テロメアを倒すことだってできるはずだ。もう少して起き上がれる。

（…ルーマを助けるんだ！）

ゴバンはその目標が現実になることを何より願った。しかし強い

精神を持つてさえ補えない肉体の限界は、確かにあるのだ。どれほど強く願っても叶えられない現実には確かにあるのだった。

体を起こしつつあると信じて疑わなかったゴバンの姿は、肩を使つて辛うじて顔を上げているに過ぎなかったし、部屋中に響く激しく荒い呼吸——というよりうなり声も目立ちすぎた。傍から見れば、ただ不様に力なく這いつくばっているに過ぎなかった。

朦朧とする意識の中、ゴバンは視界を失い、やがて左腕の痛みすら失われた。しかしそれでもルーマの叫び声だけは——彼女の嗚咽を漏らす声だけは、ゴバンを現実世界から完全に千切る最後の瞬間まで、離れることはなかったのだった。

「……ゴバンに料理作る！同棲するんだ！離せ！離し……て！イヤッ！ゴバ……助け——」

機械病

それは夢の中のようにもあり、しかし何かが違う気がした。この世のものとは思えないほどの安心感があり、もしかしたら母親に優しく包まれるというのはいくことだろうか？と、ゴバンはぼんやりと考えていた。もちろん彼にはそんな思いなど、物心付いて以来体験したことはないのだが…

包んでいるのはジエネだった。いや、少なくともジエネの声が聞こえてきたのだ。それは現実感のない、どこか別の所から聞こえるような声だった。

・ ・ ・

——ゴメンね、今まで嘘付いて。あたしね、ロブランに拾われたんだ。8歳の時かな？でも前に話したことは本当だよ。家族ぐるみであたしが機械病になったフリをしたっていうの。でも父親が喋っちゃってさ、すぐ酔っ払うバカ親父なんだ。相手は友達らしいけど、ホラ、ああいうのって伝わるものだから…

——結局ベクターに追われるハメになって、あたし以外家族はみんな殺されて…前に宿場町であつたみたいく、ベクター同士の奪い合いになったの。でもそこにロブランが来て、あたしがドツタポリスの人間だつて知ったら助けてくれたわ。ああ見えても同じ国の人間には優しいところあるのよ。それ以来、ロブランはあたしをかくまってくれた。もちろんザバル・ドツタには内緒でね。主君に対するこれが唯一の裏切りだ…って、そう言ってた。

——そう言えばロブランは戦いから帰ってくるといつも辛そうだったな。最初は分からなかった。部下の前では絶対見せない顔を、なぜあたしには見せるのか…

——ゴバンなら知ってるよね。戦争で特別に名をあげた部隊は、それ以後世襲制になるっていうの。こんなのドツタポリスぐらいだと思うけど…ロブランも父親からミヨール隊を引き継いだらしいわ。それも知ってるかな？だから名を汚すわけにはいかないって、よく言ってた。他にもラムロット隊とか、パシエツト隊とか、親の跡を継いだ隊が他にもあったらしいけど…

——最近になって気づいたんだけど、ロブランは人殺しなんか好きじゃないの。ゴバンは否定するかも知れないけど、ずっと一緒に暮らしてたあたしには分かる。ただ命令に忠実なだけ。だから苦しんでたんだと思う。もしかしたらロブランはあたしに安らぎを求めた…なんて、言い過ぎかな？

——でも本音言つと、外に出たかったよ。あたしは人形じゃないんだからさ。もうどうでもよくなっちゃったけど…あ、だからゴバンと旅してる時は楽しかったあ。今まで生きてきて一番。ホントよ。

——ああ、なんかあまり時間がないみたい。早く喋ること全部喋っちゃわないと。聞いてくれるとも思えないけど…

——この場所を覚えてくれたのはロブランよ。ずっとゴバンとテロメアとかいうヤツの会話、聞いてたんだって。最上階にある神器は持っていかれちゃったらしいけど。ロブランが言うには、光に包まれてテロメアやルーマごと消えちゃったんだって。信じられないけど、本当なんだろうね。あんな時に言う言葉だもん…

——ロブランは言うことだけ言って、死んじやった。もう一つある神器のこと。その使い方。急げばまだゴバンの手はつながること。それから最期に、あたしに悪かったって…

——あんな血だらけで言われたら許すしかないじゃない。納得いかなかったってさ。いったい何にやられたらあんな酷いことに…あたし、彼が生きて喋ってるのだって信じられなくて…ホントに最後まで優しくないんだから…

——わあ！信じられない。話には聞いてたけど、ホントに平気なのかな？だってさっきまであったはずのゴバンの姿が今はまるでなくて、濃いモヤか霧みたいよ。なんかアレだね。サナギを割った時に出る乳白の液体。あんな液体が虫の体になるなんて信じられないけど、今のゴバンもそんな感じかも。一度全部なくして、もう一度組み立てなおしてるみたいなの…

——ン…ゴホツ！ケホツ！ゴメ…んクツ…ハア、ああ、なんかゴバンが出てくるまでどうかな？なんか変な感じがしてきた…

——そうそう、これは話さなきゃ。フルボディはね、機械病にならない体ってわけじゃないの。人間には機械病に感染する場所と、しない場所がだいたい半々に別れるものなんだけど、たまにね、全身が機械病に感染してしまう体で生まれることがあるらしいの。奇形なんだって。そういう人は感染が遅い傾向があるって、ドッタの研究機関が調べたらしいわ。

——フフ…ロブランも正直に教えてくれるんだからね。知らされたのは一カ月ぐらい前よ。冷たいんだか優しいんだか…でも知ってるんだ。ロブランが夜中に一人で苦しんだの…って、この話はヤメとく。彼の名誉のためにもね。

——だからあたしの体は、機械病に感染しないナッツパーツとは違うの。もちろんルーマの肉体ともね…あたし、彼女のことも最初から知ってたんだ。知能のあるナッツパーツだってこと。黙っててゴメンね。ホントはもっとちゃんと謝りたかったんだけどなあ…

——最後をお願い、ゴバン。ルーマを助け出して！こんなこと言えた義理じゃないのは分かってる。でも本当に好きだったの。彼女のこと。

——聞ってる？ゴバン。やっぱ素通りしちゃうかな？神器の前にいるの、あたしだから…それとゴバンが握ってた革紐、ここに置いておくね。それから武器も。気づいてくれるかなあ…

——ああ…、これがそうかな？変わってくよ。やっぱ間に合わないみたい。恐い…でも痛くないんだね。良かった。本当はそれが一番心配だったんだ。あたしもしかして、苦しんで死ぬ人よりは幸せなのかな？アハ…

——最期にゴバン、ありがとう…

・
・
・

悪い夢でしかない。

ゴバンはそう思っていた。何しろその世界に自分の肉体を実感することはできず、ただ映像のないぼんやりとした夢を見ているのだと思っていた。悪い夢だ。少なくともこれほど胸の痛い、別れを感じさせるような夢は…

・
・
・

ゴバンが目覚めた時に見たものは、ポツリポツリと部屋に灯る小さなランプの灯りだった。他のものは暗くてよく見えない。部屋に窓がないからなのか、夜だからなのかも判然としなかった。やがてゴバンの目は暗やみに慣れてきたが、それにしても目覚めたばかりだというのに、なぜ瞳が暗やみに慣れていないのだろうか？ゴバンは何か奇妙なものを感じながら、自分の体を見た。

「!？」

ギョツとした。自分の体のあちこちから管が出ているのだ。衣服は着ていない。そして管は役目を終えましたとばかりに、皮膚から抜けていった。痛みどころか感触すら感じられず、しかも抜けた後には穴すら残らない。さつき見た夢のこともあり、自分が神器の中にいるのだということはすぐに分かった。ゴバンは手のひらを開いたり閉じたりして、自分の体に異常がないことを確認する。

そこに至り、ゴバンの嫌な予感の頂点に達していた。失われたはずの左腕が完璧に治っているという事実さえ、今の彼にはどうでもいいことだった。

全くつなぎ目のないように思われた透明なカプセルに、突然一本の縦線が走ると、それは無音で開いた。ゴバンは躊躇することなく歩み出て、夢だと信じていたものの実際を確かめようとした。しかし――

「夢じゃないのかよ……」

そこに革紐はあった。ゴバンの山刀と、ルーマの湾刀も置かれていた。そしてその脇には間違いない……ジェネの着ていた衣服が、その場で脱ぎ捨てられるように落ちていたのだった。

ゴバンはうな垂れ、力なく膝を付いた。だがどういうわけか、そ

ここには衣服しかない。もしも変態をしたなら、そこに何かしらの機械が残されているはずだ。ゴバンは即座に衣服をどかす。しかしよく磨かれた石の床があるだけで、他には何も無い。

「どこだ！？まさかジエネ、どっかにいんのかよ！」

ゴバンは辺りを見回しながら叫んだ。やはりさっきのはただの夢に過ぎないのではないか？そうも思えてきた。

カコーン！

突然、手に持っていたジエネの衣服から何かが床に落ちた。赤い色をした何か——ゴバンはそれを拾い、手のひらに乗せてジッと見つめる。

すぐには気づけなかった。

ゴバンが手にしたのは、長さにして5センチ程の、ただのボルトだった。しかもそれは赤い色をしていて、塗った色ではなく、素材そのものの色に見える。初めて触れる質感。

「！？」

ゴバンは何か気づいて、衣服の中にまだ何か隠されていないか探しだす。しかし何も無い。もう一度ボルトを見る。

「まさかっ…これが！？」

——気づいてくれるかなあ——

そんなジエネの言葉がゴバンには聞こえたような気がした。しかしそんなこと、どうして信じられるだろうか？このたった一つのボルトがジエネの全てだなどと…

だがその赤い色は、どこかジエネを連想させる。例えばどんな物に

変わっても、自分らしさを残そうとする意志——そんなものが働いたのではないかとさえ思えてくる赤。

「なんでこんな…」

機械病により、体の一部がネジになってしまったという話は、ゴバンも聞いたことがある。だが体全体がたった一本のボルトにしかならないなど…

ゴバンは苦悶に顔を歪めながら天井を見上げると、その暗やみにうつすらと広がるものがあつた。そこでは二つの神——善神ノイマシと悪神ウィルスが壮絶な戦いを繰り広げていたのだ。昔の画家が描いたものだろうか？

神話によれば両者の戦いは今もなお続いているとされる。宗教に全く興味の無いゴバンにもその程度の知識はあつた。当然、宗教画に関心を寄せたことなど一度もないが、その絵はどこか今の人間の肉体と、変態する機械との戦いを連想させないだろうか？

「なんでだよつ！！」

ゴバンは天井画を見上げながら叫んだ。

なぜみんな自分の元から離れていくのか？本当にロブランの言う通り、自分にかかわった人間は死ぬ運命にあるというのか？それを人は悪魔と呼ぶのではないのか？

次々とゴバンを襲うマイナスの思想。

しかしゴバンは頭を左右にブルブルと激しく振り、立ち向かわねばならない現実と向き合おうとした。ムリヤリにでもはい上がろうとする力が、今の彼にはあるのだ。それでもにじみ出る膿は、狂気とさえ思える叫びと共に放出してホールいっぱいに響く。

「フザケンな、クソツ！悪魔だつて？誰がだよ！俺はバカか！宗教

なんざ信じたこともねえくせによ。納得できねえ時だけ、そんなモンのせいにしようすんだ。情けねえぞ、クソヤロウ!!」

叫びは余韻だけを残して途切れ、ホールにはゴバンの激しい息遣いが響いた。

難しく考えることはない。自分と関わった人間のうち、たった一人だけでいいのだ。幸せにしてやりたい。そのためにすべきことは一つしかないはずだ。

「…ルーマを助けるんだ」

ゴバンはジエネの全てであるボルトを握り締め、立ち上がった。置いてあった衣服を着て、武器を腰のベルトに差し、ボサボサの髪を革紐でまとめ上げた。そして、部屋にある唯一の出口に向かつて歩き出すと、もはや天井画のことは頭の中になかった。

彼が知りたいのは神話ではなく、現実なのだから…

・
・
・

「オレ、機械好きだからなあ…」

そう言ってパシエットは笑った。ゴバンにはその笑いが信じられない。

「なんでだよ！なんでパシエットはこんな時にまで笑ってられんだ！？な、何か方法は…」

ゴバンは動揺を隠せずに、オロオロとただ辺りを見回すのが精一杯だった。床にはゴバンによって破壊された神器カプセルの破片と、

さつきまでパシエットに繋がれていた数十本もの透明な管が落ちて
いる。既に破壊のかぎりを尽くされたマキシ城は今もどこかが崩れ、
時折城そのものを揺らした。そのたびに散在する無数の破片がシャ
リシャリと音を立てる。

マキシ城は壊滅状態となっていた。撃ち放ったうちの一発が、た
またまマキシ城の火薬庫を貫いたということもあったが、それらは
全てゴバン一人がしてきたことだった。

パシエットは落ち着けとばかりに、ゴバンの肩に手をやる。その
手は既に、灰色のアザができて始めていた。機械病の変異を示す兆候
だ。

「くそっ！せつかくパシエットのこと助けたのに…助けたのになん
でだよ！機械病なんて…なんでパシエットの歳で…」

「オレさあ、フルボデイなの。今まで機械病にかからないで生きて
きたんだ。不思議だろ？」

相変わらずパシエットの喋りには焦りが見られない。

「…でもまさかこんな体中に変態の兆候が出るなんてなあ。神器に
副作用でもあんのかな？それともあれか。やっぱ機械好きだからか
なあ…」

「フザケんな、パシエット！」

パシエットはゴバンから目を逸らし、窓の外を見つめていた。そ
こには雲ひとつ見えず、ただ青い空が広がっている。

「おいゴバン、あの空見ろよ」

しかしゴバンは素直に反応できない。彼の体を見るほどに動揺は
つのっていく。

「バーカ、お前なに情けないツラしてんの。最後にオレの話聞いてくれて」

「――だ、だけど…パシエットの体がどんどん変わって…」

「フン…世の中仕方ねえことってあんのさ。そうなる前に聞けよ」

ゴバンはもう、うなずくしかなかった。

「あの空見な。青いだろ？」

その指差すパシエットの手は、既に全体が灰色になっている。

「あれは太陽の光のせいでき、ホントの空は夜の色さ。青い空の向こうには星だつてあんだぜ。見えねえだけでさ。でも人間はいつか機械の力であそこに届く。そういう生き物なんだよ。人間ってのはさ」

その瞳の先は、雲のない青空を、そしてその更に先の宇宙を見据えていた。

「前によ、お前と戦争の話したよな。なんで戦争するかってさ。覚えてつか？」

ゴバンは溢れ出る涙を止めることもできずに、ただコクリとうなずく。

「同じなんだよ。戦争する心も、あの空の先に行こうとする心もさ。深い部分じゃつながってんの。だからオレはどっちも否定できねえ。もちろん戦争はいけねえし、人殺しはいけねえさ。でも争いをしない人間も滅びるぜ。絶対だ」

「わ、分かるかよ…そんな理屈…」

いつしかゴバンの後ろにはロブランが立ち、二人の様子をジッと見つめていた。

「ただ思うのはさ、オレは戦争じゃなく、あの空に向かおうとする争いの中に身を置きたかったな。そっち側だけで世の中の人間全ての本能をよ、野心とか闘争心とかつてもんが全部満たされるなら、オレあ幸せだったな。そんな世界があるならさ…」

「パシエット…」

「オレは生まれついた時に、もう戦争中にいたからな。親父に連れ立って、何人も人を殺してきた。だから覚悟はしてたさ。死ぬことなんざ恐くねえよ。ただ…」

パシエットは窓の外から目を離し、今度はジッとゴバンを見つめた。その顔は既に、パシエットのものとは思えなかった。

「…ただお前と出会ってから、少し恐くなった。死ぬことも、お前を失うことも…」

「パシエット…」

ゴバンは目を逸らすことなく、パシエットを見つめた。彼の体は既に見るに耐えないほどに、人間としての原型を失いつつあったのだ。それでもパシエットは話す。そしてゴバンの流す涙の粒が、パシエットの頬に落ちたのが合図であるかのごとく、彼の口調が変わった。

「…ああ、そうかゴバン。なんでオレ今…で考えなかつ…んだ」

その口調は徐々に途切れ途切れになっていき、まるで音飛びする

レコードのようにも聞こえた。

「にんげ…はあの空の向こ…に行つてん…よ。神器は科学…だ。
神…力でも何で…ねえ。そん…スゲー…学持つてて、星まで…つて
ねえはず…ねえも…な。どう…てこん…世界に…なつたんだよ。ど
…して——」

声はいきなり途切れた。もはやパシエットのそれは口とは言い難く、次々と人間であつた痕跡を、機械病は奪つていったのだ。

だが唯一起こした奇跡と言うべきか、その変化は一つの確かな方向性を持つているように見えた。それをゴバンとロブランは、ただジツと見つめ続けていたのだった…

・
・
・

今やドツタポリスは喧騒のさなかにあつた。謎の兵団に襲われたことはもちろん、王であるドツタが死んだことが市民にも広まりつつあるのだろう。

しかしそれとは打って変わり、ゴバンにとって馴染み深い兵舎の方は皆出払つていて、ひっそりと静まり返つていた。懐かしさからここに来たわけではない。ゴバンにはある予感があつたのだ。

建物は増築が繰り返されらしく随分と変わつてはいたが、面影は今も残つていた。そして何よりも、昔のまま変わらない景色がそこにあつた。

敷地内の一角——昔と全く同じ場所に、カポンがつながれていたのだ。

「やっばりな…」

それはロブランの指示に違いない。彼はカポンが一番落ち着ける

場所を心得ていた。昔のことを忘れていなかったのだ。

ゴバンは思う。もしかしたらロブランは、自分とパシエットの間柄を羨望の思いで見つめ続けていたのかも知れない…と。

「自分だつてジェネがいたくせになあ…」

長い首を撫でながら話し掛けると、カポンは嬉しそうにブルブルと息を吐き出した。

最後にロブランの亡骸を見ておきたいというゴバンの思いは、叶わなかった。あの部屋に足は向けたものの、そこは既に、彼を慕うミヨール隊の面々が取り囲み、皆一様に涙を流していたからだ。

ゴバンは正直、ロブランのことを好きではなかった。ジェネという安らぎを得ていながら、それを隠し続けていたことも許せなかったし、それでもなお他人を羨望し続けていたことも許せなかった。もちろんジェネを自由にしなかったこともだ。自由にさえしていれば、彼女はロブランにとって『仲間』になったかも知れないというのに…

しかし一つだけ言えることは、彼には人を惹き付ける何かがあったのだろう。部下たちの態度がそれを証明している。せめて今は、「人殺しが好きではない」というジェネの言葉を、ゴバンは信じることにした。様々なしがらみに縛られ、必ずしも思うような生き方ができないということも人間にはあるのかも知れない。思えばパシエットもそうだったのだろう。カポンをいじっていた時の彼は、本当に生き生きとしていたのだから…

ゴバンは様々な思いを振り切るように、軽く首を振って前を見た。今できる最前のことを考えるのだ。

「…取りあえず、ルーマが最初に行こうとした場所にも行くかねえだろうな」

その場所に意味があることは間違いないだろう。しかし具体的な場所まではゴバンには分からない。北ということ以外は…

ゴバンはため息混じりに空を見上げた。

そこにはあの時と同じような、雲ひとつない青空が広がっている。まるで過去と現在をつなげるような…

「!？」

そこに旋回する影を見つけた。

「パシエット！」

思わずゴバンは昔の呼び名で叫んだ。発病してから後、呼ぶに呼べなかったその名で…

ギアアツ！

青い半透明の光を張った翼をバサバサとはばたかせながら、ペソアは慣れ親しんだゴバンの肩の上に舞い降りてきた。

「ずっと空飛んでたのかよ！」

ゴバンは嬉しそうに笑う。

「お前タフな。そういうトコ昔っから変わんねーよ」

ギアアツ！ギアアツ！

言葉を解する知能はないが、ペソアは何度か叫んで、今度は甘えるようにゴバンに擦り寄る。するとすぐに再び飛び立ったのだ。

ギアアツ、ギアアツ！

ペソアはゴバンの前で何度か行ったり来たりし、まるでどこかに案内をしたがっているように見えた。そして最後には目の前でホバ

リングを始める。その大きな水晶のような一つ目は、付いてこい言わんばかりに――

ギャアッ――！

もう一度、今度は力強く叫ぶのだった。

「おいおいペソア。俺が捕まってる間にナッツパーツでも見つけたんかよ。でも今はそれどころじゃ……」

言い掛けてゴバンはたと気づいた。ペソアが向かおうとしている方角は北だったのだ。

「……どうせアテはねえんだ」

ゴバンは髪の毛をバリバリと掻くと手綱を引いて、北へと馬車を走らせるのだった。

ペソア・パシエットのガイドによって……

矯正プログラム

「ポイント固定。ノード弾、レベル上限——射出」

パシュッ！という軽い音を立てて撃ち出された弾は、ロブランに命中させた時と同じように——いや、違う。あの時とは比べものにならないくらい、ゆつくりと赤い光の線をたどっていった。そしてもう一つ、今回はターゲットの規模がまるで違う。光の線が捉えた先にあるのはミルレイズポリス——つまり国家そのものだったのだ。その歪みは、まるで人が歩くようなスピードでゆつくりと進んでいく。しかしそれでも問題はなかった。既にポイントは固定しており、時間はかかるが外れることは絶対にあり得ないのだ。

やがてノード弾が引き起こす歪みが城壁に触れた瞬間、強烈な発光が起こった。それはあつという間に膨れ上がって巨大な火球となると、音速を越える衝撃波がパノラマに大気を切り裂いた。たった今まで上空に立ちこめていた雲に大穴が空き、青空が丸く広がっていく。一万近い人間。巨大な城壁や建築物。武器や美術品や工芸品それら全てが、あつという間に蒸発して天に昇っていくのだ。空に開いた大穴の中心をゆつくりと立ち昇る、きこの雲となって……

ミクロン単位でありながら強烈な重力を持ったノード弾は、一種のミニブラックホールだった。それは次々と物質を吸い込みながらエネルギーを放出し、火薬ではあり得ない大爆発を引き起こしたのだ。もしも優れた技術によって制御されなければ、弾は永遠に物質を吸い続け、間断なく続く爆発はやがて地球に重大な危機をもたらしたことだろう。だがもはやノード弾は存在していなかった。ターゲットに触れた瞬間に、ここまで道案内してきた赤い光の線は消え、ノード弾そのものをも別の空間へ持ち去ってしまったからだ。いや、

その赤い光そのものが、別空間だった。その解放時間が爆発のエネルギーを左右する。魔法でも何でもなく、それはテロメアが生きた時代の技術の産物なのだろう。

「…では帰るとしよう。転送準備だ」

テロメアは、きのこ雲を背にしながら上機嫌に言った。女たちはそろってうなずき、うち三人の女が皆を取り囲むようにして立ち、そして目を閉じた。彼女たちは物質転送用の端末でもある。

「テロメア様、地下施設より報告です。さきほど転送した神器の一部に僅かな欠損が見られるとのことです。恐らく転送の際の事故と思われるですが…」

別の一人が言った。彼女は言わば通信士だ。

「問題のレベルは？」

「既存の技術を越える箇所のため、修理には研究の必要がある…とのことです」

「そうか…まあいい。既に一つ手に入れているし、まだポリスはあ
る。それより私たちは大丈夫なんだろうな？『欠損』では済まされ
んぞ」

テロメアは三人の女たちに顔を向けた。未だ変わらずに瞑想して
いたところを見ると、転送準備には時間が必要なのだろう。

「はい。さきほどはミルレイズ城内の空間が安定せず、止むなく送
りましたが、ここは問題ありません」

「そうか…」

「明日はいかが致しましょう。やはり別のポリスを？」

また別の一人が訊ねてきた。さしずめ参謀と言ったところか。

「いや、その前にルーマの精神矯正を急ぐ必要があるな。ただポリスを殲滅するだけなら私一人でも容易いが、我々の最終目標は文化の破壊ではなく、この世の人間全ての抹殺だ。最後の一人までいぶり出すには、ルーマの力が必要になるだろう」

「ですがテロメア様。この二日間、私たちはルーマを観察していましたが、あの激しい感情を前にどうすればいいのか、どのような矯正プログラムを組むべきか？解答が導きだせないのです。今も続けてはいるのですが…」

テロメアは一瞬不快そうに顔を歪めたが、すぐにそれを緩めた。

「フフ…どうやらルーマを扱うのは、人間の心を持つ私の方が向いているようだな」

「申し訳ございません」

やがてテロメアたちを囲う三人の女たちの周囲を、光がまとい始める。徐々に強くなる光はテロメアたちの姿を見えなくしていき、最後には言葉だけがその中から聞こえてきた。

「いいことを思いついた」

「…と、おっしゃいますと？」

「服従させるための特別なプログラム…とても言おうか。それも感情のある人間にしか効かないプログラムをな、思いついたのだよ…」

その言葉を最後に、光は忽然と消えた。そこに人がいたことはもちろん、何かがあった痕跡すら残さずに。

遠方では今もまだ、きのこ雲が静止画のような不気味な陰影を見

せ、それが引き金となっているのだろうか？自然ごととは思えない
入り乱れる風が、地面の草木を激しく揺らすのだった。

・ ・ ・

「兄ちゃん、この先には行かねえ方が無難だぜ」

小さな村を通り抜けようとした時、道端に露店を構えていた老人
が、突然話しかけてきた。

「言葉の通じる人間がいたんだな」

ゴバンは手綱を引いて馬車を止める。

「ああ、ワシは昔ポリスで傭兵やってたことがあつてな」

「で、なんでこの先はヤバイんだ？」

「機械病の巣があるからさ。だから誰しも北へ向かうことを恐れる
ま、おかげでポリスや盗賊がこの村まで来ることもねえんだがよ。
村人が誰もお前さんに寄ってかねえだろ？みんな外の人間に慣れて
ないんだよ」

目の前に無防備に陳列してある果物を撫でながら、老人は無邪気
に笑う。

「うまそうだな。それ貰ってくわ。で、機械病の…巣？それどこに
あんの」

「真北さ。行きゃあ分かるけどな」

「爺さん、行ったことは？」

「むかーしに…」

「…ふーん。ところでその脇の機械なんだけど。それも売り物？」

ゴバンは何の役にも立ちそうにない、幾つものメーターの並ぶ機械を指差した。興味を持ったのは、それが人型をしていたからだ。

「ん、こいつか？こいつは親友だった。もう…ガキの頃の話さ」

老人は懐かしむような笑みを見せる。

「…じゃあ、機械病に？」

「ああ、その巢でよ。発病した。ワシの目の前でな。フルボディと
かって言ったか？綺麗な体でな。この村じゃあ羨望の的だったが、
町に出りゃあ確実にパーツにされちまうようなヤツだったよ。でも
なんであの歳でなあ…」

「何歳の時に？」

「15〜6ん時かなあ…」

老人は果物を渡しながら、肩に乗るペソアを指差す。

「兄ちゃんの鳥もそんなとこじゃねえのかい？」

「…まあな」

——今も親友さ——

その言葉をゴバンは飲み込むと、老人に代金を渡した。

「じゃあな、爺さん。長生きしろよ」

ピシッ！

ゴバンは手綱を叩き、馬車を進ませた。

時の移ろいが、その深いシワが、かつての苦悩をも飲み込むのだ
ろつか？別れ際に見た老人の顔は、最後まで変わらずに笑顔だった。

とても無邪気で、苦悩の全てから解放されたかのような…

ゴバンは今までに何度か、この類の表情を見せる老人に出会ったことがある。それは死の間際だったり、かつて経験した地獄を語る時であったり、とうてい笑顔とは結びつかないような時だ。その心情は、おおよそゴバンに理解できるようなものではない。

パシエツトでさえ、死の間際には生への執着があつたと今にしてみれば思える。彼は最期の時まで、探求をやめることはなかったからだ。また、そうでなければいけないとも思う。だが老人が時おり見せるあの悟り具合はなんだろう？ 長い時が与えた強さなのか、或いはあきらめなのか——ゴバンには分からなかった。いつか自分にも分かる時が来るのだろうか？

しかしゴバンは首を振り、それを否定した。少なくとも今はまだ分かるべきではない。

「なあ、ペソア？」

しかしペソアは何の反応も見せてはくれなかった。

ここに至り、ずっと道案内を続けてきたペソアは静かになっていた。この先にあるという機械病の巣——そこにゴバンを案内しようとしたことは、まず間違いない気がした。そして、そこにルーマがいることも…

「おい、期待していいんだろうな？」

ギャアッ！

ペソアは大きな声で鳴いた。ゴバンの言葉に答えたのか？

いや、違った。馬車がなだらかな登りを越えた時、その眼前に広がる景色にペソアは鳴いたのだ。「あれが目的地だ」と言わんばかりに。

「あれが…」

そこにある景色をなんと形容していいものか——一言で言ってしまうえば、ポリスなどとは明らかに規模の違う、大都市の廃墟だった。しかしそれだけではない。幾つも立ち並ぶ建物の中のアちこちに、地面の隆起した場所が見える。

ピシッ！

ゴバンは鞭を振るい、速度を上げる。近づくほどに大地の放熱が引き起こす大気の揺らぎは少なくなっていく、解像度の上がる景色の詳細を、ゴバンの瞳はハッキリと捉え始めた。隆起は自然のものではなく、それはまるでゴミの山のように見える。実際にそこ以外にも、都市の中の至る所にゴミは地面の中から突き出していた。

ここが北の大地——しかも荒れ果てた荒野でなければ、それらは繁殖する植物に覆い尽くされていたかも知れない。しかし今そのゴミを覆うのは、長い時の流れを思わせる堆積物がほとんどで、小さなゴミなどは恐らく完全に地面に埋もれているに違いない。そして地面から突き出して散在するゴミは、もともとかなり巨大なものだったのだらう。

やがて廃墟の中に至り、ゴバンは馬車を止めて辺りを見回した。そしてようやく気づいたのだ。

「ゴミじゃねえぞ！？——これ…」

ゴバンが目にしたのは、種々雑多な朽ちかけた機械の山だった。5メートル以上にも及ぶ用途不明の機械や戦車のような兵器。それから数十センチほどの小さな機械など様々だ。そのほとんどが赤黒い錆に覆われ、元の形さえ失いかけている。そして中には人型を思わせるものも…

「みんな元人間——ってわけかよ…」

ジエネやパシェットの最期を知るゴバンは茫然と首を振り、その
圧倒される光景をしばらくの間、ただジッと眺めていた。

・
・
・

「…それじゃあ、お前は这个世界に人間はいないっていつのか!？」

窓のない真つ白い部屋の中で、ルーマは一人椅子に座り、自分と
瓜二つの女たちに言葉を返した。だが、ルーマも似たような、体の
ラインにピッタリとした衣服を着せられていたため、見た目には髪
が長いということぐらいの違いしかない。他の女たちは皆一様に髪
が短かった。

その三人の女（彼女たちに個々の名前はなく、総称してPフィギ
ユアと呼ぶか、もしくは複雑な素体ナンバーがあるぐらいだった）
は、そろって小さくうなづく。しかし続いて言葉を発したのは一人
だけだった。もちろん、三人同時に話されてもいい気持ちはしない
が…

「その言葉に間違いはありません。なぜなら機械病ウイルスは蛋白
質細胞——つまり、人間本来の細胞に取りつくことができないから
です。この世界の人間は皆必ず機械病になりますから、従って本当
の意味での人間は存在しません」

しかしルーマは強く首を横に振って否定した。

「嘘だ！私は機械病にかかっていない人間も知ってるぞ」

「フルボディのことですか？」

「う…うん」

全てを知っているかのようなPフィギュアの言葉に、その語気は弱まった。もちろんルーマはまだ知らないのだ。ジエネがボルトになったなど…

「フルボディ——そのデータもあります。通常、この世界の人間は機械病により肉体に機械化が起こる部分と、起こらない部分の半々に別れます。フルボディはそのうち、機械化が起こる部分のみで体全身が形成されているのです」

「だからジエネは機械病になんか——」

「フルボディは発病が遅い傾向があるのです。その人間は何歳ですか？発病の平均値はだいたい14歳ですが…」

「——13歳。じゃ、じゃあジエネはこれから機械病になるって言うのか!？」

Pフィギュアはコクリとうなずく。

「——もしも発病したら…?」

「全身が機械となりますから、生存は不可能です。私たちはフルボディのことをノイマノイドと呼んでいます」

ルーマは呆然と、その体を背もたれに預けた。ジエネが機械になるなど——。そしてその時不意に、ドツタ城でテロメアがゴバンに向けて発した言葉を思い出した。テロメアはゴバンに『戦闘用ノイマノイド』と、確かにそう言った。

「…じゃあ、戦闘用ノイマノイドっていうのは何だ?」

Pフィギュアは一瞬、答えるのに少し躊躇したようだった。話すことに問題がないかをチェックしているのだろう。

「ノイマノイドの中でも特に対ショック性と、強い回復力に秀でたタイプで、テロメア様のボディがそれです」

「機械病にはならないのか？」

「テロメア様はなりません」

「ゴバンは！？」

苛立たしげにルーマがせつついた。

「…どちらとも言えません。もしもテロメア様と同じように数千年前のノイマノイドであれば、感染することもないでしょうが」

「なぜ？」

「機械病ウイルスそのものが、この世界の半ノイマノイドと共に進化したからです。しかし万が一、ウイルスが突然変異を起こして昔の形状に変化したならば、感染することになるでしょう。だからテロメア様は急いでいるのです——ルーマ様。これ以上の質問は矯正プログラムに支障を来しますのでおやめ下さい」

尚も質問をしようとするルーマを、Pフィギュアが制した。

「これでお分りでしょうか、ルーマ様。つまりこの世界の人間は自然な存在ではなく、極めて生体的で高度な機械を生まれながらにして持っているのです」

Pフィギュアは機械のように淡々と言葉を続ける。

「テロメア様の目的とは、自然ではないこの世界を浄化すること。そして元の、自然のままの人間世界を再び復活させることにあります。真の人間を作り出す方法にはめどがつかしました。しかしその前に、この世界の人間を無くしてしまわねばなりません。そのために

ルーマ様の力が必要なのです。どうかご協力下さい」
「……………」

その思想の影にテロメアがいることは、ルーマにも容易に見抜くことができた。彼女たちPフィギュアは単なる歯車でしかなく、だから当然、ゴバンのことで彼女に怒りをぶつけることも（今では）できなかった。というより無意味なのだ。ここに捕らえられた初日こそルーマは暴れまくったし、一人の時のPフィギュアを組み伏すこともした。殺すことだってできたはずだ。しかしただ無感情に「やめて下さいルーマ様」を繰り返す彼女を殺したところで、何の意味があるだろう？

この部屋を脱出しようとすることも初日でやめた。脱出を誘うがごとく時に開け放たれた扉も、どう見てもそこに何もなければずなのに、ルーマだけが出られないのだ。Pフィギュアの後に続いて出て行こうとしたが駄目だった。理屈が分からな過ぎて、今ではとつくに脱出もあきらめている。

結果、その後の数日間は途方に暮れ、ただ彼女たちの言いなりになって矯正プログラムというものを受けさせられた。だが、何も効果は得られないようだった。「感情のある精神には効果が得られないのかも知れない」と、彼女たちが話しているのをルーマは聞いている。ここに来て唯一嬉しかった瞬間だ。

そして今日は朝からずっと、Pフィギュアたちは自分たちの正当性を訴え続けている。テロメアが抱える正義というやつなのだろうが、正直うんざりだ。しかしその説明の節々からうかがい知れるこの世界の歴史に、少なからず小さな興奮を覚えたことは確かだ。ルーマはそれを自分の中で整理することに努めた。——察するに、かつて人間は自然なままの姿を捨て、ノイマノイドと呼ばれる生体的な機械となっていた時代があった。しかしやがて機械病により、彼らの時代は終わったということなのだろう。

この話をゴバンにも教えてあげたい——ルーマはそう考えた。し

かしふと「あの時」を思い出し、彼女の心が強く軋む。今でも忘れられないのだ。ゴバンの苦しむ顔が…

「ルーマ様、お返事をいただかないと真意が分かりかねます。テロメア様に従いますか？」

もちろんそんなことはできるわけがない。テロメアがいくら自然を取り戻すと言ったところで、彼がやろうとしていることは、ルーマが今まで出会った人たちを殺すことでもあるから…

「——ここから出して…ゴバンに合わせて…」

椅子に座ったままうつむき、そう言うのが精一杯だった。

「それはできんな！」

「!？」

その突然の声に、ルーマだけでなくPフィギュアも入口を振り向いた。ルーマの表情は瞬時に険しくなる。

「お前たちはもう休んでいていいぞ」

扉から現れたテロメアは、Pフィギュアたちに言った。

「しかし今日から新たな矯正プログラムを組んだのですが…」

「それはもういい。私が一番効果的な方法を考えた。やはり感情を持った者に感情のないお前たちでは役に立たん、後は私が引き継ぐ。なんなら別室で見えていてもかまわんど。学習のためにな」

「かしこまりました」

Pフィギュアたちは揃って礼をし、部屋を後にした。するとテロメアはルーマに顔を向け、いきなり淫猥な笑いを見せるのだった。

「フフ…それにしてもいったいどうやればそれほど完璧な人間の感情が持てるのか知りたいものだ。あの時逃がしてやったゴバンという男。もう一度会ってみたい。もっとも私を恐れて二度と会いたがらないかも知れぬがな」

テロメアの物言いは陰険だったが、ルーマは、ゴバンが助けにくてくれることなど微塵も期待していなかった。来て欲しくないとさえ思っていたかも知れない。なぜならドツタ城でのことが、ルーマにとって想像以上の苦しみだったから…

肉体の痛みならば我慢のしようがあるのに、精神の痛みというのは、どうしてあれほど耐えがたいのか？精神が破綻するのではないかとさえ思えてしまう苦しみを、どうやって耐えればいいのか？ルーマには分からなかったのだ。

しかしルーマはそんな胸の痛みを表面に出すこともなく、尚もテロメアを睨む。彼女なりに戦っていたことは確かだった。

「ルーマ。お前は何を思い私を睨むのだ？その感情は何を考えている？私には分からない。だが…面白い」

「…私のことを作つたくせに分からないのか？」

「フン…確かに基本を作つたのは私だが、人間の精神というのは私の想像を越えるものでね。私はお前の中に戦闘に必要な要素を全て入れ込んだ。他のPフィギュアたちをまとめあげる能力もな。しかしそれだけだ」

テロメアはルーマの間近まで顔を近づけて続ける。

「それ以外は一切、手を入れていない。感情を持たせようとする手

間など一切な。だから不思議なのだ。或いはゴバンという男が、お前の中に足りない何かを植え付けたのかも知れないが、しかし謎だ。時が許せば私も学者として究明したいものだが…今はそれどころではないのだな」

テロメアの手がルーマの頬に近づき、彼女は反射的にそれを叩こうとした。しかしムダだった。その素早さをも上回るテロメアの手が、ルーマの手首をつかんだ。

「クツ…」

「だから私は、お前を人間として扱うことにする」

さらにもう一方の手がルーマの頬に近づき、同じことが繰り返された。テロメアはルーマの両腕を片手でつかみ直し、ついに彼女の頬にその手を触れた。しかしその瞬間、ルーマはその手を噛み付く。うと牙をむく。

「おっと！」

しかし寸でのところかわし、ニヤリと笑うテロメア。

「ハハッ！面白い。…ところでお前は知っているか？人間を服従させる一番の方法はな、精神的ショックを与えることだ。しかも特別大きなショックを…」

「…な、何をするっ!？」

男の顔がいつそう近づき、ルーマは抗うようにして背後に逃げる。

「私は嬉しくて興奮しているよ。何しろPフィギュアたちとではまるで面白みがなくてね。お前のように…そうだ。抵抗するがいい。」

その方が面白い。フツ…フハハツ…」

不意にルーマのふくらはぎにベッドの縁が当たり、バランスを崩して背後に倒れこむ。

「あつ!?!」

バサリ!と、その上に二人はもつれた。シートいっぱい、ルーマの長い金髪が広がる。

「ヤメロツ!」

ルーマは必死で抗う。しかし彼女の最も優れた瞬発力でさえテロメアには適わないのだ。ましてや力でなど…

ルーマは確かにゴバンが助けに来てくれることなど期待していなかった。しかし…

「…ゴ…バン……」

そう口にする以外、彼女に何ができただろう?

・
・
・

しばらく廃墟の中を探索していると、ゴバンには他の場所と比べてどうにも不自然に思える場所があった。そこは都市の外れであるにも拘らず、都市のどの場所よりも機械の残骸が多かったのだ。しかもその場所に向かう途中で果てたとも思える残骸が、ポツリポツリと点在している。

「行ってみよう」

馬車を走らせ、その目的の場所に向かう。そして目の前に立った時、確信のようなものを感じた。残骸の山の中に、明らかに人為的に機械がどけられた道ができていたのだ。いや、どけられたのではない。それがいったい何によるものなのか分からないが、種々雑多に積み上がる機械の山はスツパリと切られ、切り通しの道になっていた。こんな信じられない力を持つ人間など、テロメア以外には考えられない。

「ペソア、お前はここにいな」

ギアアツ！

ゴバンは肩の上にいたペソアをカポンの上に乗せ、自分は馬車を降りると、両脇に機械の断面を見ながら一人その道を歩きだした。見上げると切り通しの隙間から細長い青空がのぞき、白い雲が横切っていく。のどかだ。そして尚も歩いて行くと、道の先は真っ白な壁で終わっていた。壁は四角く窪んではいたが、扉らしきものは見られない。

「ここで終わりかよ……」

ため息をつきながら壁にポンポンと手をつき、体重を預けた瞬間だった。その壁が突然消えたのだ。バランスを崩したゴバンは壁の向こうへ転がり込んでしまう。

「な、なんだよ一体！？」

あわてて体を起こし、声を上げながらキョロキョロと辺りを伺う。後ろには今もペソアたちの姿があり、一度開いた入口が閉じてしまいうこともなかった。しかしその内部は暗やみで何も見えない。

だがその時、いきなりパアッ…と、通路の天井一面に真つ白い光が点つたのだ。光はゴバンが今までに見たことのない類のもので、まるで天井そのものが光っているかのような、ムラのない均一な光だった。それまで暗やみを見据えていたゴバンは、その眩しさに思わず手をかざす。

やがて、ようやく明るさに慣れた眼が捉えた内部の景色は、緩やかに下りながら一直線に続く長い長いスロープだった。

——罨かも知れない…

ゴバンはしばらくの間、入るべきかどうか迷い、後ろの力ポンを、その上に乗るペソアをジツと見つめる。そしてしばし、今では遠い過去のようにも思えるパシエットの顔を思い浮べた。

パシエットは勝算のない戦いを挑んだだろうか？

答えはNOだ。

しかしそれは戦いを回避する方法がある場合に限られる。戦うしか手がなければ、例え勝算がなくてもパシエットならば仕掛けるだろう。最高に部隊の士気を高め、少しでも兵隊が生き残れる確率を高めようと努力するだろう。今では分かる気がする。戦争の中に身を置かざるをえない人間が生き残るための、それが唯一の手段なのだ。

ゴバンは今、瞳を向けた先にパシエットを見ていた。あれから二年が経ち、既に年上となったゴバンは笑顔と共に自信をのぞかせる。そしてかつてのパシエットに語りかけるのだった。

「お前はいつも未来を見てるんだもんな」

ギアアッ！

ペソアが鳴いた。ゴバンの言葉が解るはずがないのに、親友はハッキリと答えたのだった。

マスターユニット

ルーマはベッドの上に茫然と座り、一人ガタガタと震えていた。それが恐怖なのか、怒りなのか屈辱なのか、その区別は彼女自身よく分らない。ただ一つだけ言えることは、もうこの先何が起ころうと絶対にテロメアを許さないということ。例えそれと引き替えにするのが自分の命だったとしても、ルーマは迷わないだろう。

「ゴバン…」

ルーマは小さくポツリとつぶやいた。

今この時ほどゴバンに会いたいと思ったことはない。生まれてからずっと、ゴバンと出会ってからずっと、ルーマには自分が何者なのか？人間ではないかも知れない負い目を持ってゴバンと接してきた。ゴバンも同じ思いなのだと分かっている、それを氣遣ってやれない自分がいた。ゴバンにはかり負担をかけさせていたことに気づいたのだ。

きつと今、ゴバンは苦しんでいるに違いない。そしてきつと、自分のことを助けようともがいているに違いない。だからこそ助けてあげたい——ルーマはそう思っていた。こんな幽閉された状況下にあって可笑しな話だが、それが彼女の本音だったのだ。

「…ゴバン？」

そしてルーマは気づいた。どこかそう遠くない場所にゴバンを感じるので。しかもそれだけではない。他にも何かを感じる。

彼女は今、感情を持って以来押さえ付けられていた何かの力が、

ハッキリと目覚めるのを感じていた。

・ ・ ・

「なぜ止めたのだ！」

別室に戻ってきたテロメアは激しくPフィギュアたちにまくしたてた。

「申し訳ありません」

「謝るな！理由を言え。まさかお前たち、嫉妬をしたわけではないだろうな？」

Pフィギュアは微かに首をひねる。

「嫉妬という観念がよく分からないのですが……」

テロメアは大きくため息をついて首を振ると、いくぶん語調を弱めた。

「フン……そうだろうな。それよりなぜ止めたのだ？」

「テロメア様、お忘れですか？マスターユニットに仕掛けた安全装置を」

「安全装置だと？」

「はい。マスターユニットはPフィギュアをまとめあげるという特殊な能力により、1体しかドナーツリーから生まれないう、プログラムされています」

テロメアは思い出したようだったが、Pフィギュアは続ける。

「そして万が一マスターユニットに何かあった場合、すぐに別のユニットが製造されるよう安全装置が組み込まれていたはずです。その起動条件は、マスターユニットが死亡した場合と…」

「…何者かに姦通された場合だったな。そうだった」

テロメアが言葉を挟んだ。

「はい。その場合敵に利用されないようマスターとしての特殊能力は失われ、直ちにツリー内で新たなマスターユニットの製造に入ります。ただそれにはかなりの時間を要しますし、止めるのが得策と判断したのですが…」

テロメアは大きく息をつき、首を左右に振ると、悔しさを押さえながら小さな声で言った。

「…よく止めてくれた。ルーマの感知能力はこの先、必要なものだから——っと、待て！まさかルーマの能力は失われていないだろうな？あの女のゴバンへの固執は異常だ。もしか…」
「その心配はありません。端末でチェック済みです」
「そうか…」

テロメアは安堵の息を漏らす。

「それよりテロメア様。たった今、施設内で異常を検知しました。侵入者です」

「——？そんなはずはないだろう。この世界の蛮族どもがこの施設に入れるなど…いや」

今度はテロメアもすぐに気づいた。一度は欲情に溺れた彼も、冷静さを取り戻したのだろう。

「場所は分かるか？」

「扉の開閉状況から予測はできます」

「ではすぐに捕獲に向かえ。ヤツを捕らえれば、ルーマを服従させることができるかも知れん」

「無傷での捕獲を望めますか？」

テロメアは顎に手を当てて考えた後、言った。

「…いや、生きていればいい」

Pファイギアたちは一斉に部屋を後にした。

一人残ったテロメアは僅かに顔をしかめ、嘆きにも似た表情を見せるのだった。

「——ルーマを作ったのは私だというのに…」

・
・
・

どう考えてもそれは不自然だった。

これが罠であるなら特定の扉だけが開かれそうなものだが、ゴバンが施設内に入ってからというもの、行く先々の全ての扉がゴバンのために道を開いたからだ。とはいえ、出入りが自由な敵のアジトというのも不自然であり、ゴバンはここにルーマがいるという自信が揺らぎ始めていた。

だがそれは、実際には単純な話だった。ゴバンとテロメアは言わ

ば同じタイプの肉体を持っていて、この施設のセキュリティは、その体を持つ者に対しては機能しないのだ。もちろん、そんなことはゴバンに知る由もないのだが…

ゴバンは今まで見てきた部屋の中でも特別に大きなホールの中にいた。この施設に入ってから、通路や部屋の至る所に機械化して果てたかつての人間の死体があつたが、この部屋は特に多かった。というより、ほとんど機械に埋め尽くされていると言つていい。そしてここも入口にあつた時と同様、切り通しの道ができていたのだ。ゴバンは迷わず道を進み、今度もまた白い壁の前に立ち、そこに手を触れた。だがその瞬間だった。

（上だっ！！）

強烈な声が、ゴバンの意識に割り込む。

「ルーマかつ!？」

上を見上げ、真つ先にゴバンの目に飛び込んできたのはルーマの顔だった。だがそれは違う。Pフィギュアだ。しかも手には忘れようもない光——ゴバンの腕を切り落とした短刀を持っている。

ドゴオオンッ!

迷わなかった。

ゴバンの左腕はブロウバックされ、天に向かって放たれた弾丸はPフィギュアの胸を貫いた。ルーマと同じものかも知れない返り血が、ゴバンの顔にピシャツ…とかかる。

ゴバンは冷静だった。背後に気配を感じて顔を向けると、切り通しの道をダッシュして既に目前まで迫るPフィギュアがいた。ゴバンは逆手で山刀を抜き、突進するPフィギュアを背中ごしにスルリとかわすと、後ろ手のまま刀を喉元に突き刺した。

その背後からさらにもう一人。今度はしっかりと振り返って手の

ひらを相手に向けるが、そのPフィギュアはすかさず切り通しの壁を駆け上がり、その射撃線上から体をズラした。だがゴバンも心得ていた。すかさず反応して照準を合わせる。彼女たちの動きはルーマよりも遅い。

ズゴオオオッ！

完璧な射撃で肉体を貫き、流れ弾は積み上がる機械の山に突き刺さる。音を立てて機械は次々と崩れていき、足場を失い、それと一緒に落ちていくPフィギュアの姿も何人か見えた。上から隙を伺っていたのだろう。しかしその中の一人は落下中にも拘らずに壁を利用して駆け下り、ゴバンの目前まで肉薄する。しかしすれ違いざま、容赦なく山刀がその体を切り裂いた。

崩れる機械と共に落下したPフィギュアたちも、それで果てたわけではなかった。何人ものPフィギュアたちが血を流しながらも起き上がり、一斉にゴバンを見据える。そして一気のダッシュで間をつめようとタメを作った瞬間、ゴバンは彼女たちのすぐ上の、切り通しになった機械に狙いを付け、撃ち放った。

轟音と共に崩れる機械の山。声にならぬ声を上げながらPフィギュアたちはそれに埋もれていく。辛うじて抜け出した唯一のPフィギュアも、立て続けの二発目の弾丸に貫かれた。

ルーマと同じ顔を持つものの、少しばかり能力の低いPフィギュアたち。その体はやはりルーマと同じように生身の人間に極めて近かった。それは屍となり、穴の開いた体から臓物がはみ出ている様を見ても分かる。崩れた機械の下敷きになって無事でいられる者はいないだろう。

やがて辺りは沈黙すると、ゴバンは大きく息をつく。

ガラン…

いや、まだだ。音がしたその方向を見ると、崩れた機械の隙間から這うようにして抜け出ようとするPフィギュアの姿があった。顔は鮮血に染まっている。ゴバンは詰め寄りながら叫んだ。

「おい！ルーマはどこにいる！？」

「——その質問二八…答えられない…」

機械的であることを抜きにしても、その喋りは明らかにおかしかった。するとそのPフィギュアはいきなり、ゴフツ…と激しく吐血した。内蔵がやられているらしい。

ゴバンはその瞳をじつくりと見る。その無感情な眼差しは、洞窟で初めてルーマの瞳を見た時のことを思い出させた。彼女もルーマになり得る可能性があるのだろうか？とも思う。しかしPフィギュアの戦意は失われていなかった。尚もゴバンに対して短刀を突き刺そうと手を伸ばす。だがそれは『戦意』などというものではない。

ゴバンは山刀を真つすぐ振りおろし、引導を渡してやった。命令のままに動くその様が、あまりに哀れに思えたのだ。

ゴバンにとって、ドツタ城の時とは決定的に違うことがある。それは『覚悟』だ。

ルーマと瓜二つの無表情な少女たちが何者なのか、ゴバンにはよく分からない。だがそれ故に大砲を撃てなかった躊躇が、ドツタ城での惨劇につながった。ルーマをさらわれ、ロブランも死んだ。目的を達成するために負う、代償にもいとわない覚悟。それがあの時のゴバンには足りなかったのだ。

クレイ事だけでは切り抜けられないギリギリの環境——それは現実存在する。それを知らないで平和を求める馬鹿らしさを、生きる者全ての幸せを求める馬鹿らしさを、ゴバンは知ったのだ。

—— たった一人だけでいい——

ボルトとなったジエネを見つめながら誓ったあの時のことを、ゴバンはこの先忘れないだろう。

ゴバンはもう一度大きくため息をつき、最後に殺したPフィギュアに背を向ける。そしてふと、戦闘に入る前に聞こえたルーマの声

のことを思い出していた。

しかし今となつてはそれも確証がない。何かの拍子にPフィギュアたちが声が出し、それがルーマの声に聞こえたということもあり得る。だがいずれにしろ、ゴバンはここが遺棄された遺跡ではないということを確信することができた。もちろん、ルーマがこの施設のどこかにいるということも…

扉を越えてさらに奥に進むと、そのゴバンの自信はより高まつた。その部屋もやはり広がったが、ここでは機械化した人間の死体は一つも見当らなかった。しかしそれに代わつて、明らかに機械病によるものとは質の違う、機械らしきものが至る所に設置され、それはどこかミニチュアの町並みを思わせる。らしきもの…というのは、それがゴバンにとつては見慣れない形をしていて、機械特有の武骨さも、メーターもスイッチも、何もついていなかったからだ。しかし中には何かの立体映像や光を出しているものも幾つかあり、それが生きた機械であることは明らかだった。

そしてゴバンはもう一つ、大きな発見をした。ホールの一角に二つの神器があつたのだ。

（ドツタにあつたヤツだ!？）

そのうちの一つを見て、ゴバンはすぐに悟つた。ルーマが入れられていたのと全く同じカプセルが割れていたからだ。そこにルーマがいるわけでもないのに、ゴバンの足は自然と神器へと向かう。そしてその前まで来た時だった。

「——その左手は神器で再生したのか？フフ…監視モニターで見させてもらった。なかなかの戦いぶりだったな」

不意の声に慌てて振り返ると、そこにテロメアとPフィギュアの集団が立っていた。

「…ようやくご登場かよ。おい、ルーマはどこだ？」

「貴様が案ずることではない。あれは私のものだ。それよりもこれを見るがいい」

テロメアの言葉と共に、突然床が青白く光りだした。すぐにそれは透明な床となり、その下には――

「!？」

ギョツとした。ゴバンはそのまま床を凝視し、離すことができない。それは床の下に整然と安置された、この世界の半機械人間たちだったのだ。

ゴバンは床いっぱいに並ぶ人間の数々をおぞましく思いながらも、しっかりと見据えた。男はもちろん女子供から老人。それに発病前の赤子の姿もあった。ポリスの紋章を付けたベクターらしき人間もいる。

「――Pフィギュアたちが集めた貴重なサンプルだ。どうだ？ 貴様たちが言うところの人間の姿は」

「…サイアクの趣味だな。死体プレイでもすんのかよ」

テロメアはギリツと奥歯を噛む。

「品のない男だ。生き死にはどうでもよい。私が言いたいのはその体だ！ 秩序もなくバラバラに機械が混在した半ノイマノイドたち。それが人間か？ えっ!？」

実際、ゴバンの足元にいた男の腕はスパナを思わせたし、顔には何の役にも立ちそうにないメーターが幾つも付いていた。恐らく、

感覚器官のどれかに障害があるだろうし、正直、見栄えもよくない。

「…俺にとっては人間さ。話せばみんないいヤツらだろうよ」

「フン！貴様は何も解っていない。こんな下らぬ世界で生きたがために、貴様の目は曇っているのだ。だが私は違うぞ！機械病に犯されたあの時代。次々とノイマノイドという高度な機械が、より原始的な機械へと変態する様を見てきた。病気に感染することのない自然な人間への回帰は、あの時代誰もが願っていたのだ！」

「ゴチャゴチャうるせーな。それよりルーマはどこだ！」

「…まったくうるさいヤツだ。これでいいか？」

呆れるように肩をすくめるテロメアの脇を、突然光が包んだ。まるで魔法のように、そこに2体のPフィギュアに抱えられたルーマが現われたのだ。

「ルーマ！無事かつ！？」

しかし彼女は瞳を閉じたまま小さくコクリとうなずくだけで、ゴバンを見ようとしてもしない。

「——おい、こいつに何かしたのかよ！？」

「言い掛りはよしてもらおう」

そして次の瞬間、テロメアの表情が不敵に変わっていくのを感じた。

「！？」

（右に避けて！左腕を狙われてる。機械の裏に回り込むんだ！）

突然、ゴバンの耳にルーマの声が割り込んできた。疑問に思う間

もなく体が動くゴバン。その指示に従わなければいけないような気がしたのだ。そして僅かに遅れてテロメアが放った赤い光が、ゴバンの脇を擦り抜けていく。

「はっはあ！いい反応だ。貴様にそんな動きができるとはな。旧式の戦闘用ノイマノイドと思ってナメていたが——しかしそうではなくては面白味がない」

テロメアは脇にいたPフィギュアに、何か合図を送った。

確かにテロメアの言う通り、今の警告がなければ避けきれなかったかも知れない。しかしテロメアはそのことをまるで気にしている様子はない。或いは聞こえていないのか？

「ちょうどいい。貴様の後ろにある神器を見る！それが今の半ノイマノイドたちを生むきっかけとなったものだ。いや、それ以外考えられん！まだ詳しいからくりは分かんが、機械病との共生を目指した愚かな科学者たちの仕業に違いないわ！」

ルーマの声が再び警告する。

（ゴバン。目の前の機械の両脇からPフィギュアが2体近づいてる。右からならテロメアの視界に入らない。そっちから倒せ！）

どういう理屈なのか分からないが、今は心に直接呼び掛けてくるルーマの声を信じるしかなさそうだ。

テロメアは尚も叫び続ける。

「ノイマノイドたちは本来絶滅しているはずだった！機械病によってな。だから私は自分が感染する前に、地下で眠りについたのだ。そして機械病と共に全てが絶滅した後に目覚め、安全な地でゆつく

りと人間研究を続けるつもりだった。ところが起きてみたらどうだ！？薄気味悪い半ノイマノイドたちの世界——しかも機械病は相変わらず猛威を奮っている。その神器が、そして作った人間が全ての元凶だよ！」

ブツッ！

肉体に突き刺さる刃物の鈍い音。ゴバンが2体目のPフィギュアに突き刺した山刀の音だ。そのまま切っ先をひねると、声もあげずにPフィギュアは即死する。テロメアに悟られないため、大砲は使えない。しかし——

（すぐ左後ろにもう1体！山刀じゃ間に合わ——）

ドゴオオ——ン！

轟音がホール内に響いてしまった。

「——！？又ウツ、よく気づいたな！」

さらに、端末とリンクしている脇のPフィギュアからも報告を受け、2体の刺客が既に殺されたことをテロメアは知る。

「——くそっ、まとめていけ！」

テロメアの合図に、さらに十人近いPフィギュアたちが一斉に駆け出して行った。

・
・
・

瞳を閉じたままのルーマは今、全く別次元の映像を見ていた。

それを何と言ったものか——全てを数値化して捉えているとでも言うのだろうか？ テロメアやPフィギュアたち。そして見えない位置にいるゴバンさえも、彼女には見えていた。それぞれをそれぞれの形として捉えながらも、その表面に複雑な数式が張りついているといった風に。しかもその意味がひと目で、彼女には把握できるのだ。例えばPフィギュアが次にどんな動きを見せるのか、その予備動作である筋肉の動きさえもが次々と数式化され、それを完璧に把握することができた。

視点も自在だった。ルーマが意識を変えるだけで、数式化されたゴバンの顔のアップから施設全体の俯瞰図まで自由に見える。見たい場所が見たいように見えた。彼女は今、近隣の物理的情報の全てが手に取るように分かるのだった。

しかし何よりも理解できたのは自分自身だ。テロメアが言うところの、自然な人間の肉体に自分がきわめて近いということや、脳だけがナッツパーツと同じように白痴であること。それを補うテロメアの人工的なプログラムや、そのプログラムを可能にするための肉体的な瞬発力が強化されていること。そして一番大切な、感情を持つきっかけとなったゴバンや、日常世界との接触。それらが全て見える。そして自分の中に潜む、特別な能力のことについても。

——ゴバンを助けてあげたい…

その強まる思いが、それを可能にした。

ルーマ自身は思いもしないことだったが——つまり、服従した者に対してのみ力を発揮するという彼女の潜在能力が、今発揮されているのだ。ただしそれはテロメアではなく、ゴバンに対して…

もしもルーマに感情が芽生えなければ、服従は簡単なことだっただろう。当初のプログラム通りテロメアが主人となったはずだ。しかし感情を持ったが故に、それを難しくさせていたのだった。ただ正確に言えば、今の彼女にとってそれは服従とは少し異なるのだが…

ルーマは無限とも思える数式を見比べながら、自分が何のために

作られたのかを初めて実感していた。

ゴバンを指揮し、彼の最大のピンチを救うこと。自分にとって一番大切な人を守ること——それ以外には考えられない。

・ ・ ・

辺りの床は一面血みどろになり、さっきまでの殺戮の音が嘘のように、静寂が空間を包んだ。もはや残っているのはルーマを拘束する2体のPフィギュアと、テロメアだけだ。それを知ったテロメアは明らかな動揺を示していた。

「ぜ、全員殺られたというのか！？こ、こんな…バカな。なぜ貴様にそんなことができる。まるで全てが見えているとでも——！？」

テロメアはハッとして何かに気づいた。そして凄まじい形相でルーマを睨む。

「お前か！お前はゴバンに服従したのか！？」

テロメアの顔が強烈に歪んだ。自分の作り出したものと思うようにならない苛立ち。テロメアは容赦なく平手打ちをすると、ルーマはようやく瞳を開け、鋭い瞳で睨み返した。

ギリギリと奥歯を擦り合わせるテロメア。

「くそがあっ！」

「うっ！」

ガッツ！と、みぞおちにテロメアの突きがまともに入り、ルーマ

は床に倒れた。そのまま意識を失う。

「——ルーマ、どうしたっ!?!」

「許さん…許さんぞゴバン!」

一瞬顔を出したゴバンだったが、すぐにテロメアの赤い光が飛んできてそれが顔をかすめた。再びゴバンは身を潜ませる。

フーツ、フーツと激しく興奮するテロメアの合図と共に、残り2体のPフィギュアがゴバンに向かって駆け出す。しかし彼のその激しい怒りは尋常ではなかった。苛立ちというだけではない。それは紛れもなく『嫉妬』だった。

ゴバンはホールの一番禺にある機械の後ろにいた。そしてルーマの助けが期待できなくなった今、とにかく集中に努める。耳を澄ませ、気配を感じ取るうとした。

(右か!)

微かな気配を感じて、ゴバンは飛び出した。だがそこにPフィギュアはいない。

(——!?!?)

方角は合っていた。だがPフィギュアは機械を乗り越え、上から飛び降りてきたのだ。反応が一瞬遅れる。山刀では間に合わない。判断したゴバンは、激しい轟音を響かせて大砲を撃ち放った。その腹部に風穴を開ける。

(当たり前!次は…)

敵に位置を悟られたはずだ。すぐさま移動——しかしそれは既に

遅かった。駆け出そうと振り返ったゴバンの前にはPフィギュアがいて、振り下ろされる短刀をかるうじてかわす。

「クッ！」

すかさず大砲を放とうとするが、まだ撃てない。大気中のエネルギーを物質化させるには、少しばかりの時間が必要なのだ。Pフィギュアの返す刀をゴバンはとっさに山刀で受けとめられない。山刀はまるで抵抗感なく根元から真っ二つに切れ、さらにゴバンの右肩をも切り裂いた。

しかしそれでも切られたのは皮のみだ。ゴバンはうまく避け、Pフィギュアがもう一度刀を振るおうとした直後、大砲がうなった。
ドゴオオオッ！

（二体目！後は…）

そして、再び別の場所へ駆け出そうと体を反転させたその時――

「ポイント固定…」

青空

二人は10メートルほどの距離を置いて、相対する。まるで蛇のように舌なめずりするテロメアと、奥歯を噛み締めるゴバン。

「フハハッ！これで終わりだな。人のものを取るからこうなる。馬鹿者が！」

その赤い光の線は、ゴバンの左腕をしっかりと捉えていた。手を動かしてみても、それはしっかりと付いてくる。

「これで貴様がいなくなればルーマは私のものだ。ハハッ！」

しかしゴバンはゆっくりと首を左右に振る。

「違うな。俺がいなくなってもルーマは自分の意志でものを決める。人形じゃないんだ！」

「フン！貴様のようなガキに何が分かるというのだ。例えルーマが人形じゃないとしても、服従させるなど簡単なことだ。支えであった貴様が死に、逃げ場のない絶望を与え続ければな。いつか必ず服従するだろう。人間の精神などそんなものだ」

「…分かった」

ゴバンはぼそりとつぶやいた。

「何だ、観念したのか？だが今さら服従したところで許す気もないぞ」

ニタリと笑うテロメア。ゴバンは小さくため息をつくと一転、噛み付くように叫んだ。

「うるせーな、分かったんだよ！テメーのバカさ加減がよ」

「な、なんだと！？」

「テメーは人間を知らねーんだ。だからそんなことが言える。だからこの世界を壊そうなんて考えるんだ。そいつが人間を作る研究？バカすぎて笑っちゃうな」

ゴリツ…という、あからさまな歯ぎしりの音がテロメアから響いた。ゴバンは努めて冷静に、瞳を床下の人間たちに落ししながら淡々と言葉を続ける。

「さっきから聞いてりやあよ、お前は自分の身力ワイサに逃げ出しちまったただけだ。挙げく、自分の思い通りになってねえからって全部作り替えだ？勝手もいいとこだな。俺はお前が眠っちゃった間にもあきらめないでよ、姿形が変わろうがなんとか人間を継承しようとしたヤツらの方が信じられる。意味が…分かるか？」

そして不意に顔を上げ、ゴバンは床を指差しながら叫んだ。

「こいつらがどんなに不気味でも、姿がヘンでもよ。それは人間なんだ！心を持った人間だ！テメーにその命を奪う権利なんかねえっ！」

激しく、そして怒号のようにゴバンは叫んだ。それは彼にとって、そしてルーマにとっても、ずっと問い続けてきた疑問の答えでもあった。今ではハッキリと言える。

二人は長い間睨み合い、やがて興奮を押さえるよう、震えるよう

な鼻息と共にテロメアが言った。

「——フツ…フツ…残念だよ。できるなら貴様をもつといたぶつてから殺してやりたかったがな…」

テロメアの右手に殺気がこもろうとした瞬間、ゴバンは突然駆け出した。

「フツ…フハハハッ！どこへ行こうというのだ？馬鹿め。例え何万キロ逃げたところでこの光から逃れることはできんぞ」

ゴバンはテロメアに背を向けて走った。見えない場所へ——逆にテロメアは、逃げるゴバンの姿に気をよくしたように勝ち誇る。

「フフフ…さあ、間もなく私は創造主となるぞ。ナッツパーツに、この世界の半ノイマノイドどもが持つ自然の脳を入れるのだ。神器を使ってな。脳の特徴にあったナッツパーツを作ることなど、私には容易いしなあ…フツ。そうして人間の完成だよ！今私はようやく半ノイマノイドたちを、そして神器を作り上げた先人たちに感謝することができる」

テロメアは満面の笑みを浮かべながら、ゴバンの気配を探した。既に走ることをやめ、どこかに隠れてしまったらしい。だがもはやそれはどうでもいいことだった。ノード弾はどんなことがあっても必ず目標に辿り着くからだ。施設に被害は及ぶかも知れないが、また作り直せばいい。それはPフィギュアたちも同じことだ。神器ですらこの世界にはまだ替えがある。そしてルーマも手に入れた。材料は全て揃ったのだ。後は unnecessary なものを処分さえすればそれでいい。

「ノード弾、レベル4。射出！」

パシュッ！

テロメアから放たれたその歪みは、到達すれば戦闘用ノイマノイドであるゴバンをも容易に砕くレベルのものであった。

「ゴバンよ、最期に聞くがいい。私が思い通りの世界を作ろうとしているのは確かだよ。だがその何が悪い？ 要は力さえあればいいのだ。頭があればいいのだ。そして私にはそれがある！ フハッ、フハハハハアッ！」

ド…ッオオオオーン！！

ホールの一角——大きな機械の背後で激しく閃光を放ち、火球は部屋一面を真っ赤に染めあげた。爆発に巻き込まれて破損した機械の部品がテロメアの元にまで吹き飛び、その幾つかは彼の皮膚を切り裂いた。しかしそれも瞬時に再生していく。

テロメアは既にバラバラになっただろうゴバンの元へ歩き出した。横目でルーマを見ると爆発音にも目覚めることなく、今も気を失ったまま倒れている。爆発のあった場所はこのホールの中では、ルーマから一番遠い場所だった。

「なるほど、ルーマの元まで破片が飛ばないようにという配慮か？ けなげなことだ。ルーマも恋人の最期が見れなくて残念だったな。絶望というヤツを見せてやるべきだったかも知れん。ククッ…」

笑いながらテロメアは、ゴバンの粉々になった死体を見下ろす。
——だが

「…いい、いない！？」

そう、確かにいなかった。その場所に爆発痕はあったものの、あ
るはずのゴバンの死体が、バラバラになったはずの体の一部すらも
見当らなかったのだ。テロメアは慌てて辺りを見回す。

「——ここだよ」

「!？」

ドゴオオオッ!!

背後の声を聞いて振り返った瞬間だった。弾丸はテロメアの左胸
に直撃。肉体はノイマン細胞の耐性を遥かに越えて貫かれた。心臓
は微塵となって飛び散り、背骨を、あばらを粉々に砕く。胸に大穴
の開いたテロメアは、弾丸の衝撃により背後の壁に激しく衝突。反
動で弾かれると、今度は顔面からグシャリ!と床に落ちた。その上
から、弾丸によって砕かれた壁の破片がバラバラと落ちる。

だがしつこい。ピクリ…と、テロメアの手は尚も動こうとする。
痙攣ではない。確かな意志のもとにそれは動いているのだった。胸
の穴から止め所なく溢れる血液を物ともせず、ひたすら前へ前へと
床を這いつくばる。そして震えるように顔を上げたが、その視界を
塞いだのは血のしたたり落ちる手のひらだった。

ゴバンは手のひらをテロメアの頭に向け、見下ろすようにして立
っていた。

「…な…ぜ…？」

テロメアの焦点はまるで合っていない。本来なら即死の状態を、
戦闘用ノイマノイドの凄まじい強靭さが支えている。だがもはや時
間の問題だ。例え驚異的な細胞の再生が血を止めたとしても、彼に
はもう心臓がない。再生するための細胞一つすらないのだ。

その様を見たゴバンは、テロメアに向けていた左手をゆっくりと
引いた。

「肉を削いだのさ。光の当たってた場所のな」

そして、右手に持っていた湾刀をクルリと器用に回転させ、鞘にしまふ。今もえぐれたままのゴバンの二の腕は次々と再生し、したり落ちる血液は見る見る少なくなっていくた。

「クツ…そうか…ゴフツ！」

テロメアは口から大量の血を吐きながらも、かすれる声で続ける。

「…貴様は…いいのか？いつか突然変異が…機械病が…お前を襲うかも知れんの…だぞ…それで…も…」

「そんなモンいちいち気にしてられるか。死ぬ理由なんざどこにでも転がってるしよ。それより、最後にひとつだけ聞かせろ」

テロメアは虚ろな瞳でゴバンを睨む。ゴバンも探るような眼でジツと見返した。

「俺を作ったのは本当にお前じゃないんだな？」

「あ…あの時代…誰も…が…様々なこ…とを…ゴフツ！した。

…ハア。その…名残り…」

そう言うつとテロメアの瞳はグルリと上を向き、ガクリと顔を床に伏せた。それを見つめながら、ゴバンはフウ…と、小さく息を付く。恐らく、彼も知らないのだ。

「…結局分からずじまいかよ」

その時、遠くの方でルーマの不安そうな声が響いた。

「――ゴバン？ゴバン！？」

「ま、それもいいか…」

ゴバンはそう言つて一人笑い、ルーマの元に急いで駆け寄つていった。そうだ。自分が、そしてルーマが人間であることには変わらないのだから…

「ゴバン！本当に無事か！それにテロメアは！」

ルーマはゴバンが自分の目の前に現われてもなお、不安そうに訊ねる。

「死んだよ。ほら、立てるか？」

「…うん」

ルーマはゴバンに手を引いてもらい、みぞおちを押さえながらも立ち上がった。

「痛えのか？」

「ううん、大丈夫。…ごめん、ゴバン。けっきょく一人で戦わせて…」

「んなこたねーよ。力んなったさ」

そう言つてゴバンは、命を救つてくれた湾刀を彼女に手渡す。

「帰ろうぜ。歩けるか？」

「うん…」

そうして二人は出口に向かって足を向けた。ゴバンはルーマを支

え、そしてルーマも感慨深いものがあるのだろう。瞳をジッと閉じて——いや、違う。

顔を上げて突然ルーマが叫んだ。

「ゴバン、まだ死んでない！」

「!？」

「危ないっ！」

ルーマはいきなりゴバンの体を突き飛ばす。

「——ポイン……ト……固定」

未だに生き長らえていることが信じられなかった。テロメアは顔を再び上げ、右手をこちらに向けていたのだ。それは異常なまでの執着——自分よりも上の存在を許さないという、究極の自己愛だった。そのみが彼の体を突き動かしている。

赤い光はゴバンをすり抜け、背後にあった神器に当たっていた。

「クッ……外した……か……。だが……終わり……。皆……吹き飛ばし……やる。ノード……レベル……上限………射出」

パシュッ！

その言葉を最期に、テロメアはガックリとその場に果てた。しかしノード弾はそれとは全く無関係に、人が歩くようなゆっくりとしたスピードで神器を目指す。

「ルーマ、逃げるぞ！」

「ダメだ、ゴバン！あの歪みは今までのとは違う。私には分かるんだ。爆発の規模が！」

「それでも逃げねえとよ！」

ゴバンはルーマの腕をグイッと引つ張るが、彼女はそれを頑なに拒む。いくら走って逃げたところで結果は同じだということを、ルーマは知っていたのだ。

「待つて！何か方法は…」

ルーマは瞳を閉じてうつむき、別次元の景色を見た。その中の無数の数式から答えを導きだそうと模索する。しかしその間にもノー・ド弾は無情にも進み、確実に神器に忍び寄る。やがて――
強烈な火球が二人を飲み込むのだった。

・
・
・

微かにパシエットの顔が見えたような気がした。

――なんでこんな世界になったんだよ――

それがパシエットの最期の言葉だった。

もしもテロメアの生きた時代にパシエットがいたら、彼はその時代を否定しただろうか？

いや、そうは思えなかった。恐らく最期の時まであきらめることなく、人間を前へ進ませようとしただろう。機械病はしょせん病気でしかないのだ。前へ進めば当たり前に出てくる、単なる障害の一つでしかないのだ。そして前に進みながら解決することこそ、彼の言う科学に違いない。解決できるかどうかは運しだい。どうしようもないこともある。だが、あきらめてはいけないのだ。

ゴバンは意識が潰えるまでのほんの僅かの間に、ただそんなこと

を考えていた。

・ ・ ・

（——バン……ゴバン……ゴバン！）

目を覚ますと、そこには全天の青空が広がっていた。一番見たかった景色だ——ボンヤリとゴバンは思う。しかしそれを人の影が覆った。

「ジャマ……だ。見えね……よ」

「ゴバン？ どうしたんだ？」

「……………」

尚もボーツとしながら、視線だけはルーマに向ける。それは徐々に、ゴバンが本当に見たかったものに変わっていくのだった。そして突然——

「……ルーマかつ……!?」

ゴツンッ！

一瞬間を近づけたルーマと、起き上がったゴバンの額が思いっきりぶつかる。

「……っ たあああ……」

「あ、ワリイ、ルーマ。平気か？」

ルーマはゴバンに背を向け、地面にベッタリと座りながら本当に

痛そうに額を押さえている。そこは荒野の中にオアシスのように広がる緑地で、その柔らかな触感に気づく余裕もなく、ゴバンは四つんばいで駆け寄っていった。するとルーマはクルリと顔を向け、満面の笑みのままゴバンに飛び付く。

「良かった！その分だと平気みたいだな。なかなか起きないし、あの時空間に歪みがあったからどこか欠損したのかと思ったぞ」

「ちょ、ちよつと待てよルーマ。俺、今なんか頭がパニックってよ。何がなんだか分かんねーんだけど…」

ゴバンの胸に顔を押しつけていたルーマは、いきなりひよい！と、顔を上げる。

「キスしたら治るか？」

「ば、バカヤロウ！それより説明しろって」

顔をしかめるゴバン。それを面白そうに見つめながら、ルーマは説明した。

あの時、目に見える全ての数式を一瞬のうちに解析し、ルーマは生き残るための答えを探していた。そして既に息絶えたPフィギュアの中に物質転送用プログラムを見つけ、それを瞬時に転写して自分で試してみたのだった。Pフィギュアたちを統括するために作られた、ルーマだけの能力といいいい。転送のために必要な膨大な大気からのエネルギーも、ノード弾が爆発した時の凄まじいエネルギーから奪い、本来時間のかかる転送を一瞬のうちに済ませたというわけだ。

「座標合わせてる暇がなくて不安だったんだけどな。でもうまくいった良かった」

ルーマが向いた方角を見ると、遠くの地平に入道雲——いや、違う。巨大なきのこ雲の頭部分が見えた。ゴバンは思わず立ち上がり、その凄まじい爆発が生み出す雲を、しばらくの間戦慄と共に見つめる。ルーマもそれに倣った。

「あつ!?!」

ゴバンが突然叫んだ。

「どうしたんだ?」

「ペソアとカポン!あの遺跡の入口に置いてきたんだった!」

「!?!」

もう一度祈るような思いできのこ雲を見た。信じられない大きさだ。とてもペソアたちのいた場所が無事とは思えない。

ゴバンは唇を噛み締め、ルーマも瞳を伏せて押し黙る。——いや、だがそれはやはり押し黙ったのではなく、ルーマは全く別のものを見ていたのだった。

「そんな顔するな、ゴバン」

「え?」

やがて顔を上げると、ルーマはクルリと瞳を回してこう言った。

「案外近くにいるみたいだぞ……ほら!」

その指し示された先に見えるシルエットが、ゴバンには信じられなかった。きのこ雲の少し右。かなり遠くはあったが、それは紛れもなく空をはたくペソアと、地を駆るカポンの姿だったのだ。しばし茫然としながらそれを眺めると、ようやくゴバンは口を開いた。

「——で、でも…なんでだ？あの爆発の中から逃げ出せるなんて…」
「…ここからだよく分からないな。ペソアの中、数式の量が多すぎて——もしかしたら私よりも…」
「どづいうことだよ…？」

もう一度瞳を伏せていたルーマが再び顔を上げると、首を左右に振った。

「だから分からない。でも…ペソアには分かったのかも知れないな。ノード弾が射出されたこととか、逃げ出す方法とか…」

その言葉に、ゴバンは直感的に感じるものがあつた。思えばペソアは機械病で変態したにも拘らず、その構造は何らテロメアの時代のテクノロジーから劣っていないように思えるのだ。ジェネが赤い色に自分の個性を残そうとしたように、パシエットの機械に憧れる心がそれを可能にした——そう考えるのは非科学的だろうか…

「でもその理屈からするとよ——まあカポンを連れてきたのは上出来としてだ。主人を助けようとかそういうことは…」

「ペソアらしいんじゃないか？そういうの」

フフフ…とルーマが微笑む顔につられ、顔をしかめていたゴバンも笑った。ペソアは生物として当たり前に、自己防衛を最優先したのだろう。どうやったのかは分からない。ルーマのように転送したのかも知れないし、別の方法かも知れない。だがいずれにしろ、一緒にいたカポンを救っただけでも立派なものではないか。

「なんかアイツ。あのまま宇宙まで飛んでいつちまいそうだな…」

ゴバンはそのシルエットを見つめながら、満足そうにつぶいた。

これから、ずっと

「どうだ？」

真剣な顔でゴバンを睨み続けるルーマ。その胸元にはネックレスが光り、チェーンの先には赤いボルトが結ばれていた。緊張しているのか、ルーマは意識することなくそこに手を当てている。

一方、ゴバンは眉間にシワを寄せて目を閉じていたが、不意に顔を上げ、じつくりと含むように――いや、実際に含みながら答えた。

「…うまい」

「え！？」

「うめーよコレ。マジで！この間と全然違うじゃん」

真剣に一口を味わっていたのから一転、ゴバンは目の前にある料理をむさぼるようにがつつき始めた。

「良かったあ！エルメさんにも太鼓判押されたんだ。ホントだぞ！」

「うん、分かる分かる。最初の頃はメチャクチャまずかったもんな」

「う~~~~っ…」

いじけるルーマの髪の毛をガシャガシャと撫でてやるゴバン。少々荒っぽくもあるが、ルーマはその感触が何よりも好きだった。

二人が席につくテーブルの脇では、ペソアがベッドの上で気持ち良さげに寝入っていた。いったいどんな夢を見ているのか――恐らくあの大脱出のことなど何も覚えていないに違いない。

「ゴバン、明日からまた出るんだろ？」

「ああ、でももう旬も過ぎてるからな。今回は長くなるかも知んね

え」

一瞬、表情に陰りを見せるルーマ。

「長く…そうか。あ、じゃあまたエルメさんの所にいるな。すごく喜んでくれるし…」

そう言っただけルーマは笑ったが、その表情はどこか不自然だった。しかしゴバンは気づきもしない。

「ルーマは食べねえの？」

「あ、食べるよ。…そうだ、お茶飲むか？今日買ってきたんだ。すぐ煎れてくるから食べてて」

「ん、ああ…ワリイ」

ルーマは返事を聞くよりも先に立ち上がり、キッチンへと向った。そしてゴバンに気づかれないように、小さなため息をつくのだった。

・ ・ ・

ゴバンはベクターの仕事をやめなかった。

もちろん最初はルーマの手前抵抗もあったが、少なくともゴバンは現実を生きていて、生活もしなくてはいけない。そしてこの世界にはベクターという仕事があり、収穫されたナッツパーツや神器の存在が、機械病による死亡率を減らしている事実もある。仕事も嫌いではない。それだけのことだ。

ルーマもベクターという仕事そのものについての不満は全くない。以前のようなコンプレックスもないつもりだ。ただ唯一の不満は、

ベクターの仕事にゴバンが連れていつてくれないことだった。もちろんそれは彼なりの気遣いだろうし、気持ちそのものは嬉しい。それだけに本音をさらけ出すことは、彼の気持ちを踏み躪るような気がしてルーマにはできなかったのだ。一緒に行きたいなど…

実際のところ戦争は増えつつあり、ポリスの外は以前よりも遥かに危険な場所となっていた。ミルレイズポリスが跡形もなく消え去ったことは宗教勢力を強めることになったし、ドッタポリスの内乱は近隣に混乱を招いている。しかし何よりも、神器を中心に回っているこの世界にあつて、その数が7から5に減ったということの意味は大きい。より少ない神器を奪い合うことになるからだ。とりあえず今のところは、ゴバンたちにその火の粉が降りかかることはなかったが…

だが、ゴバンは思う。神器を中心に回ってはいても、争いは絶えずなくとも、この世界は確実に前に進んでいる。恐らくは再び何かしらの障害が出てくることもあるだろう。しかしそこにはパシエットのような人間が必ずいて、流れを断つことなく解決する方法を模索してくれるはずだ。今の世界は必ずしも成功の果てに生まれた世界とは言えないかも知れないが、この次は必ず——と。

そうして、いつか機械病をも克服した遠い未来。人類は果たしてどちらの体を選択するのだろうか？機械なのか肉体なのか？——恐らく、その時代を生き抜くのに最も適した体を、人類は選ぶことになるだろう。それが進化というものだから…

・
・
・

茶葉の入ったガラスの器に熱湯を注ぎ、それを黙って見つめながら考え事していると、いつの間にかゴバンが後ろに立っていた。

「――？あ、何か用か？ゴバン」

ルーマは振り返ってニツコリと笑顔を見せる。

しかしその顔をジッと見つめるゴバンに、ルーマの瞳は泳いだ。隠している表情が出そうになる。本音を言ってしまうくなる。だが挫折そうになるより先に、ゴバンの方が話し出した。

「――あのよ…」

「？」

しかしそう言ったきりゴバンは目線を逸らして黙ってしまう。何かおかしい。それが何なのか解らなくて、彼女の中の不安は好奇心へと変わっていった。

「あ、料理うまかった。ごちそうさん」

「うん、いいよ。ところで何だ？」

「…ああ、つまり俺が言いてえのは――これからもルーマの料理を食べたいって言ったら、やっぱマズイか？」

「…え？ああ、そんなの構わないぞ。ゴバンが帰ってくる頃にはきつともつとうまくなつてると…」

「いや、そのな。俺の料理ってアバウトだろ？栄養学的にも問題があるって、前に言われたからよ。その、ベクターとしてはもっと栄養に気を使っべきだと思うんだわ」

「あーあれは…えーと、ゴバンに料理まずいって言われて、つい…その――エルメさんの聞きかじりだからそれ言われると…」

ルーマは照れ臭そうに笑った。ゴバンに初めて料理を作った時に喧嘩になり、知識だけは豊富なルーマが、ゴバンの料理にイチヤモンを付けたことがあったのだ。

しかし、ゴバンは髪の毛をバリボリと掻いて顔をしかめると、と

うとうルーマの顔を見てきっぱりと言った。

「――俺と一緒に来ねえ？明日」
「え……」

ようやくルーマは、ゴバンの言わんとしていることが解った。

「あ、別に料理が目当てってわけじゃねーぞ。外が危険なのは分か
ってるしよ。ぶっちゃけて言えば、お前と一緒にいてえんだ」

ルーマは、その突然の言葉が信じられなかった。キスを初めてし
てもらった時のような……いや、もっとだ。あの時よりも胸が高鳴る。
なぜか素直にゴバンの顔が見れない。

「……ダメか？」

ルーマは下をうつむいたまま首を左右に振った。

「ううん。ダメじゃないよ。私もゴバンと一緒にいたい。ぶっちゃ
けて言えば……」

そして顔を上げ、お互いの視線が合うと二人は笑った。急に嬉し
さがこみ上げてくる。

「エルメ婆さん、ガツカリすっかな？」
「……でも喜んでくれると思うぞ」
「そうだな……」

それは容易に想像がついた。

「なあ、ゴバン…私、ずっと料理作ってやるからな…」

ゴバンの二の腕にソツと触れながら、ルーマは何か決心を固めるように言った。その真剣な瞳を見つめながら、ゴバンはニツコリと笑ってうなずく。

「ずっとか？」

「うん、ずっと…」

ゴバンは吸い寄せられるようにルーマの唇に顔を寄せていく。すると…

「——あっ!？」

不意にブンツ!と、後ろを振り返るルーマ。その時になってようやく、キッチンに置かれたままの忘れられた存在に気づいたのだった。

「お茶っ!」

「え？」

それは既に色が出すぎて、もはや何の飲み物なのか分からなくなっていた。真っ黒だ。

「…おいルーマ。なんで茶っ葉がこんな詰まってるんだ？」

「え、な、何か違うのか？」

「フツーこんな葉っぱ入れねーだろうがよ!」

「こ…これはエルメさんに教わってないから…」

酷かった。何しろお茶の葉が器の淵ギリギリまで浸っている。

「——一番高いの買ったのに……」

笑いを必死で堪えながら頭を抱えるゴバンだったが、ルーマの泣きそうな顔を見てそれを何とか押さえた。そして、頭をガシヤガシヤと撫でながら――

「お茶は俺が煎れてやるよ。これからずっと……」

――終わり

これから、ずっと（後書き）

作者の克太ツツミです。

「META「L」」を最後までご愛読頂き、ありがとうございました。

このお話は執筆から数年が経過した物を投稿したのですが、如何だったでしょうか。

お気に入りのキャラクターやシーンはありましたか？

感想など少しでもお聞かせ頂きますと嬉しいです。

またこれからも、新たな作品を投稿していく予定ですので、応援よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5721e/>

META[L] - メタル -

2010年10月9日16時45分発行